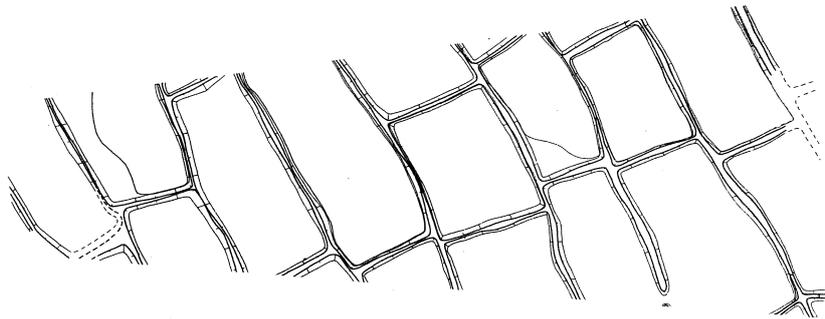


太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊

かみ にし はら い せき
上 西 原 遺 跡

こん ほとけ い せき
附 汲 仏 遺 跡



2000年3月

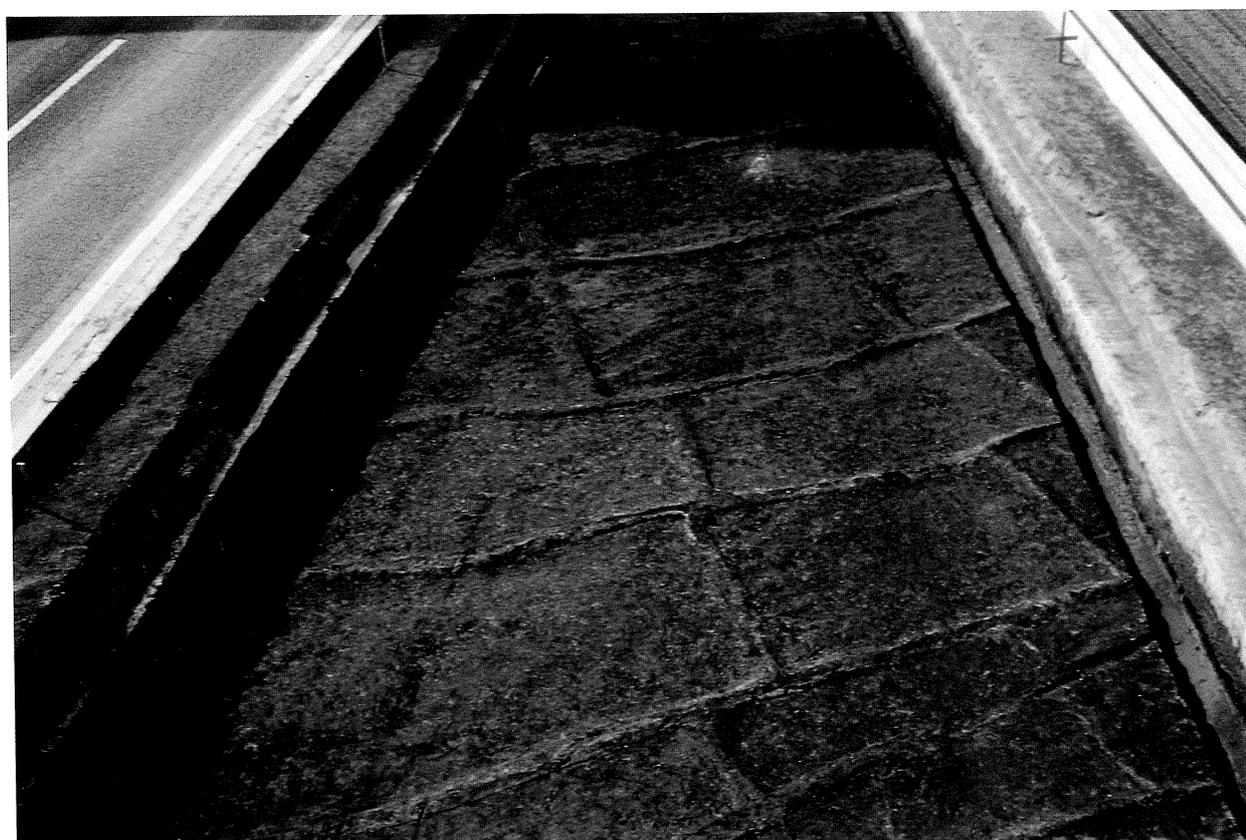
高松市教育委員会

例 言

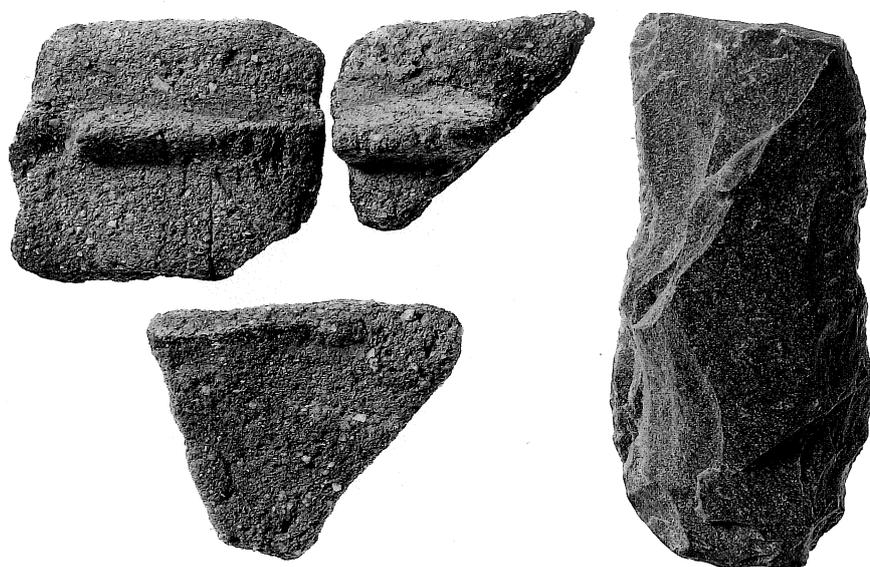
- 1 本報告書は、太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第三冊で、高松市木太町に所在する上西原遺跡の調査報告を収録した。また、多肥下町に所在する汲仏遺跡の調査報告についても、合わせて収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
川村教一（香川県立高松高等学校） 杉本和樹（西大寺フォト）
- 4 上西原遺跡の調査は、平成6年度に文化振興課文化財専門員山本英之が道路側溝工事に伴う立会調査を行い、本調査を平成7年12月15日～平成8年3月31日まで山本が行った。整理作業は、同文化財専門員川畑聡が行った。
- 5 汲仏遺跡の調査は、平成9年度に文化振興課文化財専門員山本英之が道路側溝工事に伴う立会調査を行い、讃岐文化遺産研究会末光甲正がこれを補助した。整理作業は、山本指導のもと、末光が行った。
- 6 本報告書に関わるプラント・オパール分析については、古環境研究会（代表外山秀一【皇學館大學助教授】）に委託し、報告（第5章）をいただいた。
- 7 本報告書の編集・執筆は、第6章および写真図版9～13を末光が行い、その他を川畑が行った。
- 8 本文の挿図として、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松南部」および高松市都市計画図2千5百分の1「木太2」「太田」を一部改変して使用した。
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 10 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は第1・2・38図が座標北を、その他は磁北を表す。
- 11 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD…溝 SK…土坑 SP…柱穴 SX…不明遺構



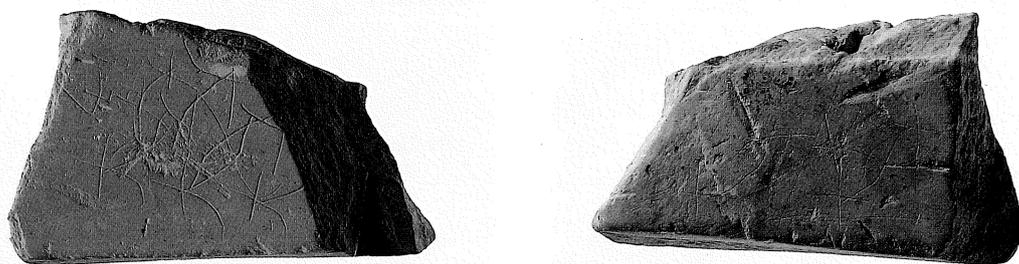
1 上西原遺跡1B区第3遺構面大畦畔(弥生時代前期)



2 上西原遺跡2区第3遺構面不定形小区画水田(弥生時代前期)



1 上西原遺跡1B区第3遺構面大畦畔付近出土凸帯文土器・打製石鋤



2 汲仏遺跡「大」字線刻石(平安時代)

はじめに

太田第2土地区画整理事業は、市街地南郊外の田園地帯において、本市が鋭意進めている大規模な街づくりであります。面積は約360.3haに及ぶ全国屈指の規模を誇り、昭和63年度から開始され現在も進行中であります。この区画整理事業は、われわれに快適な生活環境をもたらすとともに、今まで遺跡が空白であった平野中央部に、未知の遺跡を発見する機会をもたらしました。

これら新たに見つかった遺跡は、必要に応じて、本市教育委員会によって発掘調査を実施しており、調査終了後は出土遺物の整理を行い、報告書を随時刊行しております。本報告書は、区画整理事業に伴う発掘調査報告書としては3冊目にあたり、今回は上西原遺跡の内容をまとめました。

上西原遺跡では、日本で稲作が最初に普及した弥生時代前期にさかのぼる水田址が発見されましたが、この遺跡周辺では同じ頃の水田址やさらに古い縄文時代晩期にまでさかのぼる農耕具が発掘されています。現在の木太町から林町にかけての地域は、これまで確認された中では、高松平野で最も早くから稲作が行われた地域なのです。

また、本報告書では、区画整理事業に伴い立会調査を行った汲仏遺跡も合わせて収録しています。この遺跡では、平安時代の珍しい「大」の字が線刻された石が出土しました。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々や関係者に感謝の意を表すものです。

平成12年3月

高松市教育委員会
教育長 山口 寮式

例 言

- 1 本報告書は、太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第三冊で、高松市木太町に所在する上西原遺跡の調査報告を収録した。また、多肥下町に所在する汲仏遺跡の調査報告についても、合わせて収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
川村教一（香川県立高松高等学校） 杉本和樹（西大寺フォト）
- 4 上西原遺跡の調査は、平成6年度に文化振興課文化財専門員山本英之が道路側溝工事に伴う立会調査を行い、本調査を平成7年12月15日～平成8年3月31日まで山本が行った。整理作業は、同文化財専門員川畑聡が行った。
- 5 汲仏遺跡の調査は、平成9年度に文化振興課文化財専門員山本英之が道路側溝工事に伴う立会調査を行い、讃岐文化遺産研究会末光甲正がこれを補助した。整理作業は、山本指導のもと、末光が行った。
- 6 本報告書に関わるプラント・オパール分析については、古環境研究会（代表外山秀一【皇學館大學助教授】）に委託し、報告（第5章）をいただいた。
- 7 本報告書の編集・執筆は、第6章および写真図版9～13を末光が行い、その他を川畑が行った。
- 8 本文の挿図として、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松南部」および高松市都市計画図2千5百分の1「木太2」「太田」を一部改変して使用した。
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 10 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は第1・2・38図が座標北を、その他は磁北を表す。
- 11 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD…溝 SK…土坑 SP…柱穴 SX…不明遺構

挿 図 目 次

- 第 1 図 調査区位置図
- 第 2 図 周辺主要遺跡分布図
- 第 3 図 上西原遺跡周辺の微地形
- 第 4 図 第 1 遺構面遺構配置図
- 第 5 図 第 2 遺構面遺構配置図
- 第 6 図 第 3 遺構面遺構配置図
- 第 7 図 1 B 区南壁土層図
- 第 8 図 2 区南壁土層図
- 第 9 図 3 区南壁土層図
- 第 10 図 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土遺物実測図①
- 第 11 図 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土遺物実測図②
- 第 12 図 1 B 区第 3 遺構面大畦畔プラント・オパール採取位置図
- 第 13 図 1 B 区第 3 遺構面大畦畔平面図
- 第 14 図 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田区画図
- 第 15 図 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田プラント・オパール採取位置図
- 第 16 図 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田平面図
- 第 17 図 1 B 区第 1 遺構面水田層出土遺物実測図①
- 第 18 図 1 B 区第 1 遺構面水田層出土遺物実測図②
- 第 19 図 1 A 区第 3 遺構面 S X 0 1 平面図
- 第 20 図 1 B 区第 2 遺構面 S D 0 1 ・ 0 2 平面図
- 第 21 図 2 区第 2 遺構面 S D 0 3 平面図
- 第 22 図 1 B 区第 1 遺構面水田層分布図
- 第 23 図 3 区旧河道平面図
- 第 24 図 川津下樋遺跡水田址模式図
- 第 25 図 弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区 C 区第 IX 層検出不定形小区画水田
- 第 26 図 さこ・長池遺跡検出不定形小区画水田
- 第 27 図 さこ・松ノ木遺跡 S X 0 1
- 第 28 図 さこ・長池 II 遺跡不定形小区画水田
- 第 29 図 林・坊城遺跡 SD01 流路 A
- 第 30 図 高松平野中央部の埋没旧流路・低地部
- 第 31 図 微地形分類図
- 第 32 図 試料採取地点 (2 区)
- 第 33 図 // // (1 B 区)
- 第 34 図 プラント・オパール分析結果 (2 区)
- 第 35 図 プラント・オパールの出現傾向 (2 区)
- 第 36 図 プラント・オパール分析結果 (1 B 区)
- 第 37 図 プラント・オパールの出現傾向 (1 B 区)

- 第 38 図 調査位置図
- 第 39 図 遺構配置図
- 第 40 図 柱穴列平面・断面図
- 第 41 図 掘立柱建物平面・断面図
- 第 42 図 掘立柱建物出土土器
- 第 43 図 「大」字線刻石実測図
- 第 44 図 SK01 (須恵器大型甕片埋納土坑)
- 第 45 図 土坑等出土土器 1)
- 第 46 図 土坑等出土土器 2)
- 第 47 図 SD21 実測図
- 第 48 図 SK21 実測図
- 第 49 図 SD21 出土土器

挿 表 目 次

- 第 1 表 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土遺物観察表①
- 第 2 表 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土遺物観察表②
- 第 3 表 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田一覧表
- 第 4 表 1 B 区第 1 遺構面水田層出土遺物観察表①
- 第 5 表 1 B 区第 1 遺構面水田層出土遺物観察表②
- 第 6 表 高松平野の弥生遺跡一覧表
- 第 7 表 水稻作の段階的発展
- 第 8 表 「大」字等出土例
- 第 9 表 汲仏遺跡出土土器観察表

巻頭図版目次

- 図版 1 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 3 遺構面大畦畔（弥生時代前期）
- 図版 1 - 2 上西原遺跡 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田（弥生時代前期）
- 図版 2 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土凸帯文土器・打製石鍬
- 図版 2 - 2 汲仏遺跡「大」字線刻石（平安時代）

図版目次

- 図版 1 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 3 遺構面大畦畔（南東から）
- 図版 1 - 2 上西原遺跡 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田（東から）
- 図版 2 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 3 遺構面大畦畔プラント・オパール採取状況（南から）
- 図版 2 - 2 上西原遺跡 2 区第 3 遺構面不定形小区画水田プラント・オパール採取状況（北東から）
- 図版 3 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 2 遺構面 SD 0 1・0 2（西から）
- 図版 3 - 2 上西原遺跡 2 区第 2 遺構面 SD 0 3（西から）
- 図版 4 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 1 遺構面水田層（西から）
- 図版 4 - 2 上西原遺跡 3 区旧河道（東から）
- 図版 5 - 1 上西原遺跡 1 A 区第 3 遺構面 SX 0 1（東から）
- 図版 5 - 2 上西原遺跡 1 B 区南壁土層
- 図版 6 - 1 上西原遺跡 2 区南壁土層
- 図版 6 - 2 上西原遺跡 3 区南壁土層
- 図版 7 - 1 上西原遺跡 1 B 区第 3 遺構面大畦畔付近出土凸帯文土器・打製石鍬
- 図版 7 - 2 上西原遺跡 1 B 区第 1 遺構面水田土壌層出土土器・石器
- 図版 8 - 1 ~ 37 上西原遺跡プラント・オパール，その他
- 図版 9 - 1 汲仏遺跡柱穴列検出状況
- 図版 9 - 2 汲仏遺跡 SK01 検出状況
- 図版 10 - 1 汲仏遺跡 SK01 須恵器大型甕片
- 図版 10 - 2 汲仏遺跡 SK01 須恵器大型甕（復原部分）
- 図版 11 - 1 ~ 4 汲仏遺跡 SP01 ~ 05 掘削および完掘状況
- 図版 11 - 5 ~ 7 汲仏遺跡 SK01・02，SP02 出土土器
- 図版 12 - 1 ~ 2 汲仏遺跡 SD21 掘削および遺物出土状況
- 図版 12 - 3 ~ 7 汲仏遺跡 SD21 出土土器
- 図版 13 - 1 汲仏遺跡 SP01 出土「大」字線刻石 A 面
- 図版 13 - 2 汲仏遺跡 SP01 出土「大」字線刻石 B 面

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

上西原遺跡は、高松市木太町 322 番地ほかに位置し、太田第 2 土地区画整理事業の中で整備が進められている都市計画道路伏石大池線の予定地に当たる。

太田第 2 土地区画整理事業は、昭和 62 年 2 月 2 日の香川県都市計画審議会による都市計画決定を受けて、昭和 63 年度から実施されている。事業区域は、高松市街の南郊約 6 km の田園地帯で、林、木太、太田、多肥の 4 地区に及ぶ 360.3ha は全国有数の事業規模である。この地域には、一般国道 11 号高松東道路ならびに四国横断自動車道の建設が予定され、これによる急速な市街化が予想されるため、路線沿線の市街化ならびに都市基盤整備を計画的に進める目的で事業計画がなされたものである。

この地域によらず、それまで高松市域の平野部は周辺の丘陵部に比べて周知の埋蔵文化財が極端に希薄な遺跡の空白地帯であった。そこで、高松市教育委員会では昭和 61 年度に国庫及び県補助事業として区画整理事業を対象として『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査事業』を実施し、広範な遺物散布と 20 数基の塚跡等を確認した。

この間に、太田第 2 土地区画整理事業地に含まれる高松東道路予定地 77,000 m²については、市施行の区画整理事業と密接な関わりを有するという理由で、高松市教育委員会が発掘調査を担当することが建設省、高松市、高松市教育委員会の三者間で確認され、調査の準備が進められていったが、区画整理事業に関わる埋蔵文化財の取り扱いについては公式な協議はなされなかった。しかし、昭和 63 年 8 月に松縄町の都市計画道路工事中に天満・宮西遺跡の不時発見を見たため、改めて土地区画整理事務所と協議の結果、道路工事に先立って発掘調査を実施した。そして平成 2 年度からは、「太田第 2 土地区画整理区域内試掘調査事業」として埋蔵文化財調査補助金の交付を受け、都市計画道路予定地を中心に工事前に試掘調査を行い、埋蔵文化財が確認された場合は事業者の負担によって事前調査を実施するように取り扱いを定めた。

区画整理事業関係の埋蔵文化財調査は平成 8 年 3 月までに 6 遺跡の調査を終了し、都市計画道路に関わる調査をほぼ終了した。整理作業は平成 5 年度から開始し、区画整理事業の完了が予定されている平成 15 年度を調査報告書完了の目途として順次実施の予定である。

第2節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

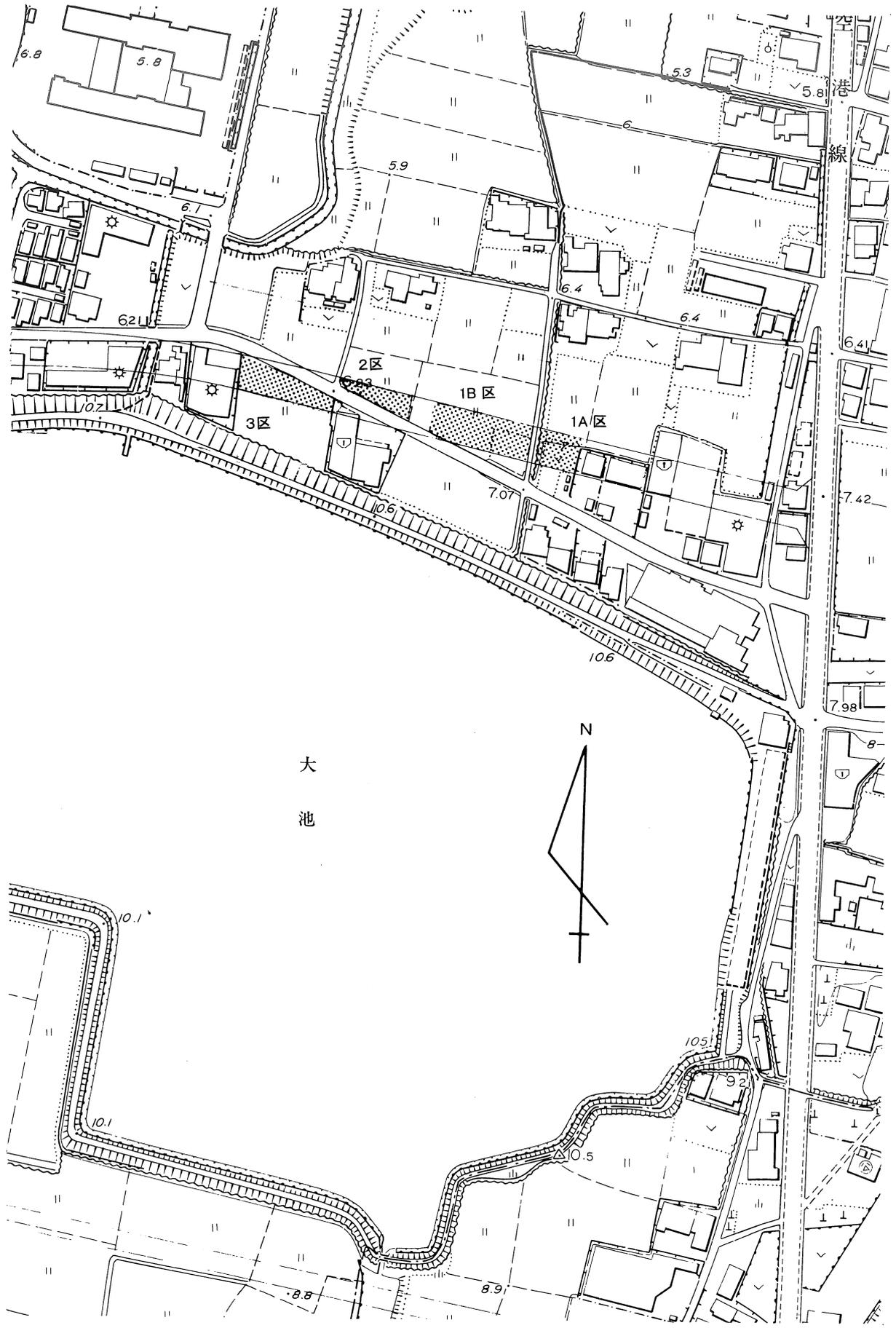
上西原遺跡の発掘調査に先立って、平成 6 年度に高松市教育委員会によって道路側溝工事に伴う立会調査が実施された。立会調査は、道路側溝工事による掘削時に、平面ならびに土層観察によって遺構の有無を判断した。その結果、全ての区間において溝状遺構または畦畔が確認された。以上の立会調査の成果を検討した結果、調査した全域を埋蔵文化財包蔵地と認め、細かな調査対応が必要であると考え、工事請負方式で調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成 7 年 12 月 15 日から平成 8 年 3 月 31 日にかけて実施された。16 m 幅員の道路予定地のうち、総長 154 m 分が調査対象となり、面積約 2,464 m²を測る。そのうち、立会調査が済んだ側溝部分、現有道路や用水路部分などを除くと、実際の掘削面積は 980 m²となった。この現有道路などにより、調査区は 3 つに分かれ、東から順に 1 区・2 区・3 区と呼称した。ただし、1 区は用水路により、1 A 区(東側)と 1 B 区(西側)の 2 つに細分された。それぞ

れの調査面積は、1 A区が 175 m²、1 B区が 475 m²、2区が 197 m²、3区が 133 m²である。
なお、調査の詳細は、次の調査日誌(抄)のとおりである。

調査日誌(抄)

- 12月 15～22日 1～3区において、第1遺構面まで機械掘削をする。
- 1月 5～11日 1～3区において、排水用側溝を掘削する。
- 11日 1B・2区において、第1遺構面精査
- 12日 1B区第1遺構面において、水田層を検出し、写真撮影を行う。
- 16～17日 1A区 SX01掘削する。
- 17日 1B区水田層の平板実測し、第2遺構面まで人力掘削する。
- 19～30日 1B区第2遺構面まで人力掘削する。
- 31日 1B区 SD01・02掘削および写真撮影
2区第2遺構面まで人力掘削する。
- 2月 1日 2区第2遺構面まで人力掘削する。
- 2日 2区 SD03掘削
1B区南壁土層の分層作業
- 5日 2区 SD03写真撮影。
1B区 SD01・02平板実測
- 6～15日 3区人力掘削する。
- 16～21日 2区第3遺構面まで人力掘削する。
- 22日 2区第3遺構面不定形小区画水田写真撮影。
- 23日 2区第3遺構面不定形小区画水田平板実測。
- 26日 2区第3遺構面不定形小区画水田平面図標高測量。
2区南壁土層分層。
- 27日 2・3区南壁土層写真撮影。
- 3月 1～5日 1B区第3遺構面まで人力掘削する。
- 6日 1B区第3遺構面大畦畔検出作業および写真撮影。
- 11日 2区第3遺構面不定形小区画水田平面プラント・オパール採取。
- 12日 1B区第3遺構面大畦畔平面プラント・オパール採取。
1B区南壁土層実測。
- 13日 1B区第3遺構面大畦畔平板実測。
- 14日 1B区・2区南壁土層注記を行い、調査を終了する。
- 15～31日 調査区埋め戻し作業等を実施する。



第1図 調査区位置図(縮尺1/2,500)

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西 20km，南北 16km の範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており，そのため侵食開析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ビュート）となっている。西側の五色台は，平坦な頂部をよく残しており，屋島もまた同様に開析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれらより開析が進んでおり，紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は，これら侵食が進んだあと，完新世に入ってから堆積されて形成されたもので，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。

現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

これらのため池は，年間 1000 mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部に当たることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし，昭和 50 年の香川用水の通水によって，この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急激に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第2節 歴史的環境

高松平野では，石清尾山古墳群，高松市茶臼山古墳を初めとする丘陵部の古墳の状況については比較的早くから知られていたが，平地部では天満遺跡など二，三が知られるのみで長く遺跡の空白地帯となっていた。しかし，昭和 60 年代に入って高松東道路建設，太田第2土地区画整理事業，空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに事前発掘の件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見とあわせて，香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今後，未確認遺跡の把握と保護に加えてこれまでの調査成果を時間的，空間的に結びつけて高松平野の歴史環境の変遷を復原する作業が新たに必要になってきている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に遡る。平野縁辺の低丘陵部で久米池南遺跡（東山崎町），雨山南遺跡（三谷町）等の遺跡が知られるが，いずれも表採や混入によると見られる状

況を示す。それに対して、中間西井坪遺跡（中間町）では、高松自動車道の事前調査によって A T 火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。また、最近では香西南西打遺跡（香西南町）において、平野縁辺の低地からも旧石器が出土している。

縄文時代では、大池遺跡（木太町）で草創期と見られる有舌尖頭器 2 点の表採が報告されている。また、近年平野部の発掘調査によって晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆され、林・坊城遺跡、さこ・松ノ木遺跡、さこ・長池遺跡、さこ・長池 II 遺跡、井手東 I 遺跡、井手東 II 遺跡、居石遺跡、上天神遺跡等を数えることができる。これらの多くは旧河道等の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが、井手東 I 遺跡では、地表下約 70 cm からアカホヤの堆積層が確認されており中期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期に移ると、天満・宮西遺跡、松縄下所遺跡、上西原遺跡、大池遺跡、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、汲仏遺跡、さこ・松ノ木遺跡、さこ・長池遺跡、さこ・長池 II 遺跡、弘福寺領田凶北地区比定地調査区、鬼無藤井遺跡等が挙げられる。上西原遺跡、さこ・長池遺跡、さこ・長池 II 遺跡、弘福寺領田凶北地区比定地調査区ではこの時期に 10 m²前後の方形に整然と区画された水田面を検出しているが、それ以外では遺物廃棄（埋納）土坑や河川堆積の包含遺物など遺物を中心とした確認例が多い。その中であって、天満・宮西遺跡、汲仏遺跡、鬼無藤井遺跡においては、集落をめぐっていた環壕を発掘している。

中期になると、平野部ではさこ・長池遺跡、さこ・長池 II 遺跡、井手東 I 遺跡、多肥松林遺跡で住居跡、周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが、規模・密度は総じて希薄である。また、中期後半になると久米池南遺跡など平野縁辺部や丘陵上に高地性集落が営まれる。

弥生時代後期になると遺跡は数、規模ともに爆発的に増加し、平野部では上天神遺跡、天満・宮西遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡、蛙股遺跡、キモンドー遺跡、日暮・松林遺跡、井手東 I 遺跡がある。丘陵部では、香川県の弥生後期の標識遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

古墳時代では、これら弥生時代後期の遺跡のうち上天神遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡が古墳時代初頭に至るまで集落が存続することが知られており、太田下・須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出している。さらに生産関連の遺跡としてはさこ・松ノ木遺跡の水田跡、三谷三郎池の須恵器窯跡、中間西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られ、古墳時代全般を通じて集落・生産遺跡の遺跡数は希薄である。このことは古墳の造営が全市域的に盛んであるのと対照をなしており、今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。

古墳の分布状況を概観すると、発生期と考えられる諏訪神社古墳、鶴尾神社 4 号墳を皮切りに、石清尾山塊では猫塚、石船塚等の積石塚から成る石清尾山古墳群、三谷地区では小日山 1・2 号墳、前田地区では高松市茶臼山古墳、下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され、その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて 100 年以上の断絶を経た後、南山浦古墳群、浄願寺山古墳群等の盛り土の群集墳が爆発的な盛行を見るし、三谷地区では小日山 1・2 号墳に続いて割竹形石棺をもつ全長 88 m の前方後円墳である三谷石船古墳、直径 42 m を測り周濠を巡らせる円墳の高野丸山古墳が中期に、そして後期には平石上 2 号墳、矢野面古墳、犬の馬場古墳、石船池古墳群といった古墳につながって行く。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳に続いて、前期から中期にかけての茶臼山古墳群、諏訪神社

古墳，後期の久本古墳，小山古墳，山下古墳，瀧本神社古墳，岡山小古墳群，平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれている。

まだ，鬼無地区では前期末から中期初頭と見られるかしが谷2号墳をはじめとして組合式の土師質陶棺を出土した中期前方後円墳の今岡古墳，巨石積みの横穴式石室を主体部にもつ古宮古墳，平木1号墳等からなる神高池古墳群へと続いている。なお，先述の土師質陶棺の焼成土坑を検出した中間西井坪遺跡は本津川沿いに鬼無地区の上流にあたり，西山崎町の本堯寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられており，本津川を介した物資や情報の流通が想像できる。

屋島地区でも，瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎鼻古墳をはじめ浜北古墳群，中筋古墳群，金比羅神社古墳群，東山地古墳群などが知られている。未調査で時期の確定を見ないものも含まれるが，平野周辺部の地域単位よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で，また生産基盤としての耕作地をもたないという点においても注目される地域である。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。さこ・長池遺跡，さこ・松ノ木遺跡，さこ・長池II遺跡，井手東I遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡等で条里界線にあたるとおもわれる遺構を検出している。遺構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代，多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施行期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが，溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など，検討すべき多くの問題をはらんでいる。

中でも，松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝状の遺構を検出し，時期も7世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，さこ・長池II遺跡の条里界線も旧郡界線にあたる部分に幅6mの間隔で道路側溝状の溝が並行し，空港跡地遺跡亀の町地区においても現在の畦道の延長として幅3～4mの道路側溝状の並行溝が検出されており，12世紀代の遺物が出土している。その他道路に関しては三谷町の南海道推定線上で河岸段丘の崖をおよそ6m幅で開削して切通し状に斜面を形成したと思われる痕跡が確認されており，南海道に関連する遺構の可能性が考えられる。

古代寺院跡では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，坂田廃寺，多肥廃寺，勝賀廃寺などが知られている。正式の発掘調査を経たものがなく，伽藍配置などの具体的な様子の判るものはないが一様に瓦の散布が見られる。宝寿寺跡，下司廃寺では塔礎石が現存し，坂田廃寺，高野廃寺では建物礎石が転用材として散布している。また，坂田廃寺では過去に金銅釈迦誕生仏の出土を見たほか最近の調査で背後谷斜面から坂田廃寺に瓦を供給したと見られる片山池1号窯跡が確認された。

これら寺院跡の中のいくつかは地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから，古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。坂田廃寺が所在する香川郡坂田郷には，「日本霊異記」にも在地の綾氏の話としての説話が伝えられており早くから仏教の受容が進んでいたことを示している。

中近世以降では，東道路関連のさこ・長池遺跡，さこ・松ノ木遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田岡北地区比定地等で，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されており，その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また，東山崎・水田遺跡，川南・西遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた近世集落跡や耕土層が発掘され，豊富な木製品が



- 1 猫塚古墳
- 2 姫塚古墳
- 3 石船塚古墳
- 4 鏡塚古墳
- 5 北大塚古墳
- 6 鶴尾神社4号墳
- 7 稻荷山姫塚古墳
- 8 西八ヶ土居遺跡
- 9 松並中所遺跡
- 10 木太中村遺跡
- 11 白山神社古墳
- 12 木太本村Ⅱ遺跡
- 13 天満・宮西遺跡
- 14 キモンド一遺跡
- 15 松縄下所遺跡
- 16 境目下西原遺跡
- 17 上西原遺跡
- 18 大池遺跡
- 19 弘福寺領田図比定地北地区
- 20 上天神遺跡
- 21 太田下・須川遺跡
- 22 蛙股遺跡
- 23 居石遺跡
- 24 井手東Ⅱ遺跡
- 25 井手東Ⅰ遺跡
- 26 さこ・長池Ⅱ遺跡
- 27 さこ・長池Ⅰ遺跡
- 28 さこ・松ノ木遺跡
- 29 林・坊城遺跡
- 30 六条・上所遺跡
- 31 東山崎・水田遺跡
- 32 汲仏遺跡
- 33 多肥廃寺
- 34 凹原遺跡
- 35 日暮・松林遺跡
- 36 多肥松林遺跡
- 37 松林遺跡
- 38 多肥松林遺跡
- 39 多肥宮尻遺跡
- 40 弘福寺領田図比定地南地区
- 41 宮西・一角遺跡
- 42 一角遺跡
- 43 空港跡地遺跡
- 44 拝師廃寺
- 45 川南・西遺跡
- 46 川南・東遺跡
- 47 新田本村遺跡
- 48 小山南谷遺跡
- 49 山下廃寺
- 50 久本古墳
- 51 諏訪神社遺跡(古墳)
- 52 久米山遺跡群
- 53 久米池南遺跡
- 54 高松市茶臼山古墳

第2図 周辺主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)

発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し、玉藻町の高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東の丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城下町の一部を窺うことができる。

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と層序

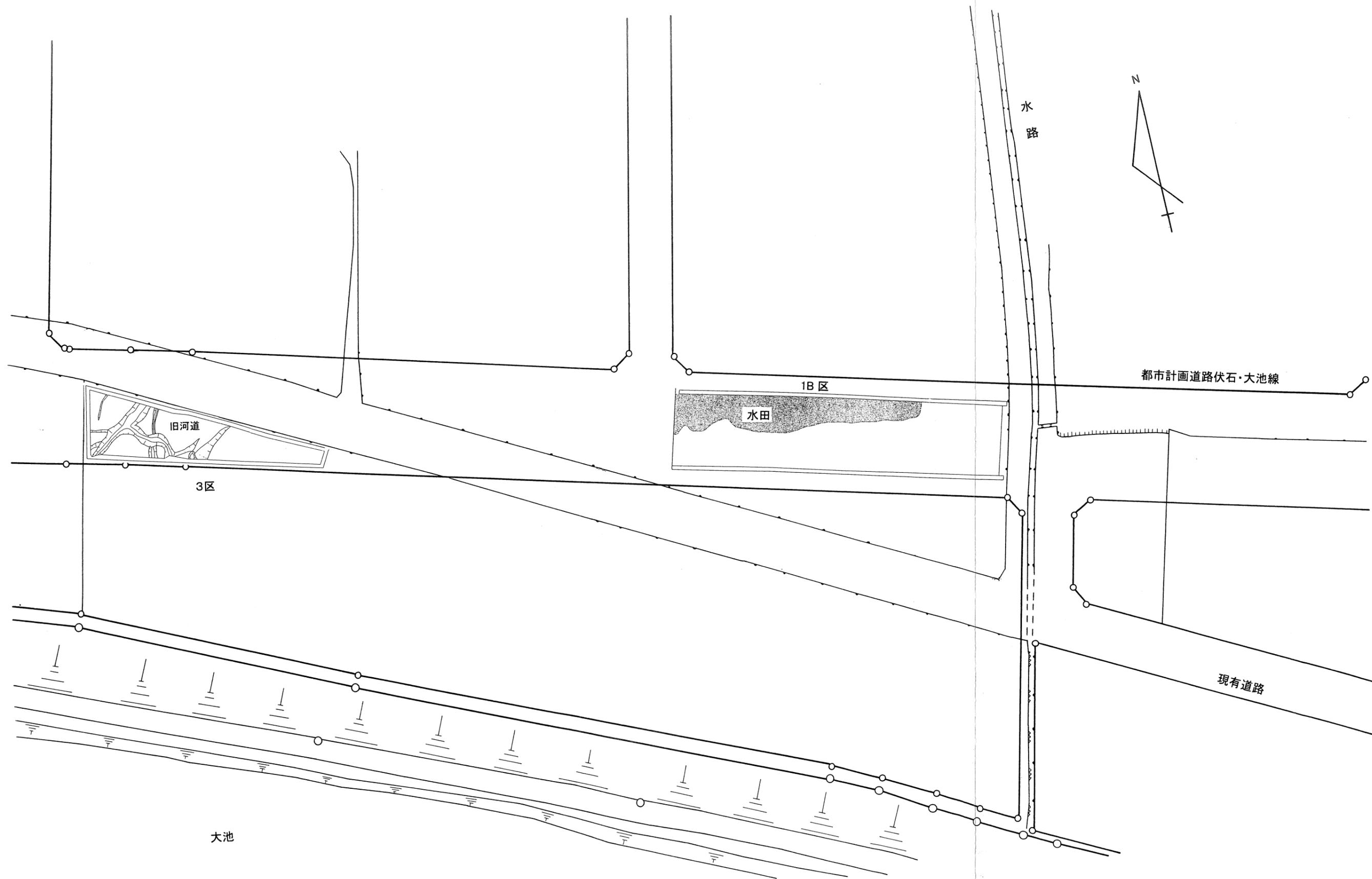
調査前の当該地は、水田として利用されていた。16 m幅員の街路予定地のうち、総長 154 m分が調査対象となり、面積約 2,464 m²を測る。そのうち、立会調査が済んだ側溝部分、現有道路や用水路部分などを除くと、実際の掘削は面積 980 m²となった。この現有道路などにより、調査区は3つに分かれ、東から順に1区・2区・3区と呼称した。ただし、1区は用水路により、1A区(東側)と1B区(西側)の2つに細分された。

上西原遺跡は埋没旧中洲に立地するが、遺跡西半(1B区~3区)は遺跡南側に広がる木太新池(通称大池)の放水口(本ユル)付近を本流とする旧河道の氾濫原に属し、遺跡東半(1A区)は微高地へと移りつつある。このため、調査区の土層堆積は20層以上に及び複雑な様相を呈する。

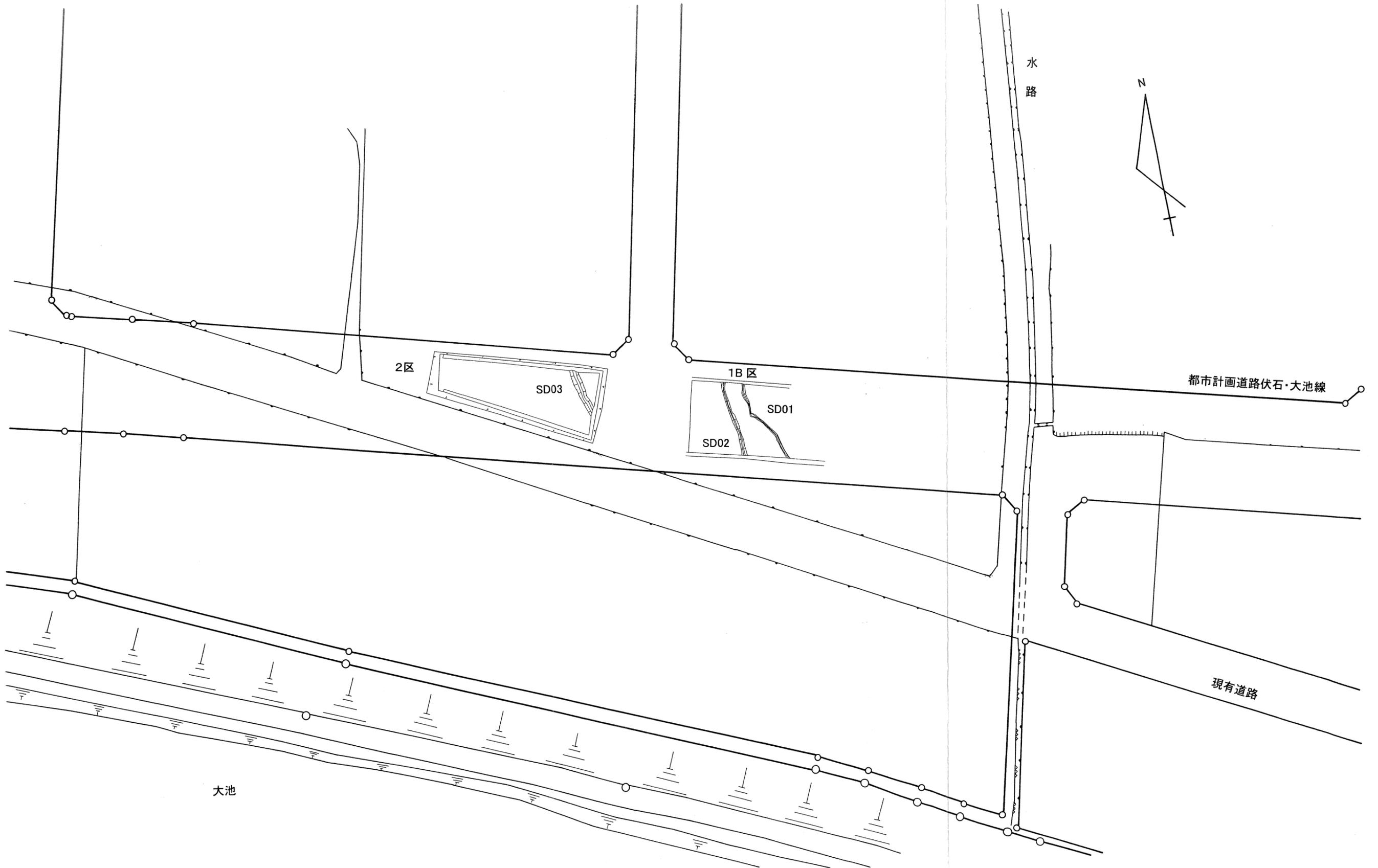
遺構面は3面確認でき、検出した遺構は水田面2面、溝跡3条そして不明遺構1基である。



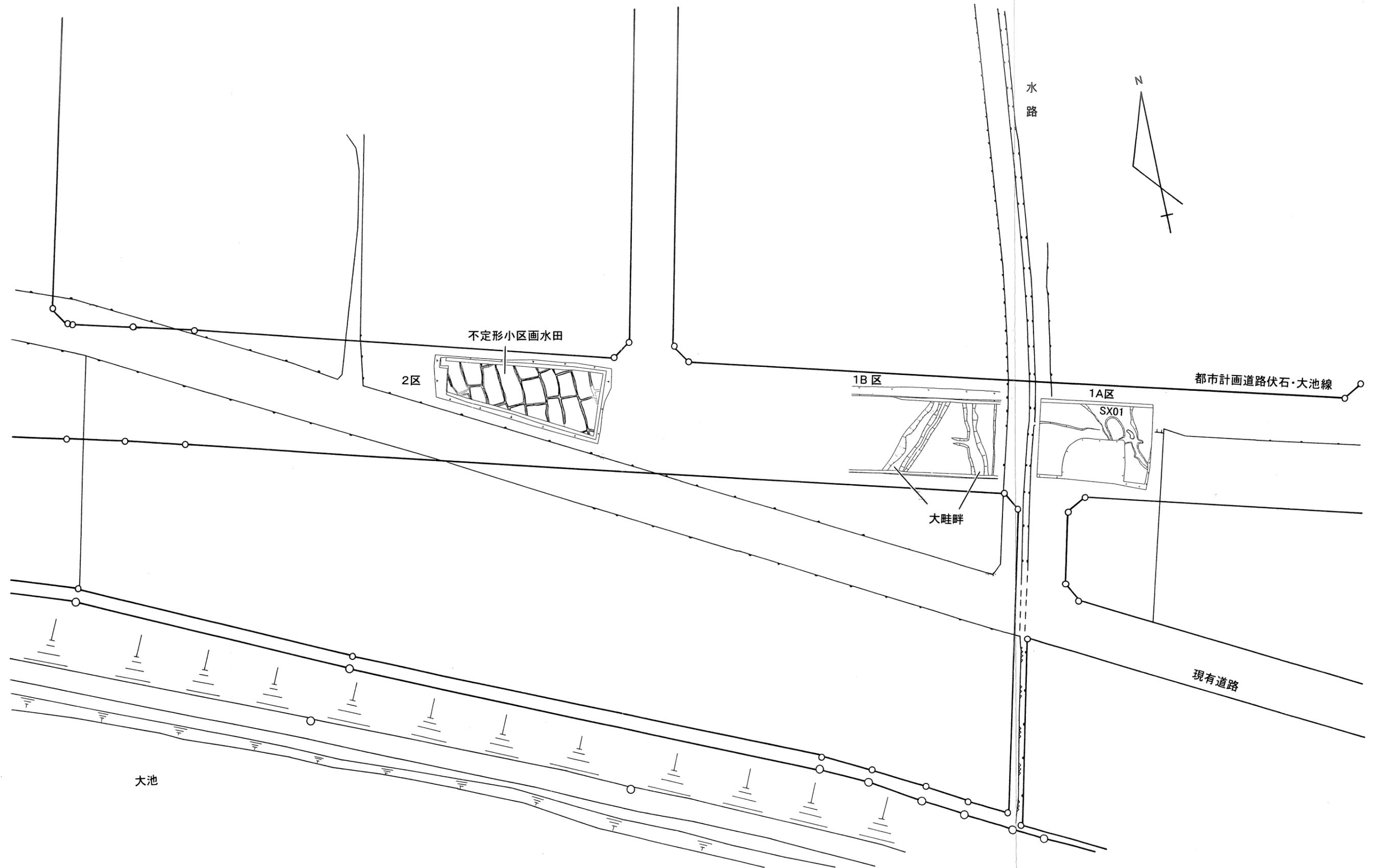
第3図 上西原遺跡周辺の微地形(高橋学1992を一部改変)



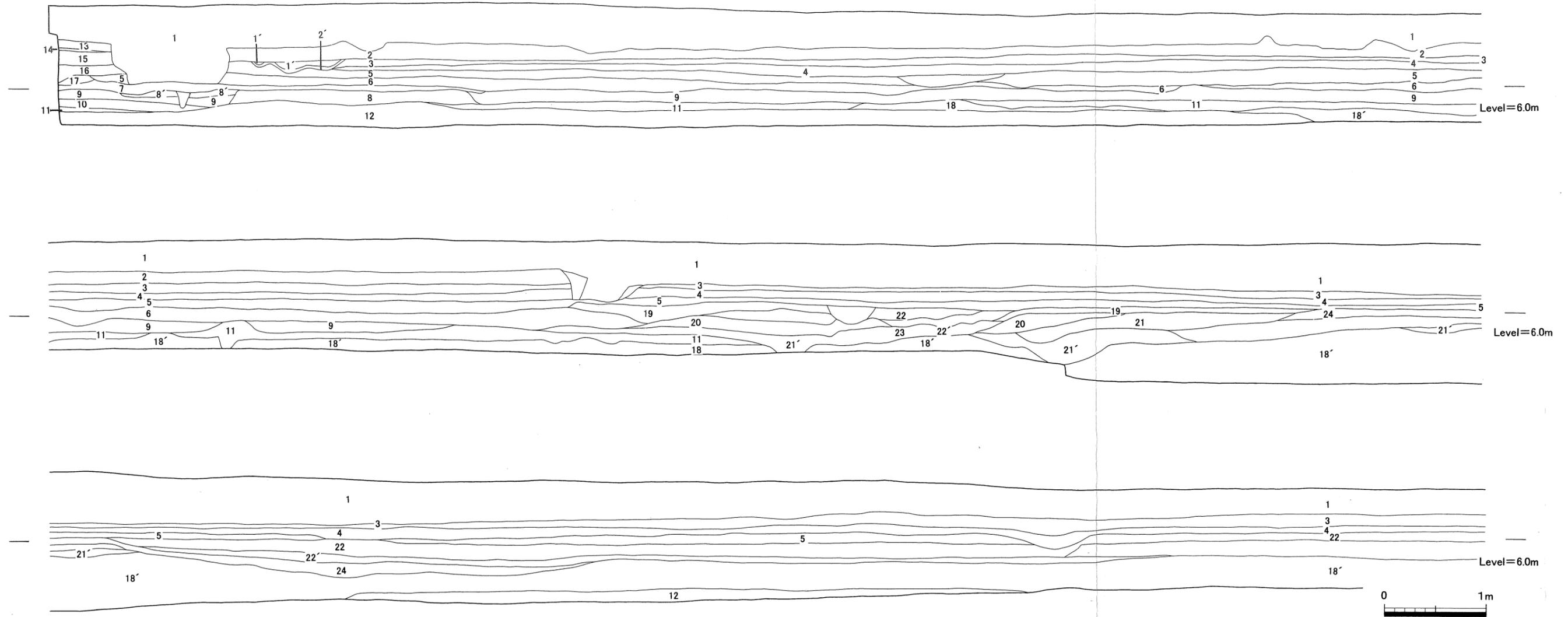
第4図 第1遺構面遺構配置図



第5図 第2遺構面遺構配置図

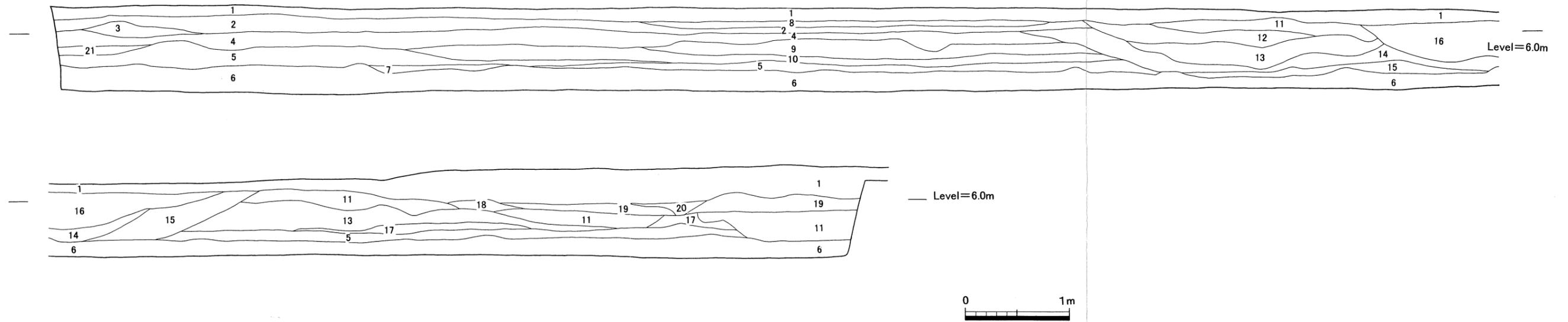


第6図 第3遺構面遺構配置図



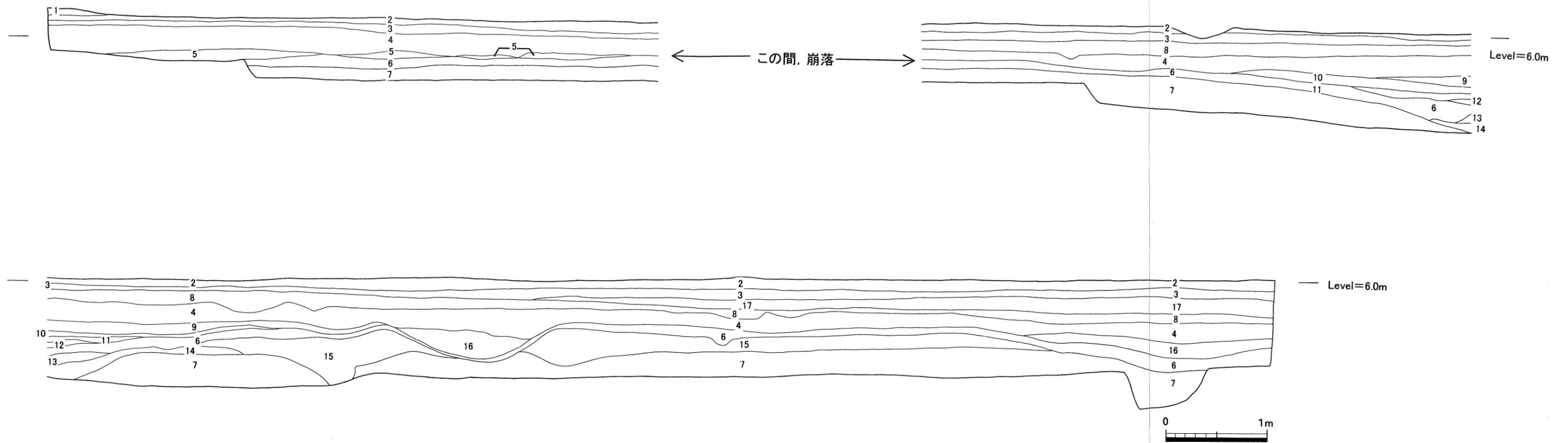
第7図 1B区南壁土層図(縮尺1/40)

1 花崗土		14 攪乱	
2 にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3	15 黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/4
3 にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR6/4	16 にぶい黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y6/4
4 黄褐色砂質シルト	Hue10YR4/4	17 暗灰黄色中砂	Hue2.5Y5/2
5 黄褐色砂質シルト極細砂	Hue10YR4/4	18 褐灰色シルト	Hue10YR4/1
6 オリーブ褐色中砂	Hue2.5Y4/3	18' 褐灰色細砂	Hue10YR4/1
7 暗灰黄色中砂	Hue2.5Y4/2	19 褐灰色砂質シルト	Hue10YR4/1
8 褐灰色砂質シルト	Hue10YR4/1	20 暗灰黄色中砂	Hue2.5Y5/2
9 灰黄褐色細砂質シルト	Hue10YR4/2	21 灰オリーブ粗砂礫	Hue5Y6/2
10 黄灰色粗砂	Hue2.5Y4/1	22 オリーブ褐色砂質シルト	Hue2.5Y4/3
11 灰黄褐色シルト	Hue10YR4/2	23 オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3
12 黒色粘質シルト	Hue7.5YR2/1	24 灰黄色砂質シルト	Hue10YR4/2
13 攪乱			



第8図 2区南壁土層図(縮尺1/40)

1 黄灰色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3	11 褐灰色細礫	Hue10YR4/1
2 オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	12 黄褐灰色細礫	Hue2.5Y5/3
3 オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y4/3	13 暗灰黄色中砂	Hue2.5Y4/2
4 暗灰色粗砂礫	Hue2.5Y4/2	14 黄灰色細砂	Hue2.5Y4/1
5 オリーブ褐色細礫	Hue2.5Y4/4	15 黄灰色細礫	Hue2.5Y4/1
6 黒褐色粘質シルト	Hue10YR3/1	16 オリーブ褐色中砂	Hue2.5Y4/3
7 暗灰黄色細礫	Hue2.5Y4/2	17 黄褐色粗砂	Hue2.5Y5/3
8 にぶい黄褐色シルト質細砂	Hue10YR4/3	18 暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/2
9 オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y4/4	19 灰黄褐色細砂	Hue10YR4/2
10 オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	20 暗灰黄色細砂	Hue2.5Y4/2
		21 オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y4/4



第9図 3区南壁土層図(縮尺1/40)

1	花崗土		11	黒褐色細砂質シルト	Hue2.5Y3/1
2	黄灰色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3	12	暗オリーブ褐色中砂	Hue2.5Y3/3
3	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	13	オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y4/3
4	暗灰黄色中砂	Hue2.5Y5/2		(15と同一か)	
5	褐灰色シルト質細砂	Hue10YR4/1	14	オリーブ黒色中砂	Hue7.5Y3/1
6	褐灰色砂質シルト	Hue10YR4/1	15	暗灰色粗砂礫	Hue2.5Y4/2
7	黒褐色粘質シルト	Hue7.5Y2/2		(13と同一か)	
8	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	16	にぶい黄褐色中砂	Hue10YR4/3
9	暗褐色シルト質中砂	Hue10YR3/4	17	灰黄褐色砂質シルト	Hue10YR4/2
10	黒褐色シルト質細砂	Hue10YR3/2			

第2節 遺構と遺物

水田遺構面2面，溝跡3条，不明遺構1基を検出し，30リットルコンテナ1/2箱分の遺物が出土している。溝跡・不明遺構は，どれも後世の削平を受けており，その法量は現存の値を示す。以下，遺構面および遺構ごとに，時代順を追って内容を説明する。

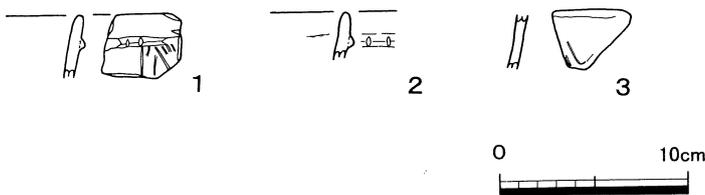
(1)第3遺構面

1B区の南壁土層では第12層上面(第7図)に，2区南壁土層では第6層上面(第8図)にあたり，両層は同一のものである。1B区の東端において南北方向の大畦畔を2本，2区全域において不定形小区画水田を検出した。これら水田遺構は，オリーブ褐色細礫層(2区南壁第5層)に覆われており，おそらく洪水といった自然災害で一度に埋まったと考えられる。ただし，1B区ではオリーブ褐色細礫層が調査区南側には及んでいないため，1B区南壁土層図には反映できなかった。また，1A区で検出したSX01も第3遺構面に相当すると考えられる。

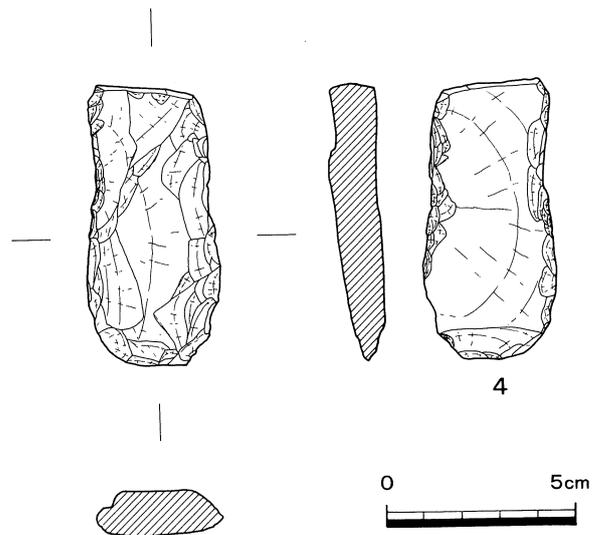
大畦畔(第13図) 東側の畦畔は，方位N-11°-E，幅1.6~2.3m，高さ4~9cm，検出長9.4mを測る。西側の畦畔は，方位N-54°-E，幅1.4~2.4m，高さ6~9cm，検出長11.2mを測る。西側大畦畔の東隣には，大畦畔に沿って溝が設けられている。この溝は，幅0.8~1m，深さ3~9cmを測り，わずかの比高差だが北に向かって流れていたと考えられる。全体の地形は，北西に向かってしだいに低くなっている。今回の調査では，小畦畔までは検出できず，大畦畔付近に水田面があるかどうかは確認できなかった。しかしながら，この畦畔より約40mあまり離れた2区に，不定形小区画水田があることから，大畦畔付近でも水田が営まれていた可能性は高い。また，西側大畦畔に沿って掘削されている溝は，水田耕作に伴う配水または排水用に設けられたものと推測されるが，調査面積が狭いため，その性格については明らかにできなかった。

この大畦畔付近において，黒色粘質シルト層直上すなわち水田層直上の細礫層中より，若干の土器と石器が出土している(第10~11図)。凸帯文土器(1~3)は，深鉢の口縁部および口縁部付近の破片で，端部を丸く収め，やや下がった位置に断面蒲鉾状の刻目凸帯文を張り付ける。凸帯より下に4条の篋描き山形文を施文する。打製石鋏(4)は，比較的小型のもので，サヌカイト製である。刃部および側部は摩滅している。ほかに分類図化はできなかったが，弥生時代前期の可能性のある小片が出土している。

同様の凸帯文土器は，下川津遺跡SK8602から出土しており，同遺跡では弥生時代前期初頭の土器と伴出している(森下英治・信里芳紀1998)。当遺跡でも，小片ながら弥生土器の可能性のある土器片が出土しており，この大畦畔の埋没時期は，弥生時代前期と推測される。



第10図 1B区第3遺構面大畦畔付近出土遺物実測図①



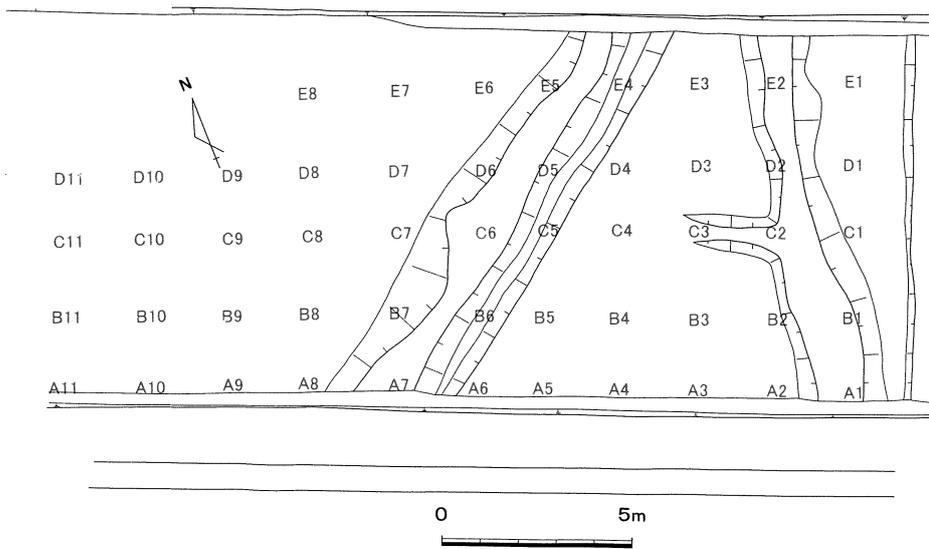
第11図 同大畦畔付近出土遺物実測図②

番号	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	器高		外	内	
1	凸帯文土器深鉢		(3.4)	摩滅のため調整不明 外面に貼付凸帯文1条	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外面と同じ	石英, 長石を含む
2	//		(2.6)	内外面ともナデ 外面に貼付凸帯文1条	灰黄 (2.5Y7/2)	外面と同じ	石英, 長石を含む
3	//		(3.0)	摩滅のため調整不明 外面に貼付凸帯文1条	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	石英, 長石を含む

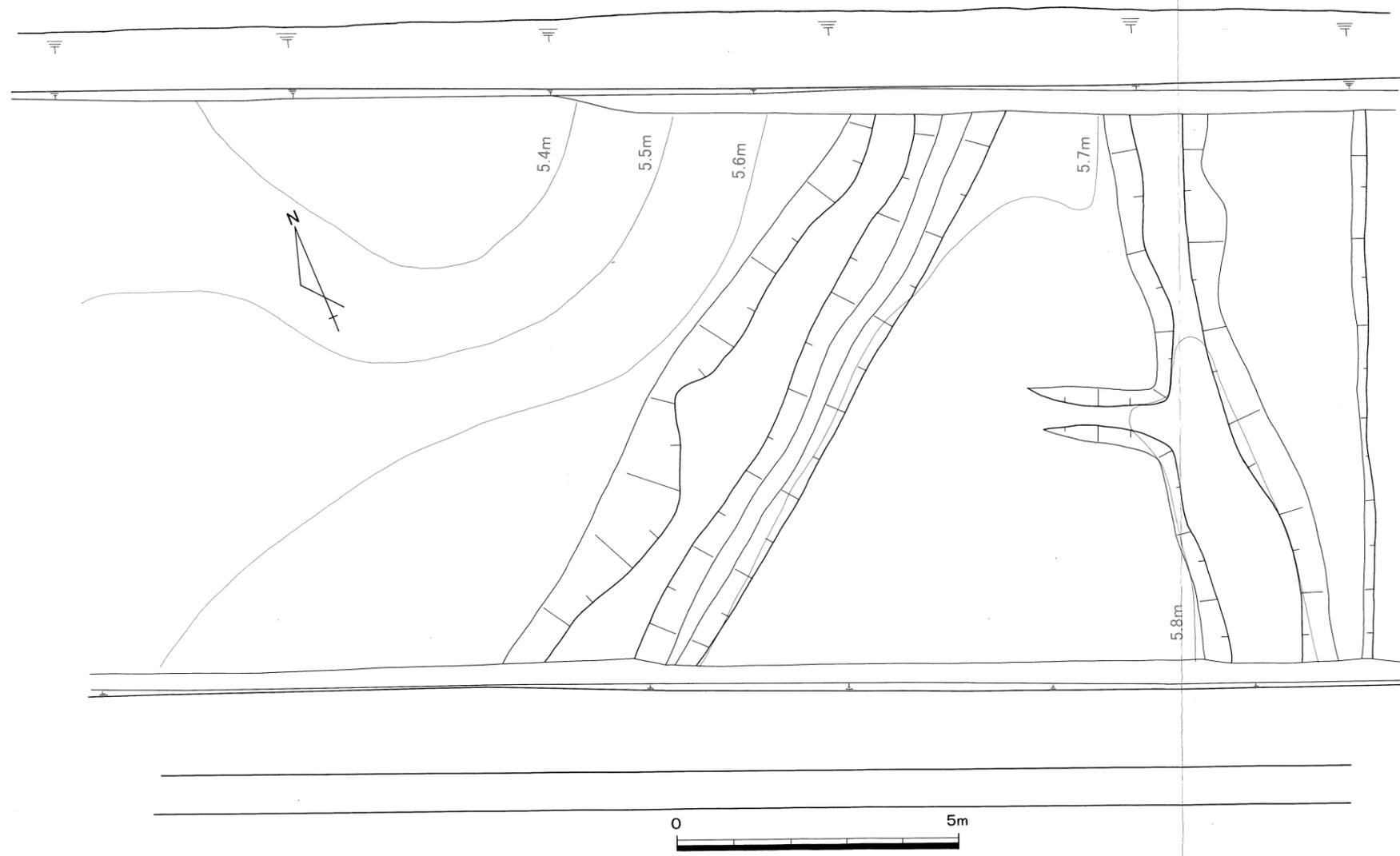
第1表 1B区第3遺構面大畦畔付近出土遺物観察表①

番号	器種	法量 (cm)				材質	特徴
		現存長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
4	打製石鎌	7.4	3.4	1.2	46.3	サヌカイト	裏面に大きな剥離面を残し、刃部・側部とも両面から調整。側部を潰している。

第2表 1B区第3遺構面大畦畔付近出土遺物観察表②



第12図 1B区第3遺構面大畦畔プラント・オパール採取位置図



第13图 1B区第3遺構面大畦畔平面图

不定形小区画水田 2区全域で検出した水田遺構である（第16図）。平面的に畦畔を確認したのは2区のみであるが、水田の土壌層は1B区の大畦畔まで続いていると考えられる。地形的には、南東から北西に向かって下る緩斜面に形成されたもので、香東川旧河道の氾濫源にあたる。検出した水田は標高5.08～5.18mに存在する。第6層黒褐色粘質シルトの上面に畦畔が認められる。

水田区画の畦畔の長軸方向は等高線に直行する形で、北方向を向いている。この長軸方向の畦畔に直行して短軸方向の畦畔を設定しているが、区画内で3cm程度の比高差を保つために設定しているため短軸相互の距離は一定ではない。畦畔の規模は幅0.3～0.4m、高さは長軸方向で3～5cm程度、短軸方向は長軸方向に比べ1～2cm程度低いことから、水の供給は長軸方向を主に行っていたものと考えられる。つまり、小区画水田8と12の間に水口が1カ所認められるだけで、給水方法は「畦越し」に行っていたと考えられる。

検出された水田の総区画数は25区画確認され、そのうちほぼ完全な区画は4区画である。ほぼ完全な区画の面積の平均は8.67㎡であり、最大のものは区画16の13.1㎡以上、最小のものは区画7の7.04㎡である。各水田区画における平均標高をみると最も高い標高が水田区画5・9の5.18m、最も低い標高が水田区画18の5.08mであり、区画5から区画18まで直線距離が約18mで比高差が約10cmであり、緩斜面を利用して水田耕作が行われていたと想定できる。

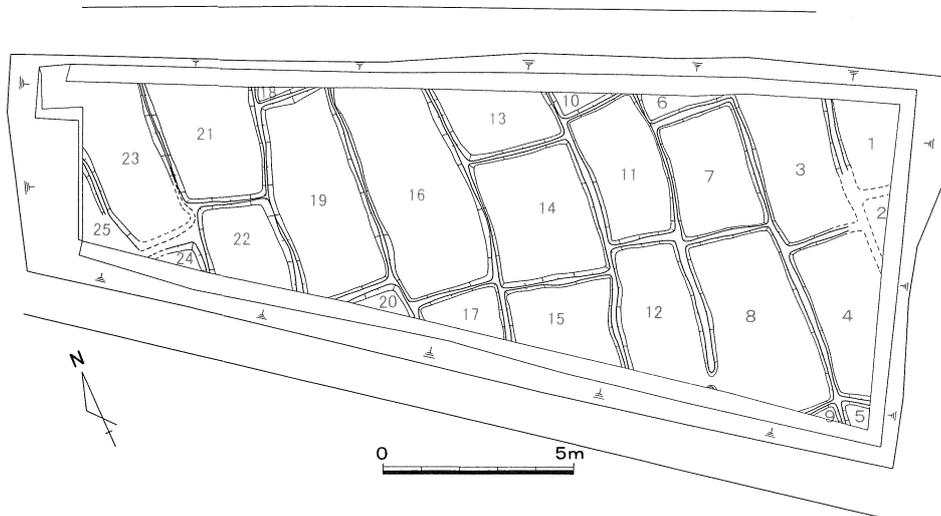
この不定形小区画水田に伴出する遺物は、水田面上下の土層とも出土していないが、同じ土壌層および洪水細礫による被覆層をもつ大畦畔と同時期と考えられる。

No.	面積(㎡)	平均標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	比高差(m)	No.	面積(㎡)	平均標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	比高差(m)
1	(2.9)	5.13	(2.5)	(0.8)	0.02	14	9.8	5.12	3.5	2.8	0.04
2	(0.6)	—	(1.6)	(0.7)	—	15	(4.8)	5.14	(2.4)	2.7	0.03
3	(7.6)	5.13	(4.2)	2.0	0.04	16	(13.1)	5.09	(6.0)	2.3	0.08
4	(6.4)	5.16	4.0	2.0	0.01	17	(1.9)	5.11	(1.5)	2.1	0.04
5	(0.3)	5.18	(0.6)	(0.6)	0.01	18	(0.2)	5.08	(0.4)	(1.0)	0.01
6	(0.8)	5.11	(0.8)	2.1	0.03	19	11.3	5.09	5.4	2.3	0.03
7	7.0	5.13	3.2	2.2	0.02	20	(0.6)	5.11	(1.0)	(1.2)	0.02
8	(11.8)	5.15	4.9	2.3	0.05	21	(7.7)	5.09	(3.3)	2.1	0.03
9	(0.2)	5.18	(0.6)	(0.7)	0.01	22	(4.5)	5.11	(2.5)	1.9	0.04
10	(0.6)	5.11	(0.8)	(1.6)	0.02	23	—	5.11	(4.0)	1.7	0.05
11	7.4	5.14	3.7	2.0	0.03	24	(0.5)	5.13	(0.8)	(1.2)	0.04
12	(6.0)	5.16	(4.0)	1.8	0.03	25	—	5.12	(1.5)	—	0.03
13	(4.7)	5.11	(2.2)	2.7	0.01						

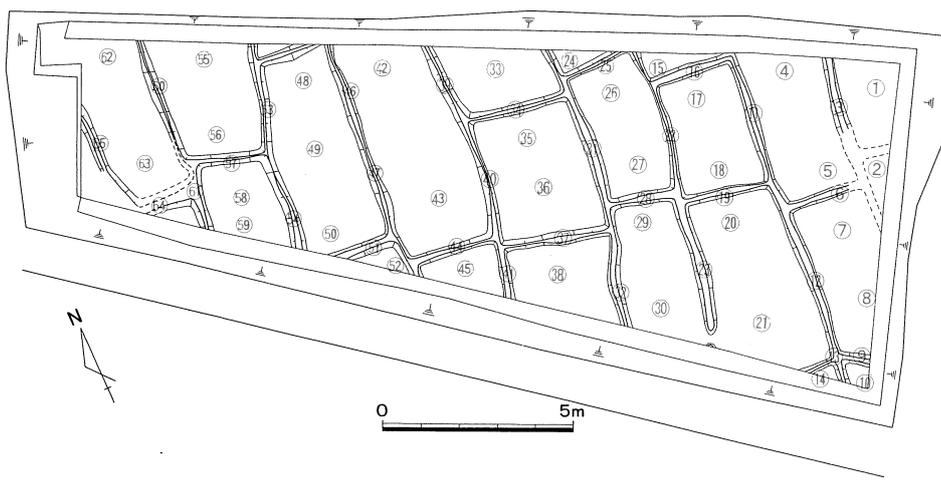
※()内数値は、残存値を表す。

※各辺の数値は最大値を表す。

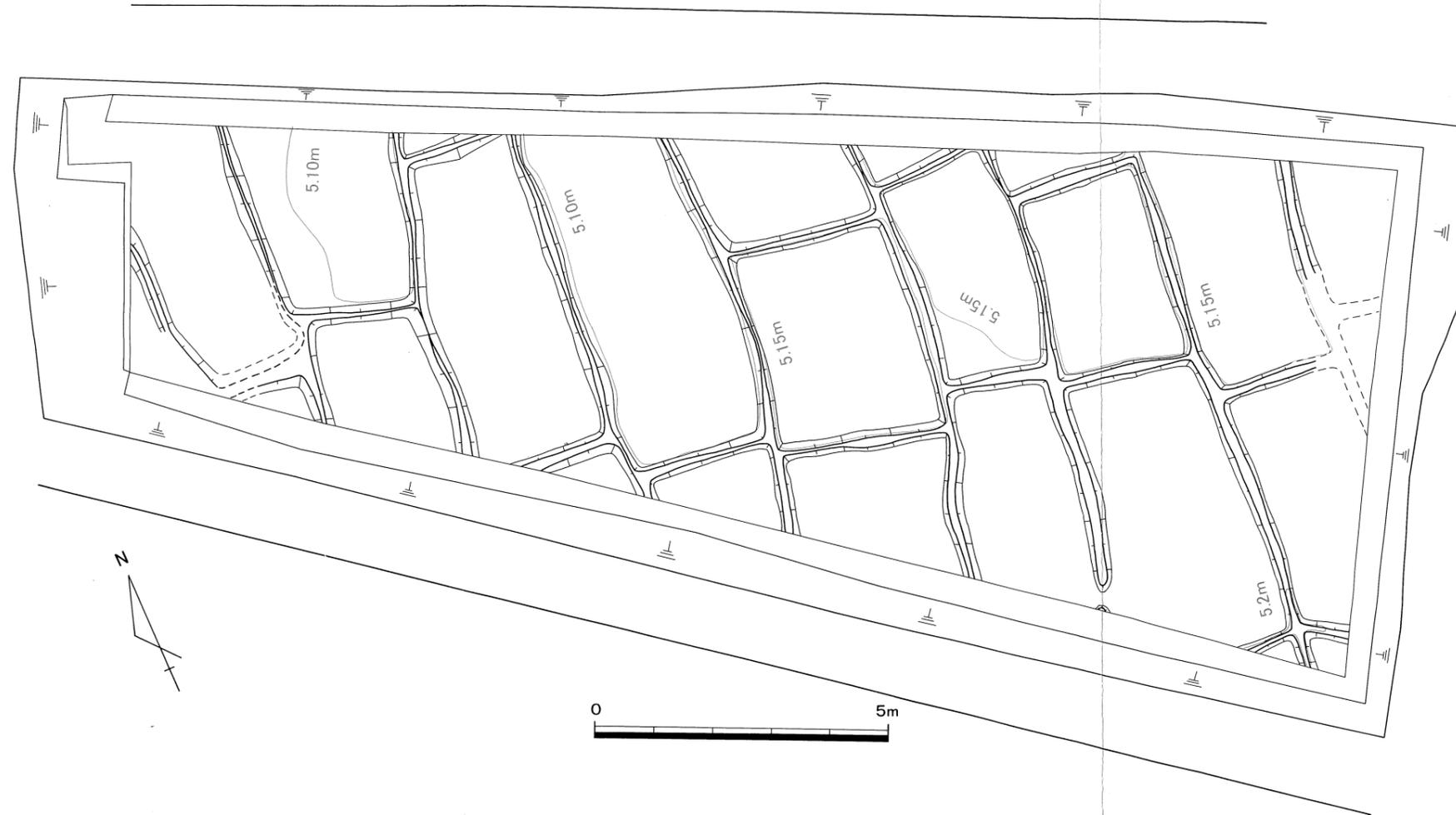
第3表 2区第3遺構面不定形小区画水田一覧表



第14図 2区第3遺構面不定形小区画水田区画図



第15図 2区第3遺構面不定形小区画水田プラント・オパール採取位置図



第16图 2区第3遺構面不定形小区画水田平面图

SX01 1A区東半で南東から北西にのびる不定形の遺構で、途中で中洲状の高まりが存在する(第19図)。最大幅5.4m、深さ8～16cm、検出長10mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

(2)第2遺構面

1B区において溝跡2本、2区において溝跡1本を検出した。1B区では、第1遺構面で確認した水田層(第11層)を除去中に検出したものであり、2区も1B区の水田層と同じ土層を除去中に検出したものである。1B区東の溝跡より、順次SD01～SD03と呼称した。なお、この第2遺構面を形成する土層は1B区南端では消滅しており、土層図では表現することができなかった。

SD01 1B区西半で南東から北西にのびる断面U字形の溝である(第20図)。途中で「く」の字に屈曲しており、方位は南側で蛇行しながらも北北西を向き、北側も蛇行しながら北に向けて延びている。傾斜は南から北に向かって緩やかに下っている。幅25～50cm、深さ10～28cm、検出長12.5mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

SD02 1B区西端でわずかに蛇行しながら、南から北にのびる断面U字形の溝である(第20図)。傾斜は南から北に向かって緩やかに下っている。幅40～60cm、深さ20～30cm、検出長10.5mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

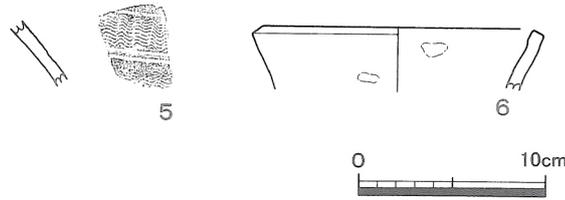
SD03 2区北東端で南南東から北北西にのびる断面U字形の溝である(第21図)。方位はN-9°-Wで、幅95～120cm、深さ26～43cm、検出長6.9mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

(3)第1遺構面

水田層 1B区の北西部分において確認した。第11層(第7図)上面において検出したもので、畦畔状遺構も数本確認したが、調査では水田の範囲を確認できるとどまった(第22図)。

第11層より土器・石器が若干出土しており、図化できるのは次の5点である(第17～18図)。須恵器壺の肩部破片(5)は、櫛描波状文と沈線を施している。古墳時代後期頃のものと考えられる。瓦質土器播鉢口縁部破片(6)は、復原口径が14.2cmであるが、小片であるため実際の口径はもっと大きいと考えられる。瓦質焼成であり、口縁部の形態などから、15～16世紀頃と考えられる。打製石鏃(7・8)は、サヌカイト製で、基部が凸形のもの(7)と平坦のもの(8)が見られる。打製石庖丁破片(9)は、結晶片岩製で、側辺に紐掛け用の打ち欠いた窪みをもつ。

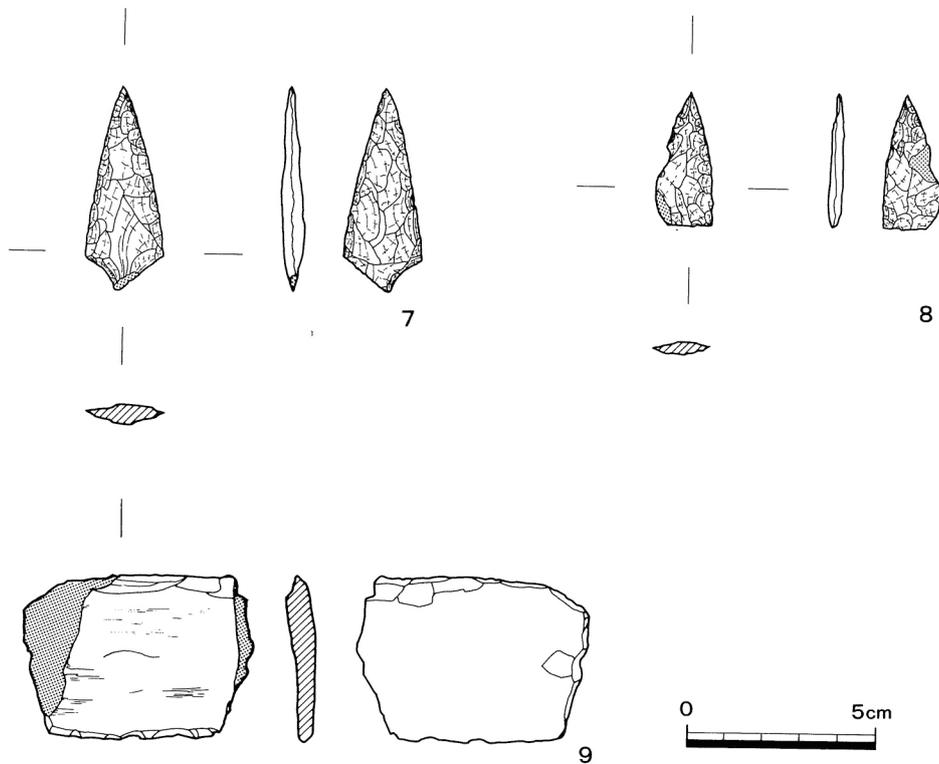
この水田層の年代については、出土遺物が少ないため断定できないが、瓦質土器播鉢口縁部破片などから中世末頃を中心とした時期が考えられる。



第17図 1B区第1遺構面水田層出土遺物実測図①

番号	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	器高		外	内	
5	須恵器壺		(3.5)	内外面とも回転ナデ 外面に櫛描波状文10条, 沈線2本	灰白 (10YR7/1)	灰白 (2.5YR8/1)	密
6	瓦質土器播鉢	(14.2)	(3.0)	内外面ともナデ, 指頭圧痕	灰白 (5YR8/2)	灰白 (2.5Y8/1)	密

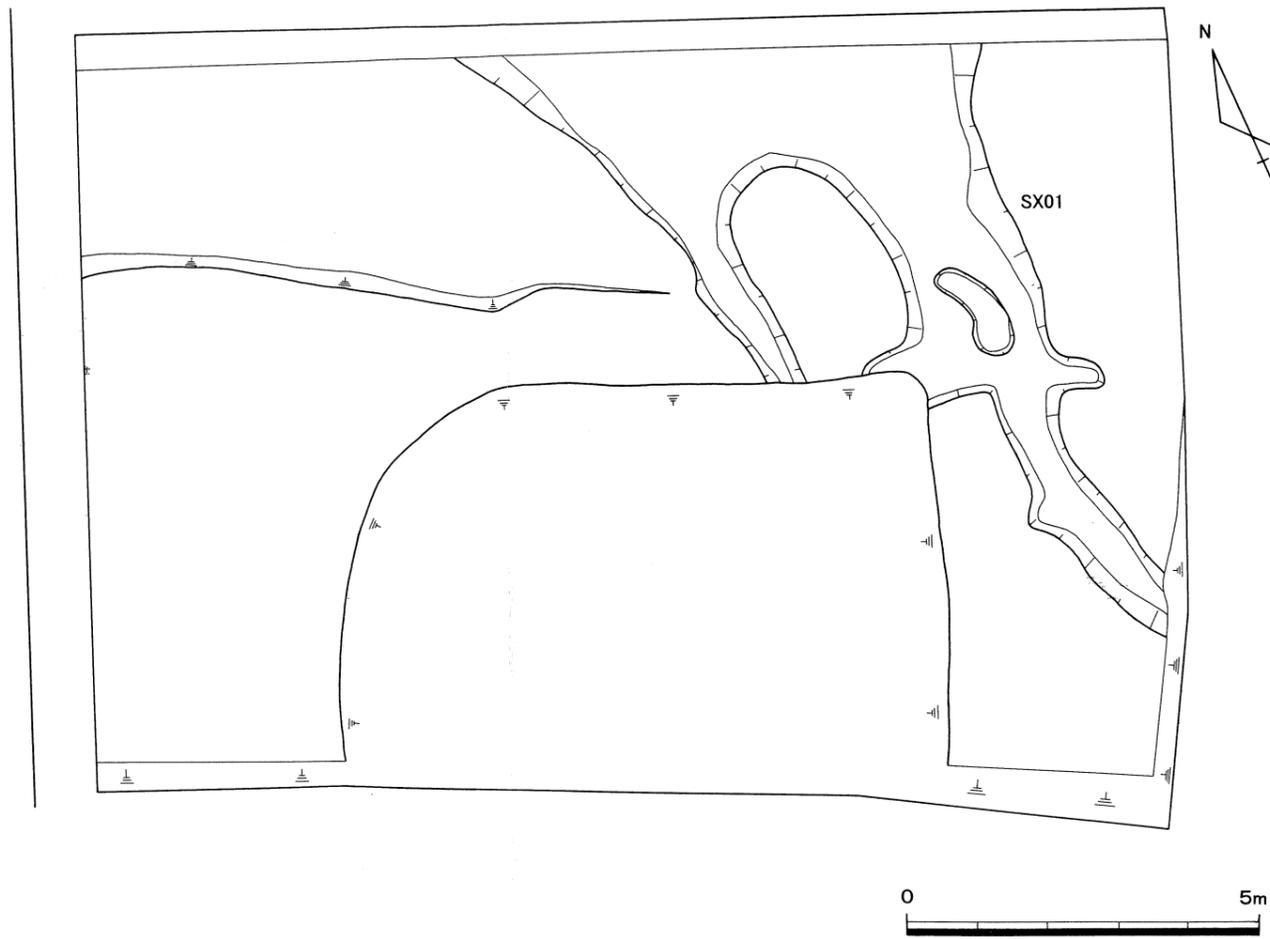
第4表 1B区第1遺構面水田層出土遺物観察表①



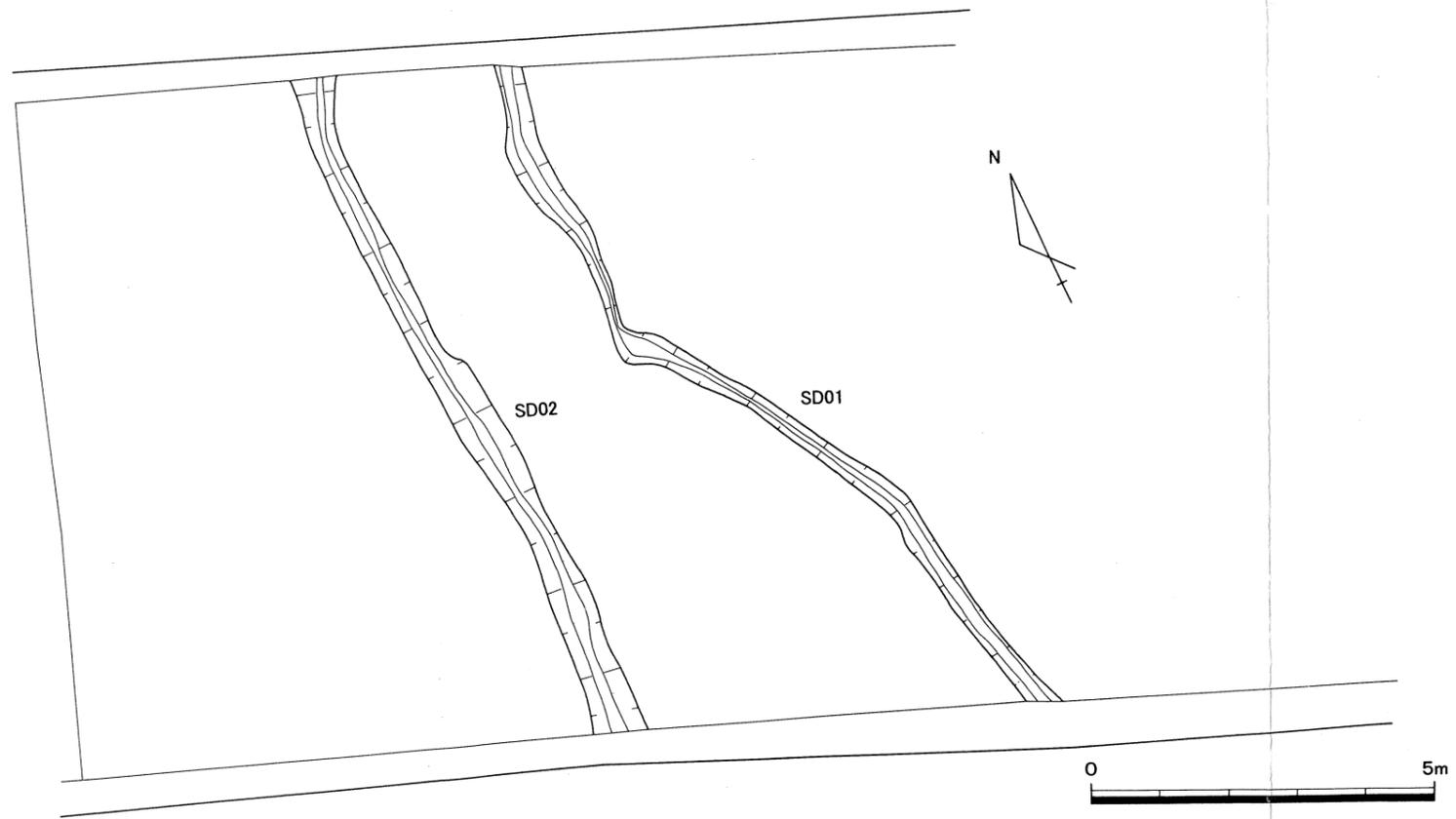
第18図 1B区第1遺構面水田層出土遺物実測図②

番号	器種	法量 (cm)				材質	特徴
		現存長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
7	打製石鏃	(5.4)	2.1	0.6	(4.5)	サヌカイト	基部の一部を欠損。両側から調整。
8	打製石鏃	(3.6)	(1.5)	0.3	(1.9)	サヌカイト	1/4を欠損。両側から調整。
9	打製石庖丁	(6.1)	(4.4)	(0.6)	26.9	結晶片岩	側部の破片。挟り1カ所あり。両面ともに大きく剥離面を残し各辺から調整。

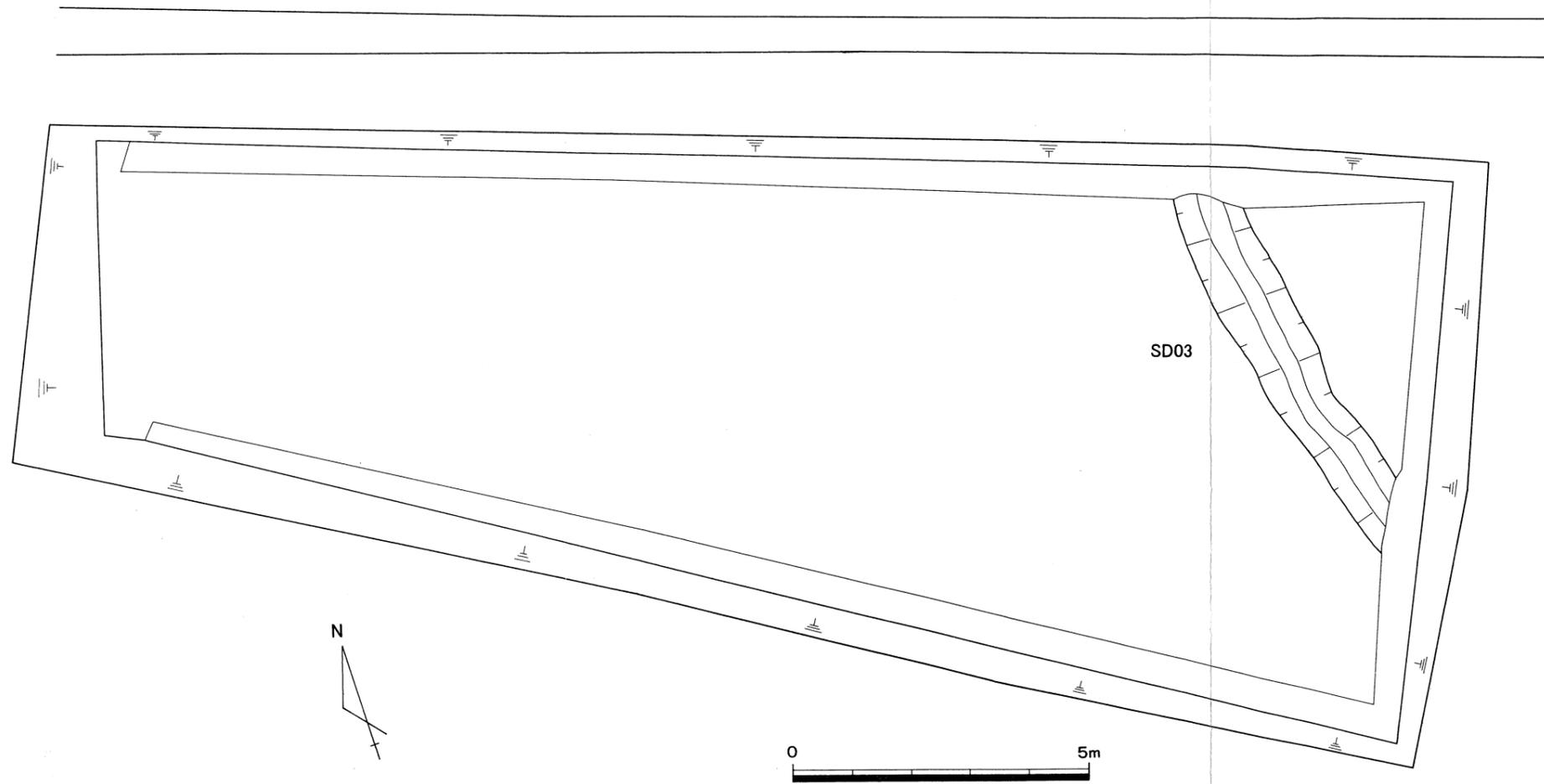
第5表 1B区第1遺構面水田層出土遺物観察表②



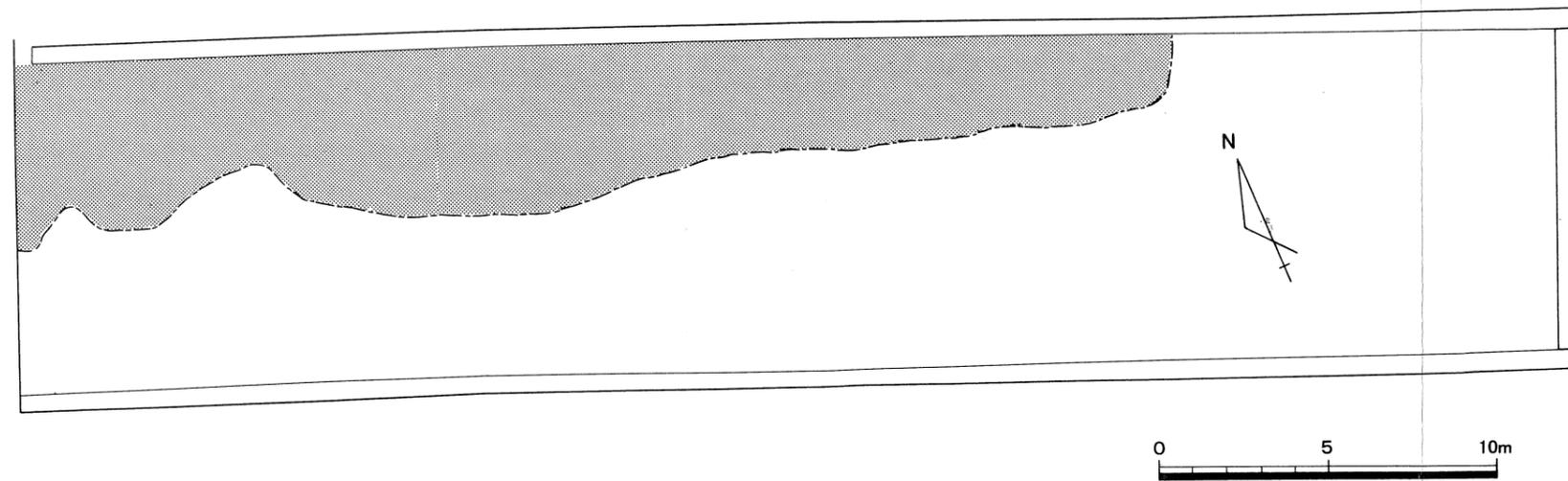
第19図 1A区第3遺構面SX01平面図



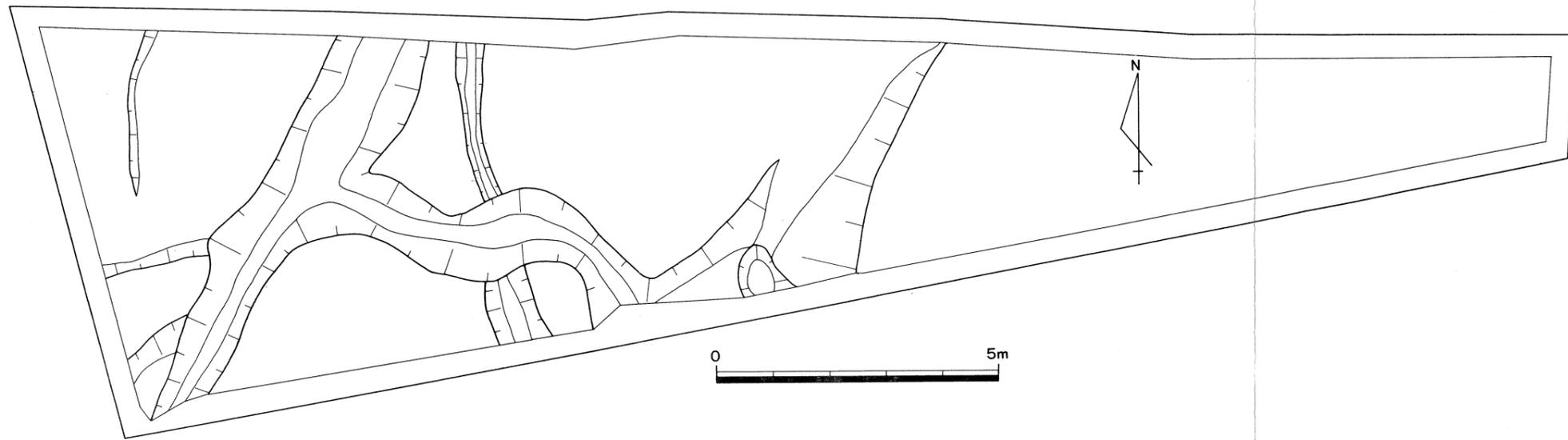
第20図 1B区第2遺構面SD01・02平面図



第21図 2区第2遺構面SD03平面図



第22図 1B区第1遺構面水田層分布図



第23图 3区旧河道平面图

(4) その他の遺構面

旧河道 3区において、旧河道の一部を確認した(第23図)。これは、調査の概要で触れたとおり、大池の放水口付近を本流とする旧河道にあたる。旧河道の深さは3区で1.2 mあり、河底には水の流れによる溝状の筋が認められた。出土遺物はなく、堆積土層それぞれの実年代は不明である。

参考文献

- 森下英治・信里芳紀 1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 高橋学 1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷

調査区内の遺構は、層位や出土遺物からおおむね3遺構面（3時期）に分けることができ、すでに各面ごとに図示している（第4～6図）。

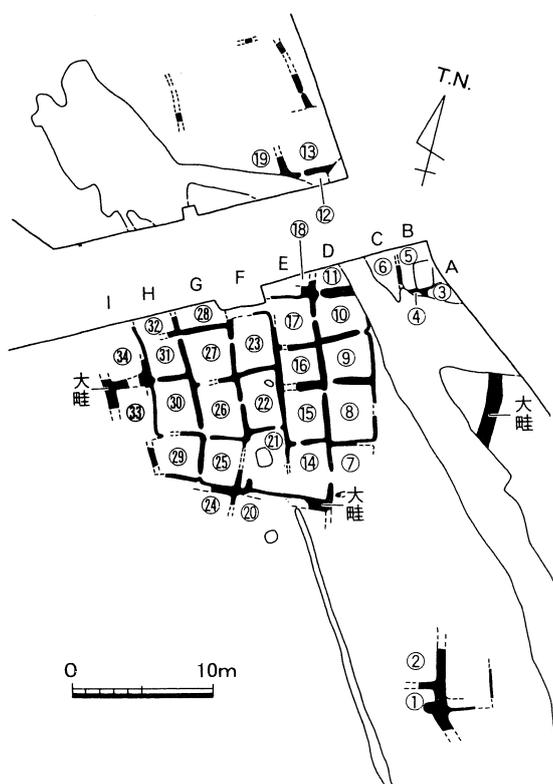
第I期（第3遺構面，第6図）は，1A区で検出したSX01，1B区で検出した大畦畔，2区で検出した不定形小区画水田が該当する。このうち，大畦畔と不定形小区画水田が本遺跡中もっとも注目される遺構である。南東から北西にかけて下る緩斜面に営まれており，東側に大畦畔が南北方向に2本並行し，約40m西に離れて不定形小区画水田が存在する。不定形小区画水田は，平均面積8.67㎡を測り，給水方法はいわゆる「畦越し」による。黒褐色粘質シルト層を土壌層（耕作土層）としており，洪水による堆積と考えられるオリーブ褐色細礫層により覆われている。つまり，洪水等の自然災害によりこれら水田遺構が埋没し廃絶したと想定される。大畦畔付近のオリーブ褐色細礫層からは，縄文晩期の凸帯文土器と弥生時代前期と推定される土器片が出土しており，これら水田遺構の廃絶時期は弥生時代前期頃と推測される。大畦畔と不定形小区画水田の関係は，本調査では明確にできなかったが，市内のさこ・長池II遺跡では小区画水田（弥生時代前期）内に存在し，農道の可能性が指摘されている（高松市教育委員会1994b，第28図）。また，県内の坂出市川津下樋遺跡では，大畦畔に囲まれて小区画水田（弥生時代前期）が存在しており（香川県教育委員会1996，第24図），推測の域を出ないが，上西原遺跡は後者の類例に近いかもしれない。ただし，プラント・オパール分析では，若干の時期差も推定されており，今後の検討を要する。

第II期（第2遺構面，第5図）は，1B区でSD01・02，2区で検出したSD03の3本の溝跡が該当する。SD01・02は幅25～60cmを測る小規模なものだが，SD03は幅120cmでやや規模

が大きい。どれもおおむね南南東から北北西に向かったのびている。これら溝の性格は調査区が狭小であるため明らかではない。また，時期については，第1遺構面が15～16世紀頃といった中世末，第3遺構面が弥生時代前期であることから，弥生時代前期から中世末といった広い時間幅を考慮しなければならないが，遺構の層位や堆積状況等を考慮すると，後者に近い時期かもしれない。

第III期（第1遺構面，第4図）は，1B区で検出した水田層が該当する。わずかに畦畔の痕跡が確認されたが，水田層の広がりをも明らかにするだけとなった。土壌層には，弥生～古墳時代の土器・石器も含まれるが，もっとも新しい時期の遺物より，15～16世紀頃と考えられる。

また，3区では旧河道を検出した。1A区～2区までが埋没旧中洲（自然堤防）に相当するが，3区では旧香東川の河道となっていることが明らかになった。



第24図 川津下樋遺跡水田址模式図
（香川県教育委員会1996より）

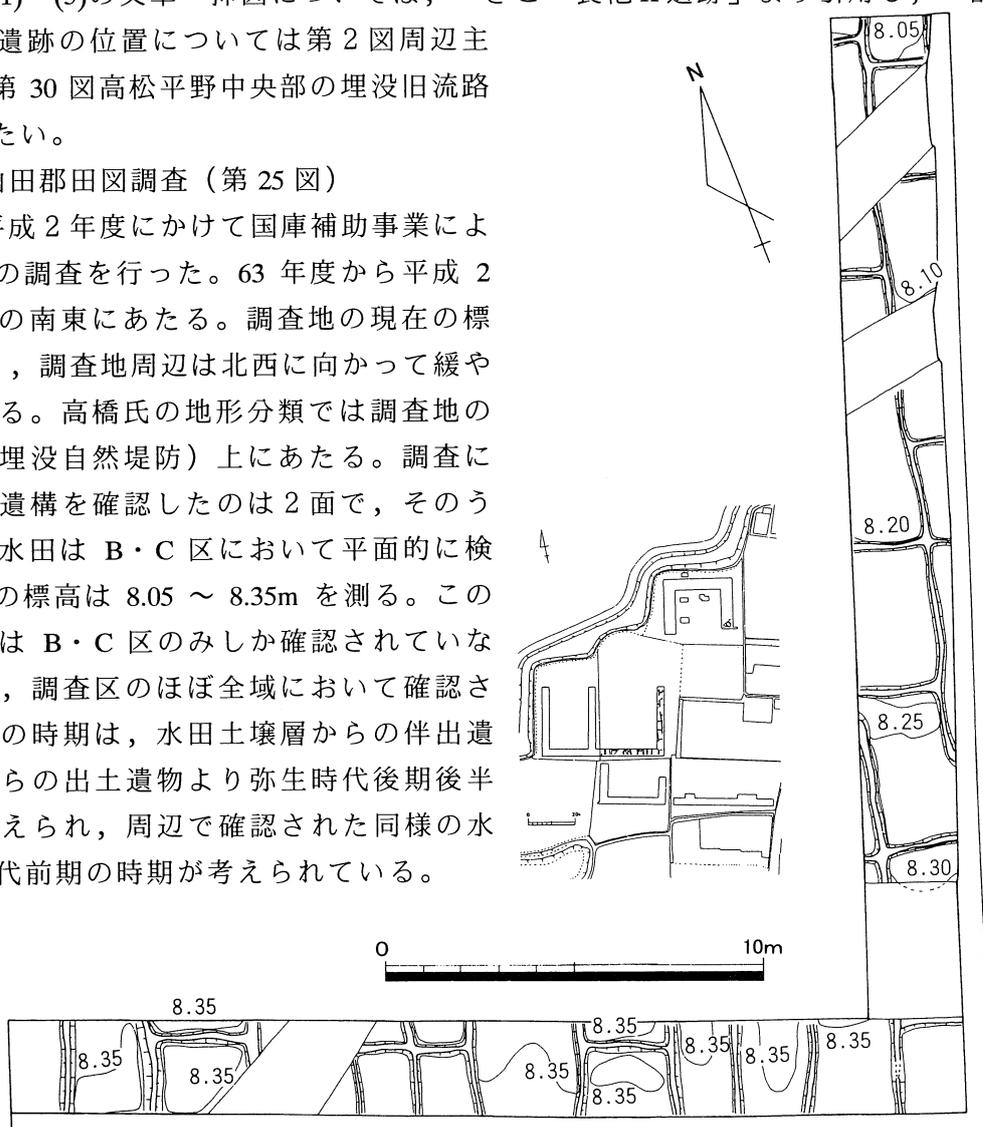
第2節 高松平野中央部における弥生時代前期の水田と集落の動向について

1 上西原遺跡周辺における他遺跡の水田遺構

上西原遺跡は高松平野中央部に位置するが、遺跡周辺では、近年の発掘調査により上西原遺跡と同様な弥生時代の小区画水田など初期水田に関わる遺構・遺物が発掘されている。これらの遺構・遺物は、すでに当市教委が刊行した「さこ・長池II遺跡」（高松市教育委員会 1994b）で山元により集成され論じられているが、上西原遺跡の類例が追加されたことにより、改めて各遺跡を紹介したい。(1)～(5)の文章・挿図については、「さこ・長池II遺跡」より引用し、一部を改変した。なお、遺跡の位置については第2図周辺主要遺跡分布図または第30図高松平野中央部の埋没旧流路・低地部を参照されたい。

(1)弘福寺領讃岐国山田郡田図調査（第25図）

昭和62年度から平成2年度にかけて国庫補助事業により田図北地区推定地の調査を行った。63年度から平成2年度の調査地は大池の南東にあたる。調査地の現在の標高は9.0m前後を測り、調査地周辺は北西に向かって緩やかに落ちる地形をする。高橋氏の地形分類では調査地の大半は埋没旧中洲（埋没自然堤防）上にあたる。調査において平面的に水田遺構を確認したのは2面で、そのうちⅩ層で確認された水田はB・C区において平面的に検出している。水田面の標高は8.05～8.35mを測る。この水田遺構は平面的にはB・C区のみしか確認されていないが、土層観察では、調査区のほぼ全域において確認されている。この水田の時期は、水田土壌層からの伴出遺物はないが、上層からの出土遺物より弥生時代後期後半より以前の時期が考えられ、周辺で確認された同様の水田の時期から弥生時代前期の時期が考えられている。

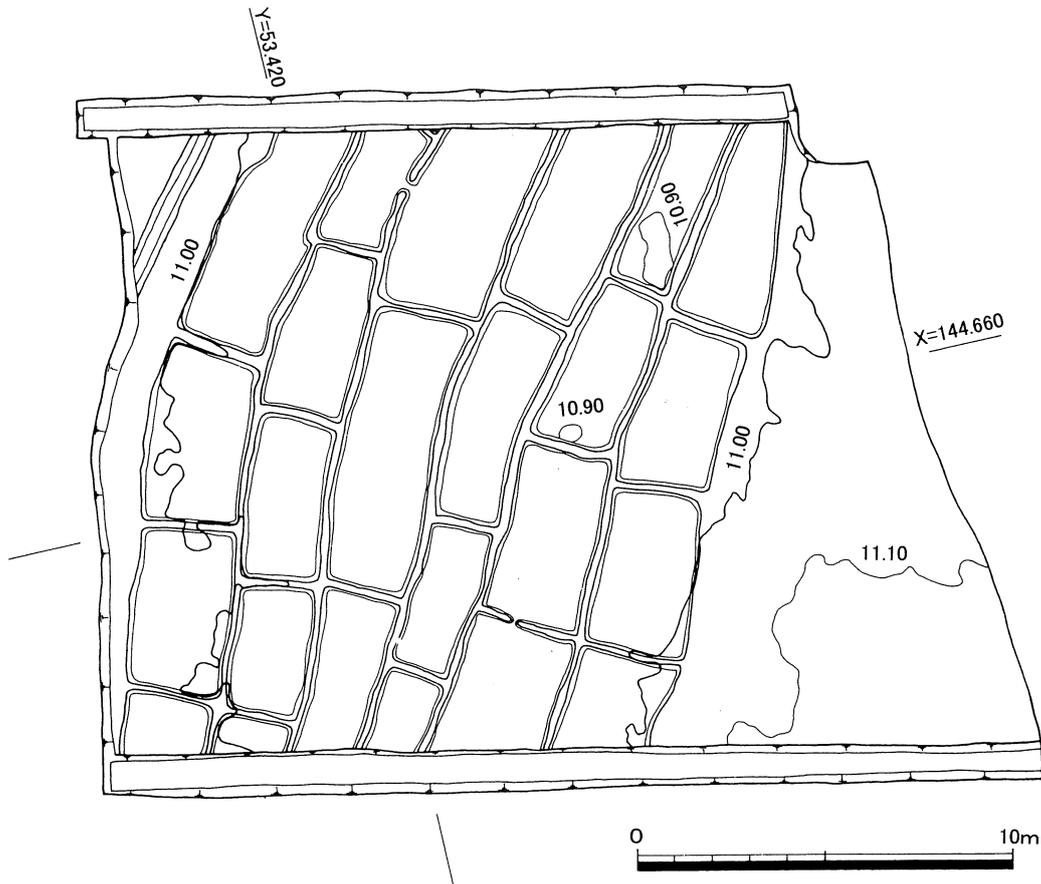


第25図 弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区C区第Ⅹ層検出不定形小区画水田(高松市教育委員会1990に加筆)

(2) さこ・長池遺跡（第26図）

平成元年度に調査し、縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を確認した。このうち古い時期の水田遺構はSR01西岸の微高地上及びSR02西岸の微高地上で確認されている。これらの水田は高橋氏の地形分類による自然堤防上に位置する。水田の形状は残りのよいSR01西岸の水田は工楽氏の分類によるB類にあたり、残りの悪いSR02西岸の水田遺構についても同様の形状であると考えられる。これらの水田遺構の時期は、SR01西岸で確認した水田遺構を

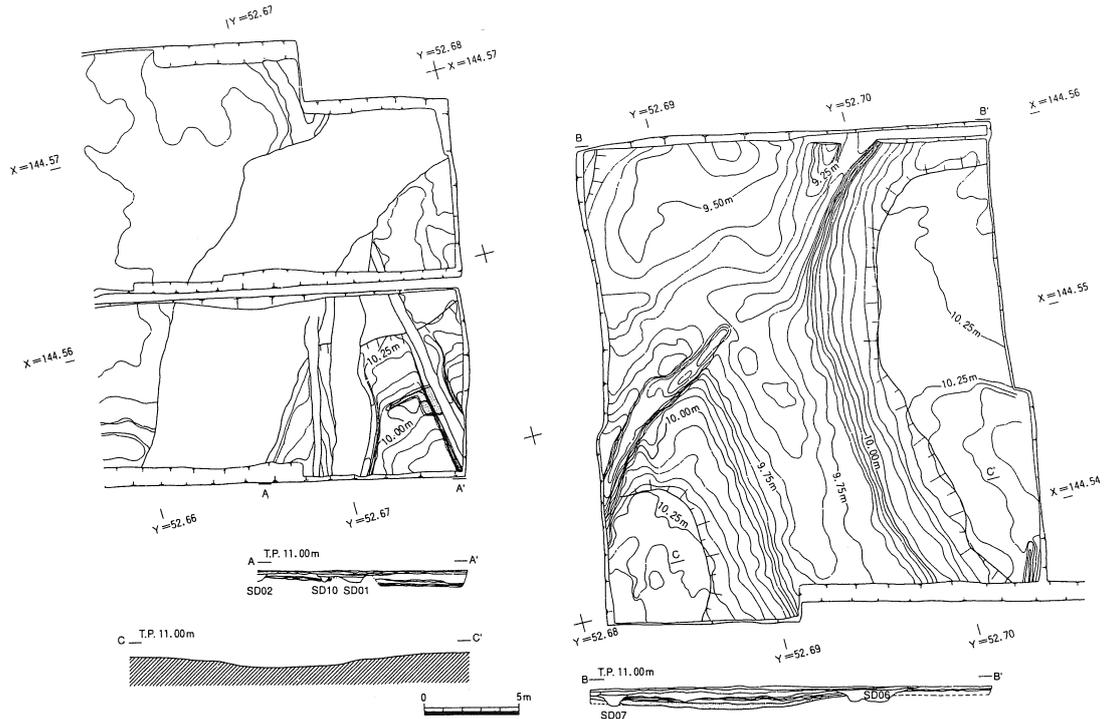
覆う洪水砂層上面から切り込む遺構の最も古いものが、弥生時代前期末の時期であることにより、これよりも古い時期の水田であると考えられる。水田遺構は確認されていないが、SR02からは農耕具と考えられる鋤状木製品が1点、縄文晩期から弥生時代前期にかけての遺物とともに川底より出土している。この鋤状木製品に類似するものが林・坊城遺跡からも出土している。



第26図 さこ・長池遺跡検出不定形小区画水田(高松市教育委員会1993に加筆)

(3) さこ・松ノ木遺跡(第27図)

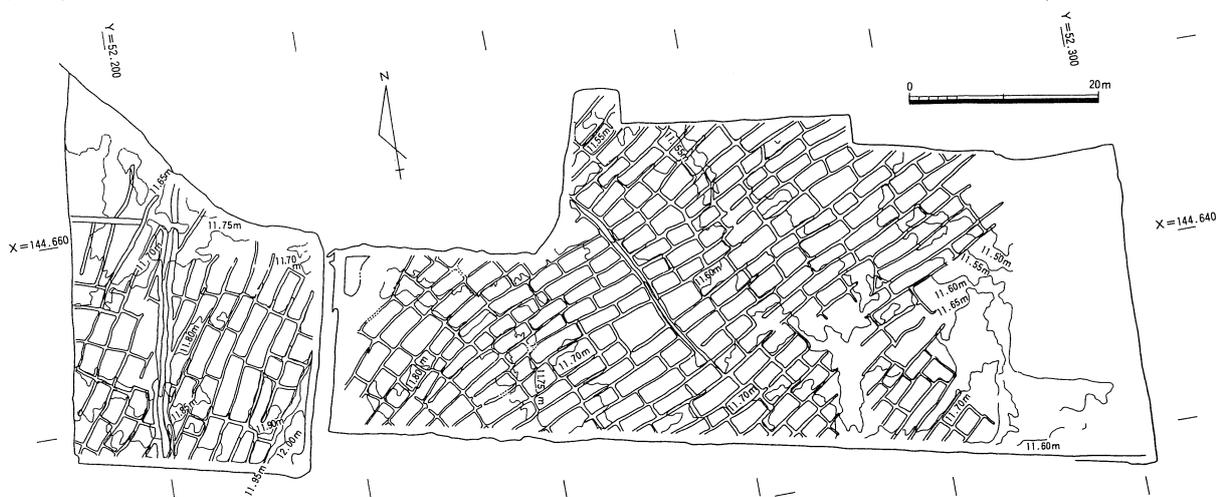
平成2年度に調査をし、弥生時代後期後半から近世にかけての遺構・遺物を確認した。このうち水田遺構と考えられるのは、調査区東端において確認したSX01である。この部分は高橋氏の地形分類では後背湿地部分にあたる。SX01は微高地上の帯状低地であり、その底面に堆積している黒褐色極細砂質シルト上面において等高線に平行する畦畔状高まりを確認し、一部上面検出を行っている。畦畔状高まりについては、一部分の範囲についての確認であるため詳細は不明であるが、水田面の検出が9.50～10.25mであり、他の水田遺構に比べ水田土壌層の傾斜が急であるため、遺構の立地は他の水田と同様であるが、水田形状は他の水田と若干異なるものと考えられる。この水田遺構の時期は、上層の洪水砂層の堆積により機能を失っており、この洪水砂層中から出土した土器より、弥生時代前期後葉の時期が考えられ、水田遺構はそれよりも古いものと考えられる。



第27図 さこ・松ノ木遺跡SX01(高松市教育委員会1994aより)

(4) さこ・長池II遺跡(第28図)

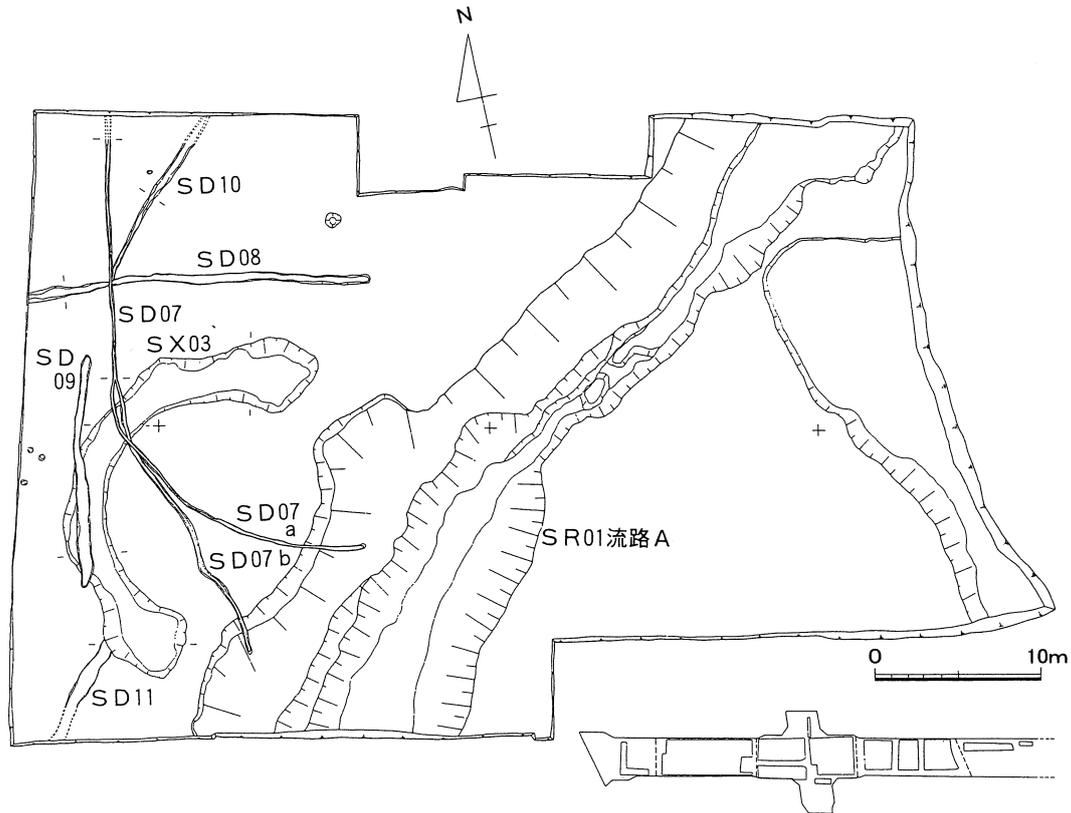
さこ・長池遺跡の西側にあたり、高橋氏の地形分類では、後背湿地から自然堤防上にあたる。水田遺構は調査区東半部の凹地において確認された。不定形小区画が合計 315 区画確認され、完全な形を保つ水田の平均面積は 5.76 m²である。各水田への給水方法は、水路が 2 本あり、一部に水口をもつものがあるが、基本は畦越しによって行われている。水田遺構の東部は途中で断絶するため不明であるが、さこ・長池遺跡西端で確認した水田遺構と同一であると考えられる。この水田遺構も上層に堆積する洪水砂層によって機能を失っている。この水田は水田遺構を切る土坑から出土した遺物より、弥生時代前期後葉と考えられ、水田はそれよりも以前の時期が考えられる。



第28図 さこ・長池II遺跡不定形小区画水田(高松市教育委員会1994bより)

(5) 林・坊城遺跡 (第 29 図)

県道 15 号線の東側に位置する。調査によって縄文時代晩期から近世にわたる遺構・遺物を確認している。注目すべき遺物は、SR01 流路 A から縄文時代晩期の突帯文土器が農耕具（狭鋤、スプーン状木製品）とともに多量に出土している。水田遺構は確認されていないが、前述の流路 A の同時期の堆積物からイネのプラントオパールが確認されていることにより、水田耕作が行われている可能佐が高いと想定されている。プラント・オパール分析によると縄文晩期とされる層からは、水生植物の化石が多量に検出されていることから、当時の環境を低湿地や比較的水深の浅い場所に生育していたものと考えている。



第 29 図 林・坊城遺跡 SD01 流路 A (香川県教育委員会 1993 より)

2 各水田遺構の立地環境及び水田遺構の形状について

以上のように、各水田遺構の概要を山元は列挙した後、次のように立地環境と水田遺構の形状をまとめている。

まず、香東川の旧河道別に分けると、先に説明した(1)～(4)の遺跡は高橋氏の分類による旧河道 A の流域にあたり、(5)の遺跡は一本東の旧河道の流域（仮に旧河道 C とする）にあたる。さらに、微地形で分けると、(1・2)は埋没自然堤防上、(3)の SX01 は埋没自然堤防に挟まれた後背湿地部分、(4)は埋没自然堤防から後背湿地部分にあたりと分類している。上西原遺跡の場合は、(1)～(4)と同様に旧河道 A の流域にあたり、(1・2)と同じ埋没自然堤防上に立地する。

次に、各遺跡検出の水田遺構の形状を分類すると、(1・2・4)どれもが不定形小区画水田であり、工楽善通氏分類の B 類^(註 2)にあたりとした。(1)に比べ(2・4)の区画形状が不正形になっているのは、(1)の等高線があまり入り込まず、地形が等間隔に緩やかに傾斜するのに対し、(2・4)は等高線が深く入り込むために形状が変わったものと考え、(1・2)は狭い範囲での検出であるため、

このような状況になっているが、広い範囲で水田遺構を検出している(4)では等高線が等間隔な整形に近い部分があることより、両水田は同一の形状であると論じている。上西原遺跡も、同様に不定形小区画水田のB類に分類され、旧河道A流域においては、不定形小区画水田が広く採用されていたと考えられる。

また、山元は各水田への水供給について、(1・2・4)のほとんどが水口をもたない水田であることから、「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる方法がとられたと考えている。さらに、水の供給源についても、工楽氏の考えや坂出市川津下樋遺跡の類例から、上流に灌漑施設を設けて、そこから水路等で引水したとしている。ただし、川津下樋遺跡の小区画水田は、ほとんどが水口を有することから、給水方法は水口を通して行っている。一方、上西原遺跡はほとんどが水口をもたないことから、「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる給水方法をとっていたと考えられる。

このように比較すると、香東川の旧河道A流域にあたる(1)弘福寺領田図北地区C区第IX層、(2)さこ・長池遺跡、(4)さこ・長池II遺跡、そして上西原遺跡で検出した弥生時代前期の水田は、次のような共通した特徴をもつことがわかる。

- ①立地は、埋没自然堤防上や埋没自然堤防に挟まれた後背湿地といった比較的安定した土地であること。
- ②水田の形状は、地形が緩斜面であることから不定形小区画水田を採用していること。
- ③緩斜面であることから、水の供給方法は「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる方法を採用していること。

これら4遺跡は、径約1kmの範囲内に入ることを考慮すると、同一集団またはつながりの深い複数の集団により、これら水田経営がなされた可能性が考えられる。

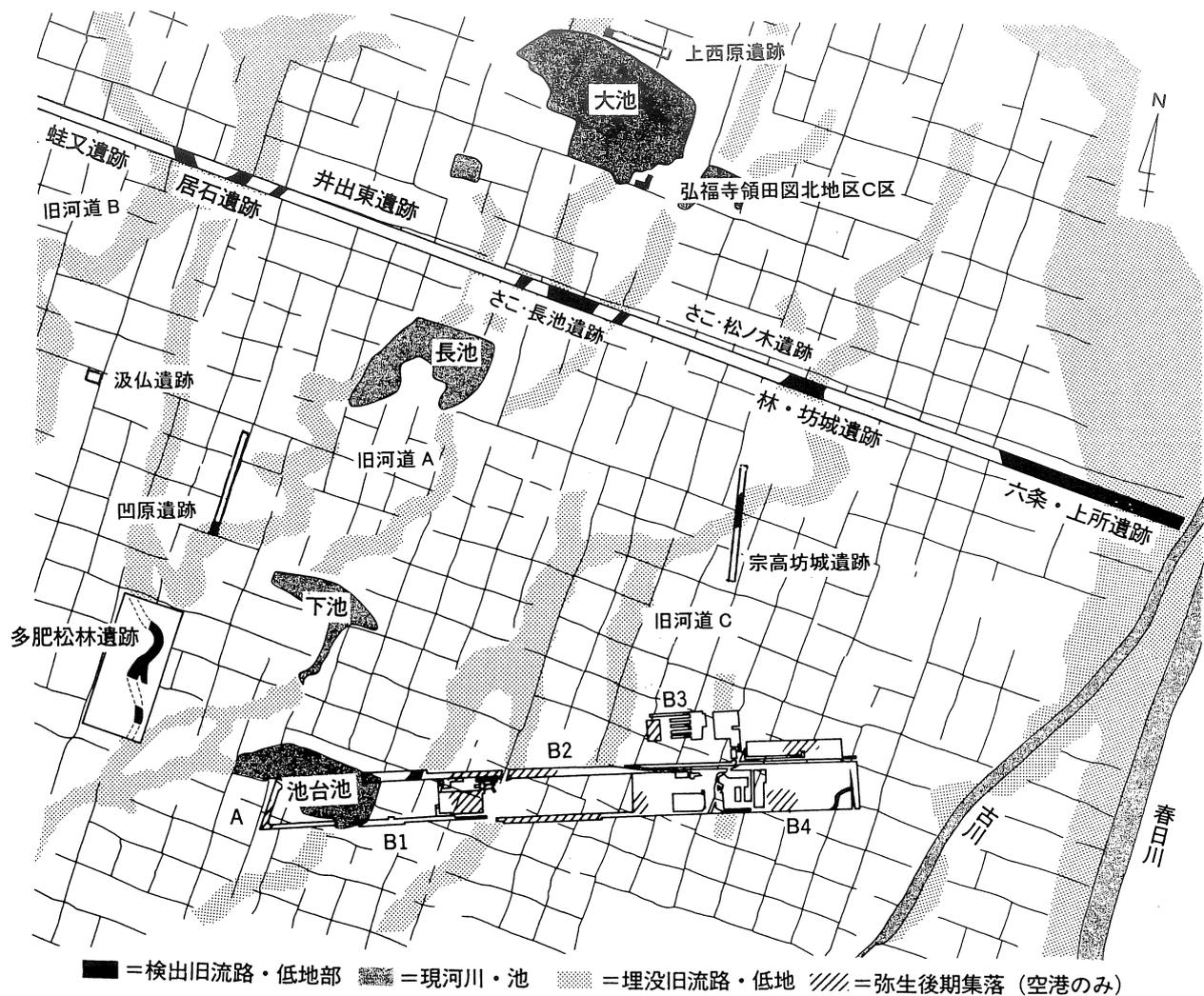
3 弥生時代前期後葉の洪水砂層について

先に紹介した各水田遺構に共通するもう一つの特徴として、どれもが洪水によると考えられる砂層に覆われて廃棄されていることが挙げられる。少なくとも径約1km圏内に所在する水田が洪水により埋没したことは、香東川の旧河道A流域に居住していた弥生人の集団に影響を与えたことは推測できる。ここでは、さらに周辺部の遺跡についても検討してみる(第30図参照)。

同じ旧河道A流域に属する遺跡として、多肥松林遺跡、凹原遺跡がある。多肥松林遺跡(香川県教育委員会1999)で検出した南北に蛇行する旧河道SR01は、まさに旧河道Aそのものである。SR01は、最下層より弥生時代中期中葉の土器・木器が出土したことから、この頃には流水が停止していたが、それ以前は機能していたと推定されている。また、SR01より古い流路であるSR02は砂礫層により埋没している。SR01西側微高地上にあるSD01は、前期後葉^(註1)の細砂層により埋没している。

凹原遺跡では、調査区中央において検出した東西にのびるSD18は、環壕の可能性をもつ溝だが、厚さ45cmの砂礫層により一気に埋没しており、砂礫層より弥生時代前期後葉の土器片がまとまって出土している。

旧河道B流域では、居石遺跡(高松市教育委員会1995b)SR01・02最下層において、縄文時代晩期に属する厚さ30～50cmの粗砂層が確認されている。現在のところ、旧河道B流域では弥生時代前期後葉の洪水による堆積層は確認されていないが、旧河道Bが埋没するのは古墳時代から古代末にかけてである。



第30図 高松平野中央部の埋没旧流路・低地部 (香川県教育委員会1997に加筆)

旧河道C流域に属する林・坊城遺跡では、旧河道Cに相当する SR01 流路Aにおいて、埋没土層4層中、厚さ約 25 cmを測る中層が黄褐色細砂・砂質土であり、弥生時代前期頃と推定されている。一方、旧河道Cを掘削した宗高坊城遺跡では、縄文時代晩期の泥炭層の上に、弥生時代後期の堆積層があり、弥生時代前～中期には河道がまだ埋没していないようである。

このように各事例から検討すると、弥生時代前期後葉では、旧河道Bは川として機能していなかった可能性がある。一方、旧河道A・C流域において、前期後葉の洪水の痕跡を確認できるが、旧河道Aの方が旧河道Cより洪水の痕跡は著しく、水田だけでなく集落に付随する溝さえも洪水の堆積層により埋められている。

以上のように、高松平野では、旧河道A流域を中心に、弥生時代前期後葉に大規模な洪水が起き、これにより水田が埋没し、弥生人の生産基盤が一気に失われたと推測できる。また、洪水が直接集落や人間にも被害をもたらした可能性もある。この変化は、集落の盛衰にも現れる。第6表は高松平野の弥生遺跡の一覧だが、前期(I期)では環壕集落が8遺跡も確認されているなど遺跡数が多いが、中期前葉(II期)になると遺跡数は激減し、平野部で確実に集落の存在が確認されているのはさこ・長池遺跡のみである。中期中葉(III期)になると、再び遺跡数とともに

	遺跡名	時 期						遺構・遺物	性 格	立 地	備 考
		晩	I	II	III	IV	V				
1	屋島城				○	○			散布地	丘陵頂部	
2	奥の坊			◎				石器類	集落	丘陵谷部	
3	奥の坊権現前					◎		近接棟持柱建物	集落	丘陵緩斜面	
4	大空					◎		大空式土器(64点)	集落	丘陵緩斜面	
5	大空南					○				丘陵緩斜面	
6	小山・南谷					◎		製塩土器	集落	丘陵緩斜面	
7	南谷					○		製塩土器	散布地	丘陵緩斜面	
8	新田本村						○		自然河道	沖積平野	
9	久米池南				◎	◎		絵画土器、鉄器	集落	丘陵頂部	高地性集落
10	久米山					○		土器棺	墓	丘陵斜面	
11	諏訪神社		◎				○	諏訪神社古墳	集落	低丘陵上	前期環濠?
12	川添浄水場						○		散布地	沖積平野	
13	前田東・中村					◎	◎		自然河道	沖積平野	
14	木太中村						○		自然河道	沖積平野	
15	大池						○		散布地	沖積平野	
16	天満・宮西		◎				○	◎	集落	沖積平野	前期環濠
17	天満		◎						集落	沖積平野	前期環濠?
18	松縄下所		○					小区画水田	水田	沖積平野	
19	境目・下西原						○			沖積平野	
20	上西原		○							沖積平野	
21	キモンドー					○	○		自然河道	沖積平野	
22	上天神						◎	大規模灌漑溝	集落	沖積平野	
23	太田下・須川	○	○	○	○	○	○		集落	沖積平野	
24	居石	○	○				○	小型倣製鏡	自然河道	沖積平野	
25	井手東Ⅱ	○	○						自然河道	沖積平野	
26	井手東Ⅰ				○			木製品	自然河道	沖積平野	
27	浴・長池Ⅱ			○	◎		○	小区画水田	集落、水田	沖積平野	
28	浴・長池		○	◎	○	○	○	小区画水田	集落、水田	沖積平野	
29	浴・松ノ木		○	○	○	○	○		自然河道	沖積平野	
30	林・坊城	○	○				○	晩期の木製農具、円形周溝墓	自然河道	沖積平野	
31	六条・上所						◎		集落	沖積平野	
32	林・浴						○			沖積平野	
33	林下所		○				○			沖積平野	
34	汲仏		◎				○	◎	集落	沖積平野	前期環濠
35	凹原		○		◎		◎		集落	沖積平野	前期環濠?
36	松林	○	○	◎			◎	噴礫	集落	沖積平野	
37	多肥松林				◎	◎	◎	鳥形木製品	集落	沖積平野	
38	日暮・松林				◎	◎	◎		集落	沖積平野	
39	多肥宮尻	○	○	○	○	○	○		自然河道	沖積平野	
40	宮尻上		○							沖積平野	
41	宮西・一角		○	○			○			沖積平野	
42	一角		○				◎		集落	沖積平野	
43	宗高・坊城	○					○		自然河道	沖積平野	
44	空港跡地	○	○	○	○	◎	◎	周溝墓	集落	沖積平野	
45	光専寺山		◎						集落	低丘陵上	前期環濠?
46	中山田					◎	◎		集落	丘陵頂部	
47	葛谷						◎		集落	丘陵斜面	
48	(大原神社)							銅剣(伝世品)			
49	竹元						○		自然河道	沖積平野	
50	三谷通谷						○		墓	丘陵斜面	
51	円養寺						○		墓	丘陵	
52	十川東・平田				◎		◎		集落	段丘上	
53	下ノ山							銅矛2	散布地	丘陵頂部	
54	摺鉢谷					○	○		散布地	丘陵頂部	
55	松並・中所		○			◎	○		集落	沖積平野	前期環濠?
56	奥ノ池						○	○	散布地	沖積平野	
57	西ハゼ土居		○				○	○	小区画水田	水田	沖積平野
58	香西南西打		○					○		沖積平野	
59	西打	○						◎	集落	沖積平野	
60	鬼無藤井	○	◎					○	集落	沖積平野	前期環濠
61	佐料							○	散布地	沖積平野	
62	御厩池							○	散布地	沖積平野	
63	田村神社							○	墓	沖積平野	
64	正箱							○		沖積平野	

第6表 高松平野の弥生遺跡一覧表(◎が集落)(大嶋・川部1999より一部改変)

に集落が増えており、後期(V期)以降では集落数が倍増する。このように、前期後葉の洪水が弥生人の生産基盤を奪ったために、集落の減少をもたらしたと考えられる。ただし、この考えに対し、別の考え^(註3)も成り立つが、程度の差はあれ洪水が平野に住む弥生人に被害を与えたことは事実であろう。

現在、平野部すべての遺跡を調査したわけではなく、調査した遺跡も旧河道A流域に片寄って多い。今後の発掘調査の進展により、平野各地域ごとの弥生集落の様相が明らかになると思われる。

註

- 1)報告書では前期中葉となっているが、実測図を見る限り、前期後葉と考えられる。
- 2)工楽善通氏分類のB類は、「微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したもので、水田区画は概して小さく、傾斜の度合いに応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定形となることが多い。」である。
- 3)別の考えとして、中期前葉(Ⅱ期)では、建物の遺構が明確に残らないために、集落として把握できない可能性もある。これは、前期(Ⅰ期)では環壕といった集落を取りまく溝は高松平野で6例以上確認している反面、竪穴住居や掘立柱建物跡など明確な住居を示す遺構は確認されておらず、前期の住居は遺構として残りにくいものであった可能性がある。環壕は前期末には消滅する。一方、遺構として確認しやすい竪穴住居は中期中葉(Ⅲ期)では数多く確認されている。このように考えると、中期前葉(Ⅱ期)の遺跡は、集落として把握できにくい可能性がある。

参考文献

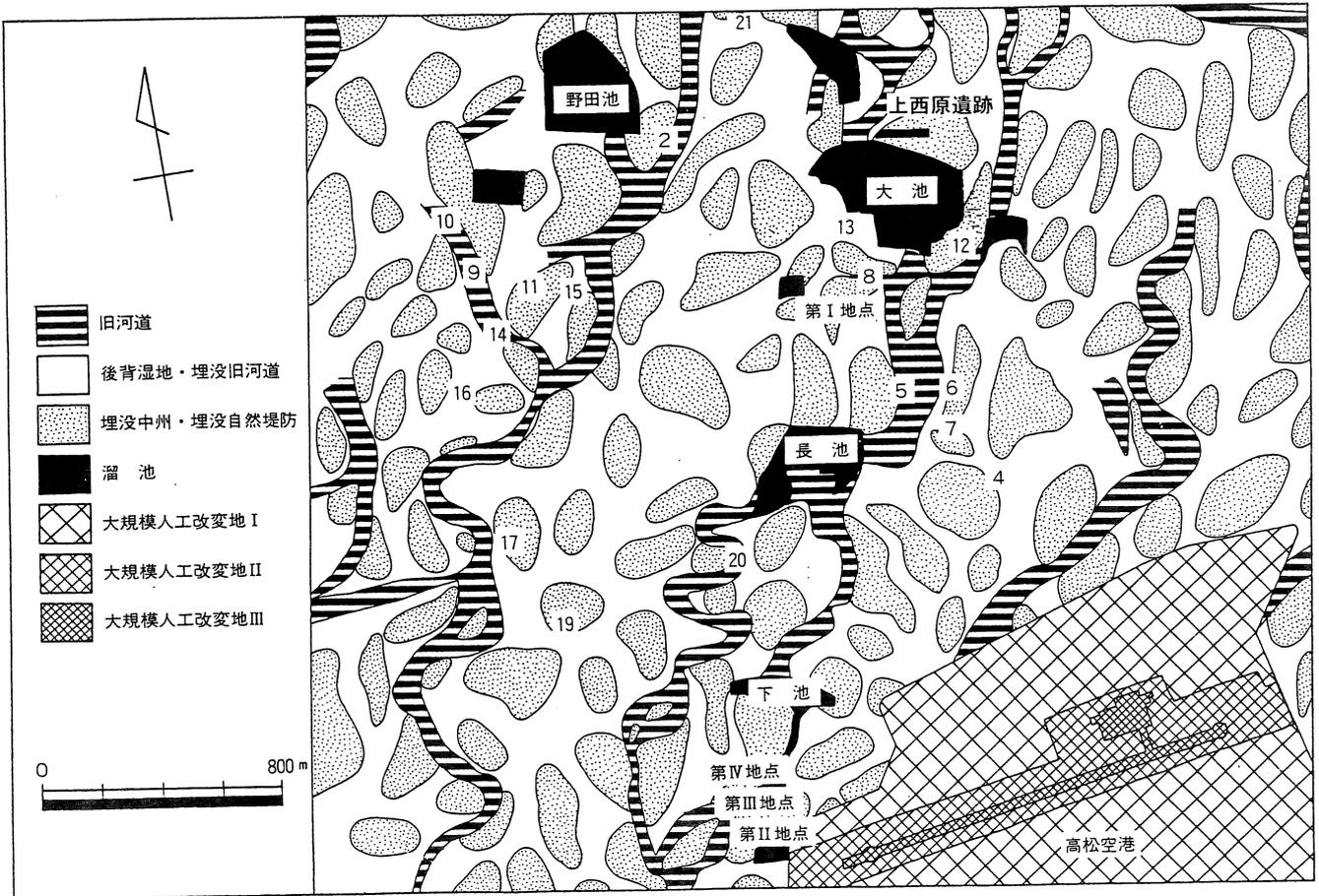
- 香川県教育委員会 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 林・坊城遺跡』
- 香川県教育委員会 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十一冊 川津下樋遺跡』
- 香川県教育委員会 1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』
- 香川県教育委員会 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』
- 高松市教育委員会 1990『弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地発掘調査概報Ⅲ』
- 高松市教育委員会 1993『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 さこ・長池遺跡』
- 高松市教育委員会 1994a『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 さこ・松ノ木遺跡』
- 高松市教育委員会 1994b『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊 さこ・長池Ⅱ遺跡』
- 高松市教育委員会 1995a『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 蛙股遺跡』
- 高松市教育委員会 1995b『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 居石遺跡』
- 大嶋和則・川部浩司 1999「高松平野における集落の様相」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会
- 工楽善通 1991「水田経営の立地と区画」『水田の考古学』東京大学出版会

1. はじめに

当遺跡は、高松平野のほぼ中央部に位置し、木太町の木太新池（通称大池）の北にあたる。平野の地形分類では、当遺跡は扇状地帯Ⅰの埋没中州・埋没自然堤防とされている（第31図）¹⁾。発掘調査は、こうした微高地を横断するかたちでほぼ東西方向に実施された。調査区は東より1A区、1B区、2区、3区に設定され、そのうち2区では第3遺構面で不定形小区画の水田址が、また1B区では同じく第3遺構面で2条の大畦畔とともに溝状遺構が1条検出されている。

なお、1B区の大畦畔を覆う地層中より凸帯文土器と弥生時代前期の可能性のある小片が出土しており、水田址の時期は弥生時代前期の範疇でとらえられている。また、2区での伴出遺物はないが、地層の堆積状況から1B区と同時期とみられている²⁾。

両調査区での土地条件を明らかにするとともに、2区では同一地表面での土地利用の状況を、また1B区では水田としての土地利用の有無を確認するために、プラント・オパール分析を実施した。



第31図 微地形分類図(高橋1992に加筆)

2. 地形環境

2区の水田面や畦畔の構成層は、ともに暗褐色や黒灰色の砂混じりシルト層ならびに砂質シルト層で一部に炭化物を混じえるが、遺構による層相の大きな違いはみられない。1B区では、全般的には2区と同様に暗褐色や黒灰色の砂混じりシルト層ならびに砂質シルト層で構成されるが、調査区の西端部では粗粒化してシルト混じり細砂層やシルト質細砂層となる。

2区ではほぼ南北方向に長軸をもつ不定形の小区画水田が検出され、西側に向かうに従い僅かに傾斜する。他方、1B区では南東から北西方向に50cm以上の傾斜をもつ。調査区内では、ほぼ南北方向と南西から北東方向の大畦畔ならびに後者に沿う溝状の遺構が検出されている。また、遺構面の多くは細礫層によって埋積されているが、1B区の南側ではシルト層や細砂層といった細粒物質となっており、2区とは異なった状況がみられる。

プラント・オパール分析用として、2区では水田面と畦畔より計65試料が採取され、そのうちの46試料を分析に供した(第32図)。また、1B区では調査区内に200cmごとのメッシュを設定し、その交点において計52試料が採取された。ここでは、そのうちの26試料を分析用とした(第33図)。なお、試料番号はサンプリング地点のそれと同一である。また、同一地表面上の土地条件や土地利用の状況を比較検討するために、採取された地層の上部すなわち地表面に近い部分を分析の対象とした。

3. 分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥－重量測定・仮比重測定－ガラス・ビーズの混入－ホモジナイザーによる分散－ストークス法による細粒物質の除去－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ(200個)とプラント・オパールとの比率から、試料1gあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ(乾物重)を層厚1cm・面積10aあたりの検出量で示した。

なお、火山の噴火によって降灰した火山ガラスを、そこで生成されたプラント・オパールと直接比較することはできないが、地層中の火山ガラスの含有状況ならびに出現傾向を検討するために、ここではプラント・オパールと同一基準で図に示した。また、動物珪酸体についても同様である。

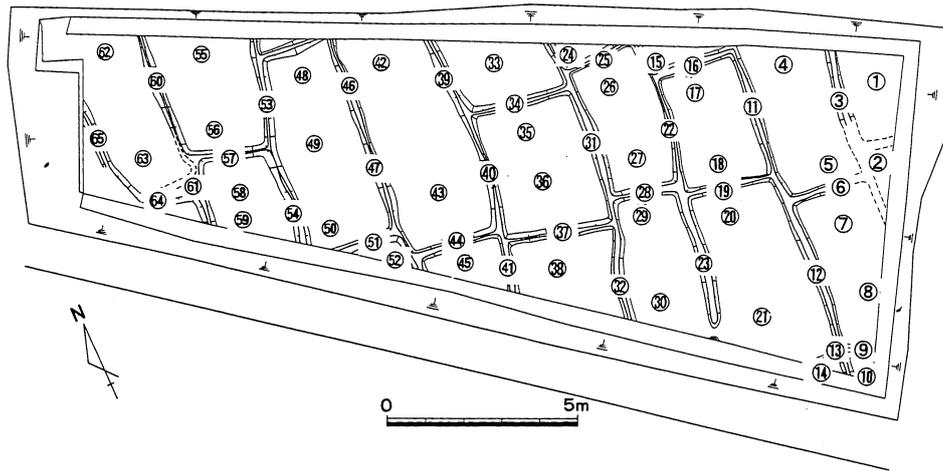
4. 結果

1) 2区

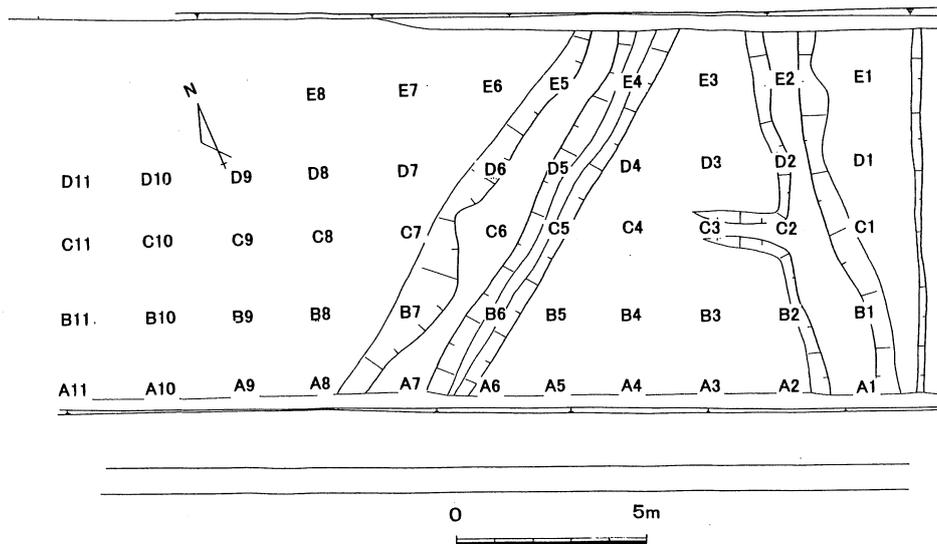
プラント・オパールの検出数と量は全般的に非常に多く、とりわけネザサ節型に代表されるタケ亜科の高出現に特徴づけられる(第34図)。また、検出総数は調査区西側の標高の低い所で多くみられる傾向を示している。さらに、水田面に較べて畦畔(試料番号3, 6, 11, 19, 28, 31, 37, 40, 44, 47, 51, 54, 65)での検出数と量が多い。なお、ヨシ属に代表されるような低湿な状況を示すプラント・オパールは少ない。また、イネの機動細胞プラント・オパール(以下イネ)は、試料3, 6, 18, 29, 30を除く全てにおいてみられるが、それらの検出数と量は

必ずしも多いとは言えない。

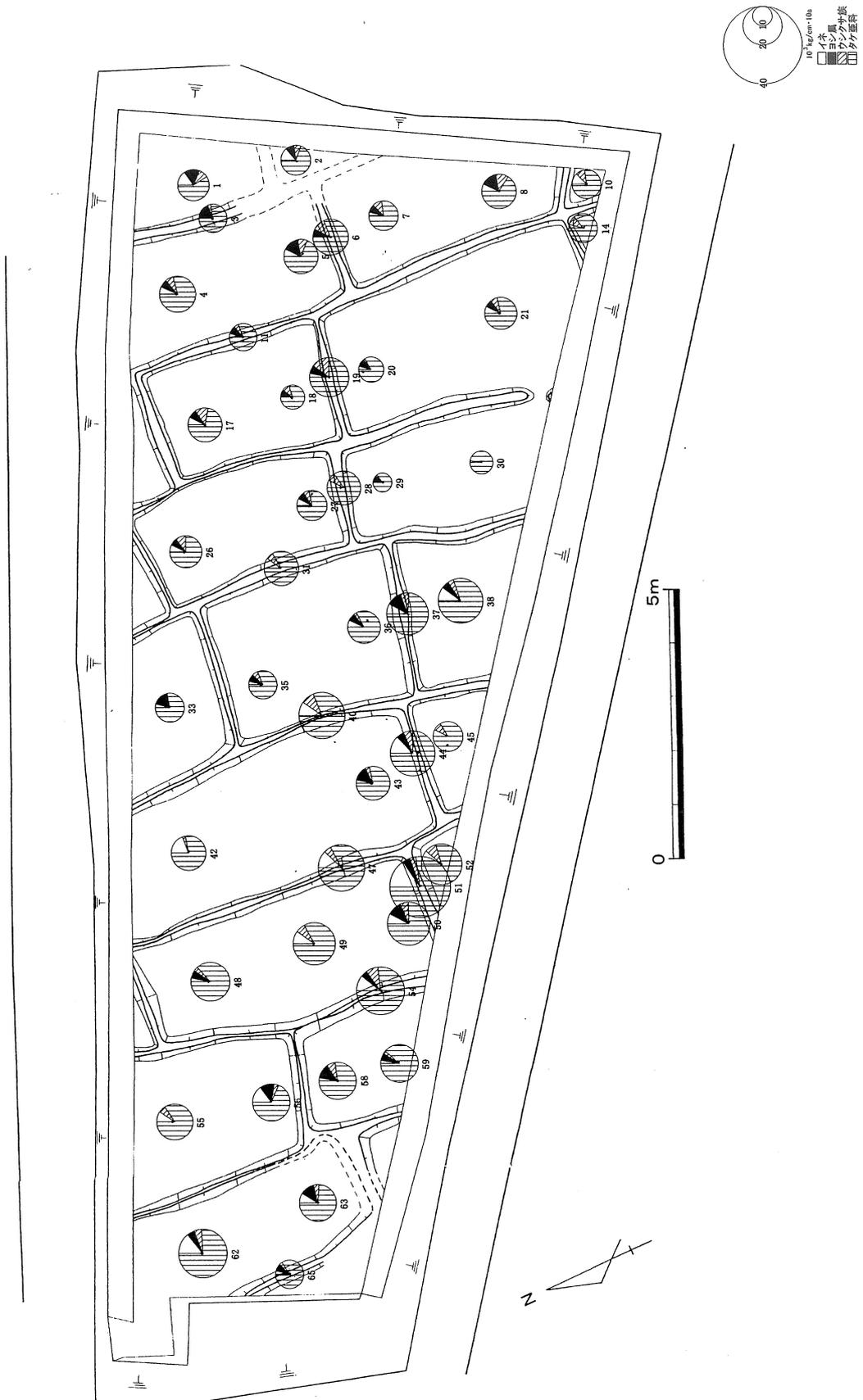
また、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科に限ってそれらの検出量の違いをみると、検出総数と同様に調査区の西側で多くみられる傾向にある。なお、全般的には水田面よりも畦畔での検出量が多い（第35図）。



第32図 試料採取地点(2区)



第33図 試料採取地点(1B区)



第35図 プラント・オパールの出現傾向(2区)

2) 1 B区

2区と同様にネザサ節型に代表されるタケ亜科の高出現に特徴づけられるが、2区に較べて調査区内における検出総数と量の違いが顕著である(第36図)。なお、検出総数は2区では標高の低い西側で多いのに対し、1B区では標高の高い東側で多い。また、イネは26地点のうち13地点でみられたが、それらの数や量は少ない。しかも、調査区の東側で主に検出され、西側ではイネは大畦畔付近のA-9、B-8、C-7とC-11の各地点で僅かに検出されるのみである。

また、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の検出量の分布傾向は、検出総数と同様である。すなわち、大畦畔近辺とそれらの間にあたる調査区東側での検出量が非常に多く、西側になるに従い減少している(第37図)。

5. 考察

1) 土地利用と土地条件

当遺跡は扇状地帯Ⅰの埋没中州・埋没自然堤防にあたる。扇状地帯Ⅰの形成時期は平野のなかでも古く、こうした埋没微高地の縁辺部に位置する当遺跡では、非常に安定した土地条件が長期にわたり継続していたとみられる。

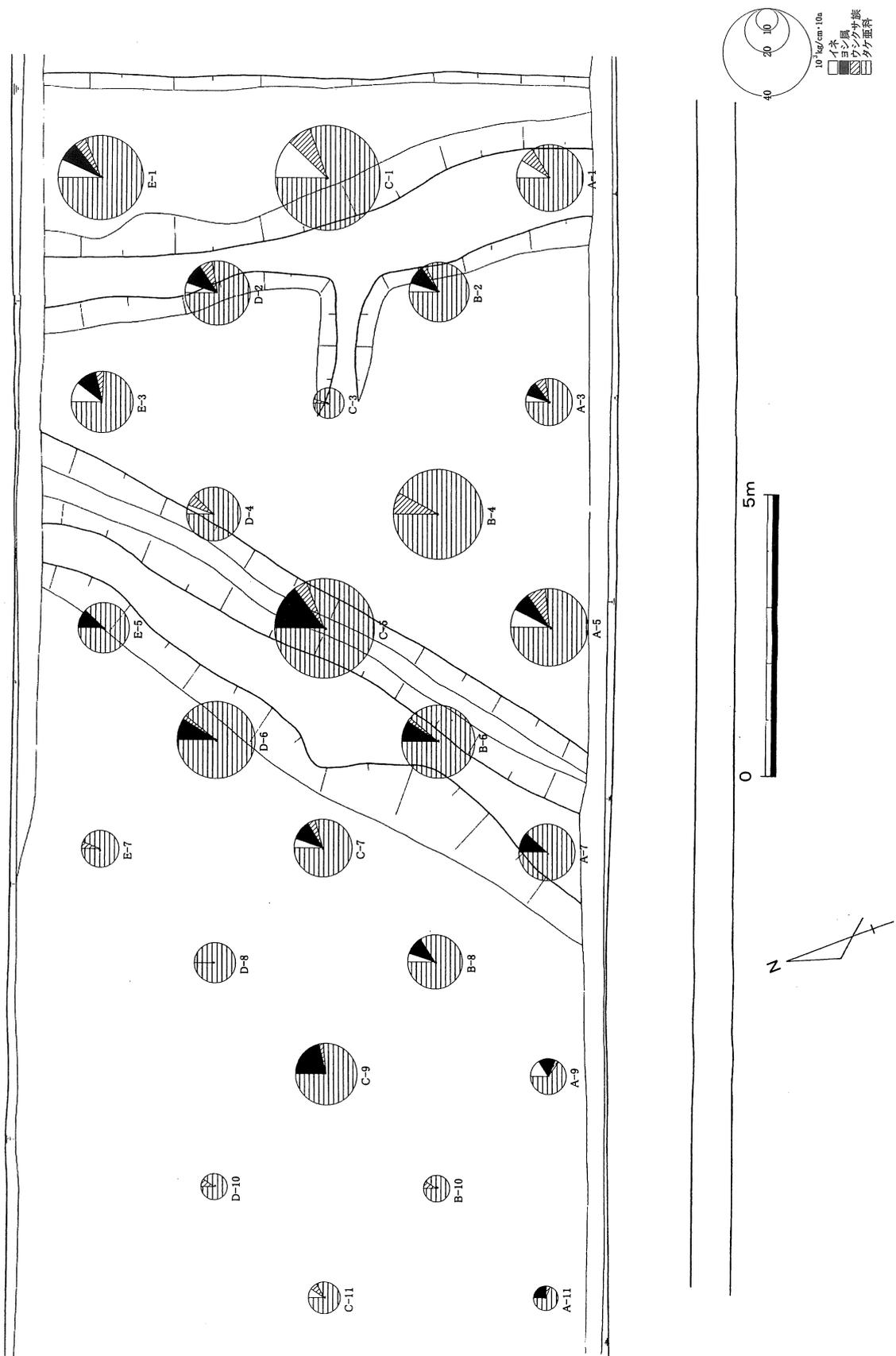
2区のプラント・オパール分析の結果はタケ亜科の高出現に特徴づけられるが、高燥で非常に安定した環境のもとでタケ類を主とするイネ科植物が生育していたようである。かかる地層を利用して水田は営まれた。2区と同様の高燥で安定した土地条件は1B区の東側においてみられるが、調査区の西側になるに従いプラント・オパールの検出数と量は少なくなり、また西端部では細砂層を主とした層相に変わる。このように、同一地表面を構成する地層とプラント・オパールの検出状況に違いがみられることから、1B区内では異なった地層の堆積環境であったことが考えられる。

ところで、瀬戸内沿岸地域でも岡山県や兵庫県西部でみられる縄文時代後期～弥生時代の黒土層のなかには、高燥な土地条件を示すものが少なくない。それは一見低湿地に生成された有機質土壌の層相を示しているが、検出されるプラント・オパールはタケ亜科あるいはウシクサ族を主体としており、これらは高燥な微高地及びその縁辺部で生成されたものである³⁾。当遺跡でみられる暗褐灰色や黒灰色の地層も同様である。

2) 地形環境と初期水田

2区の畦畔の形状は南北方向に長軸をもち、水田面は西側に僅かに傾斜しており、地形の微起伏を利用した水田造営のあり方がみられる。傾斜に併せて水田を区画するというこうした方法は、日本各地の弥生時代の小区画水田においても同様にみられる。水田面と畦畔との比高は2～3 cmを保っており、また調査区内の水口の検出は南東部の1ヶ所のみであることから、田越しによる給排水がおこなわれていたと考えられる。

なお、2区でのイネの検出は必ずしも多くはない。また、水田面を細礫層が被覆していることから水田は洪水層によって埋積された可能性が高く、従って水田造営の期間は長期に及ぶものではなかった。同様の地形環境とイネの検出状況は、兵庫県加古川市の美乃利遺跡においてもみられる。緩傾斜地に整然と区画された水田は、その後の洪水層による埋積を受けて水田の造営期間は短いものであった⁴⁾。また、畦畔を構成する地層からもイネは検出され、その他のプラント・オパールの数も水田面よりも多い。これは水田として利用していた地層を盛り土し



第37図 プラント・オパール出現傾向(1B区)

て畦畔が造られていたことを示すものである。

これに対して、1B区では調査区の東側で2条の大畦畔が検出されている。また、調査区内の遺構面は50cm以上の高低差をもって北西方向に傾斜している。プラント・オパールを検出数と量は標高や遺構の検出状況の違いに対応しており、標高の高い東側の大畦畔の周辺で多く、標高が低く遺構のみられない西側になると減少する。こうした地形面の傾斜や地層の堆積状況、イネの検出状況などを踏まえると、大畦畔の西側における稲作の可能性は低いとみられる。あるいは、遺構面が西側で北西方向に傾斜することから、上層の堆積時に水田層の上部が遺構とともに削平されたことも考えられる。

なお、両調査区の水田遺構の時期はともに弥生時代前期と考えられているが、水田遺構の検出状況やイネの出現傾向、地形面の微起伏、さらには遺構面を覆う地層の状況に若干の違いがみられ、同一時期においても時期差のあることが推定される。

ところで、高松平野における弥生時代の小区画水田の発掘は、隣接する弘福寺領讃岐国山田郡田岡北区比定地⁵⁾ やさこ・長池遺跡⁶⁾、同II遺跡⁷⁾、西ハゼ土居遺跡⁸⁾ において検出されている。地形はいずれも扇状地帯Iにあたり、香東川の旧河道が形成した埋没中州・埋没自然堤防の縁辺部に位置する。

なお、各地でみられる初期の水稻作の発展段階は大きく二つに分けて考えることができる(第7表)。すなわち、稲作農耕文化を構成する各要素が徐々に波及してゆく第I段階と、それらの要素がほぼ集まり稲作農耕文化として完成する本格的な水田造営の第II段階である。なお、第I段階の初源的な水稻農耕は、地域によっては①と②の段階に分けられる。また、第II段階の時期の上限はこれまでのところ北部九州では縄文時代晩期後半、西日本では弥生時代前期、東日本では同中期後半と考えられる⁹⁾。

稲作開始当初には、旧河道や浅谷内の低湿地が水田造営の場として選ばれ、やがて微高地の縁辺部や緩傾斜地に拡大している。高松平野における弥生時代の各水田址は第II段階にあたり、初期水田と地形環境との関係は各地と同様のあり方を示している。

<p>第 I 段階 - 稲作農耕文化を構成する各要素の波及</p> <p>① 第一次資料 (イネ資料) の波及 旧河道や浅谷などの微凹地に天水や地下水を利用した直播きあるいは移植栽培、雑草などを草畦として利用する段階</p> <p>② 第二次資料群のなかの水田址を伴う段階</p> <hr/> <p>第 II 段階 - 稲作農耕文化として完成</p> <p>土畦ならびに杭や矢板で補強した畦畔、水路や井堰などの水利施設や農耕具などを伴い、完成された形で稲作が営まれる本格的な水田造営の段階</p>

第7表 水稻作の段階的発展(外山1998)

ところで、両調査区では全試料から火山ガラスが検出され、2区では西側で（第34図）、他方1B区では東側で（第36図）多くみられ、プラント・オパールと同様の出現傾向を示している。高松平野では井手東I遺跡¹⁰⁾の地表面下75～100cmの層準でアカホヤ火山灰が、また中間西井坪遺跡¹¹⁾や木太本村II遺跡¹²⁾ではAT火山灰が検出されている。このように平野の扇状地を構成する地層中には火山灰が挟在されており、両調査区で検出された火山ガラスは、侵食された火山灰層が洪水等によって上流域から運ばれて再堆積したものとみられる¹³⁾。

6. おわりに

当遺跡では、2区と1B区において地形分析と発掘された遺構の構成層を対象としてプラント・オパール分析をおこない、土地条件や土地利用について検討した。その結果、両調査区はともに扇状地帯Iの埋没微高地の縁辺部にあたり、高燥で安定した土地条件であったことを明らかにした。

また、2区では微起伏に対応して南北に長軸をもつ不定形の小区画水田が発掘され、ほぼ全地点からイネの検出がみられる。ただし、それらの検出数と量は少なく、一時的に水田が営まれた後に短期に埋積されている。

これに対して、1B区では調査区の東西で地表面の傾斜や遺構の検出状況が異なり、また西端部では地層の粗粒化がみられる。そして、これらはプラント・オパールの出現傾向とも対応している。すなわち、1B区の東側では、大畦畔と溝状遺構が発掘されている。他方西側では、イネの検出はまれで水田として利用されていた可能性は低いと言えるが、水田が造営された後に削平されたことも考えられる。

以上のように、両地区の水田遺構の状況は異なる。両者の時期は弥生時代前期とされるが、上記の点を踏まえると両者は前期のなかでもやや時期を異にしているとみられる。

註

- 1) 高橋 学 (1992)「高松平野の地形環境」高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書
- 2) 高松市教育委員会の山本英之氏のご教示による。
- 3) 外山秀一 (1997)「美乃利遺跡の立地環境と稲作」兵庫県教育委員会『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告 第165冊
- 4) 前掲3)
- 5) 山本英之・中西克也 (1992)「発掘調査の概要」前掲1)
- 6) 高松市教育委員会他 (1993)『さこ・長池遺跡』一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊
- 7) 高松市教育委員会他 (1994)『さこ・長池遺跡』一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊
- 8) 高松市教育委員会 (1998)「西ハゼ土居遺跡現地説明会資料」
- 9) 外山秀一 (1998)「稲作の始まりと地形環境」歴史九州 第8巻 第6号
- 10) 檀原 徹 (1995)「井手東I遺跡出土火山灰分析」高松市教育委員会他『井出東I遺跡』一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊
- 11) 香川県教育委員会他 (1991)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』
- 12) 香川県教育委員会 (1992)『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』
- 13) 外山秀一 (1999)「弘福寺領山田郡田図比定地周辺の遺跡の立地環境II」高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査II』

第6章 汲仏遺跡の調査について

第1節 調査の経過

調査地である高松市多肥下町^{たひしも}1262番地1は、小字名で汲仏^{こんぼとけ}と呼ばれる地域に所在する。高松市が昭和62年2月2日決定した太田第2土地区画整理事業の施行区域内にあり現在も事業進行中で、市街化が極めて著しい地域に当たっている。調査該当の地筆は戦前、倉敷紡績飛行機工場であったが戦後は四国管区警察局通信所がおかれ、その無線通信用鉄塔が地域のランドマークともなっていた。

同所は、香川県教育委員会文化行政課が平成9年9月24、25の両日に実施した「香川県警察機動隊舎整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査」該当地筆の一角である。トレンチ4カ所を設け（約75㎡）で行われたこの試掘調査で、敷地東寄りのトレンチ1は表土下約70cmに層厚15cmの弥生・中世土器包含層と弥生後期の溝遺構面を確認し、トレンチ2も同一層序を示した。敷地西半のトレンチ3Aは表土下10cmに遺構面を持つ弥生後期溝を検出し、トレンチ3Bも同様の層序を示す事が報告された。弥生溝遺構では完形に近い土器片も含まれており、近辺には集落関係の遺構が所在する可能性が高い事が確認された。当該地では、各種事業の実施に先立って文化財保護法に基づく保護措置を図る必要があると指摘されていたところである。

前記区画整理事業により街路拡幅整備に伴う水路改良工事が施行されるに当たり、高松市教育委員会がその拡幅にかかる部分（おおよそ幅2m×南北延長50m×深さ1m）につき、工事立会による調査を実施したものである。調査は山本英之が担当し、末光甲正が補助に当たった。同工事では平成10年2月23日から工事用進入路造成が行われ、拡幅部分の掘削に着手した同3月3日に立会調査を行った結果、柱穴等の遺構・遺物が確認されて緊急の確認調査に至ったものである。調査期間は、平成10年3月3日～6日であり調査面積はほぼ125㎡であった。底部幅約2mで、バックホーにより南から北へ法面に若干の傾斜を持たせて掘削を行った。

南半部は、既存建築物による攪乱部分に続き地表下1mたらずでシルト層となり、密生した葦類植物の根茎部が遺存し滞水による還元で緑灰色を呈していた。この層は根茎部密集で遺構判別不能であった。数10cm下位では別記の柱穴数件が検出された。遺物はみられず時期の特定はできなかった。北半部は、地表下約80cmで須恵器・土師器の包含層を確認し更に須恵器埋納の土坑や柱穴が検出された。これに基づき調査を続行したところ9～10世紀にかけての掘立柱建物の一部等の存在が明らかとなった。次いで約20cm下位に弥生時代後期の遺構面があり調査区の北端近くでは南西～北東方向に流路を持つ幅約3mの溝とこれに伴う土器群が出土して、先の香川県による試掘調査トレンチ1で検出された遺構の下流に接続する可能性が高いと判断された。これにより西側に接する部分にも広がるのが確実な平安時代の掘立柱建物及び弥生時代後期の溝を確認した他、石材を用いた点でも特徴的な「大」字線刻の文字資料を得る等の成果が得られた。

上記結果から、周辺一帯は少なくとも弥生後期及び平安2時代の遺跡が立地することが明確となり、更に今後の調査が期待されることとなったものである。遺跡名は同地の小字名であり香川県による試掘調査でも使用された「汲仏（こんぼとけ）」を踏襲した。

後日実施された『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報・汲仏遺跡』（1999.3）で報告された調査により、本遺跡西側接続部分の状況が明らかにされている。

第2節 調査の成果

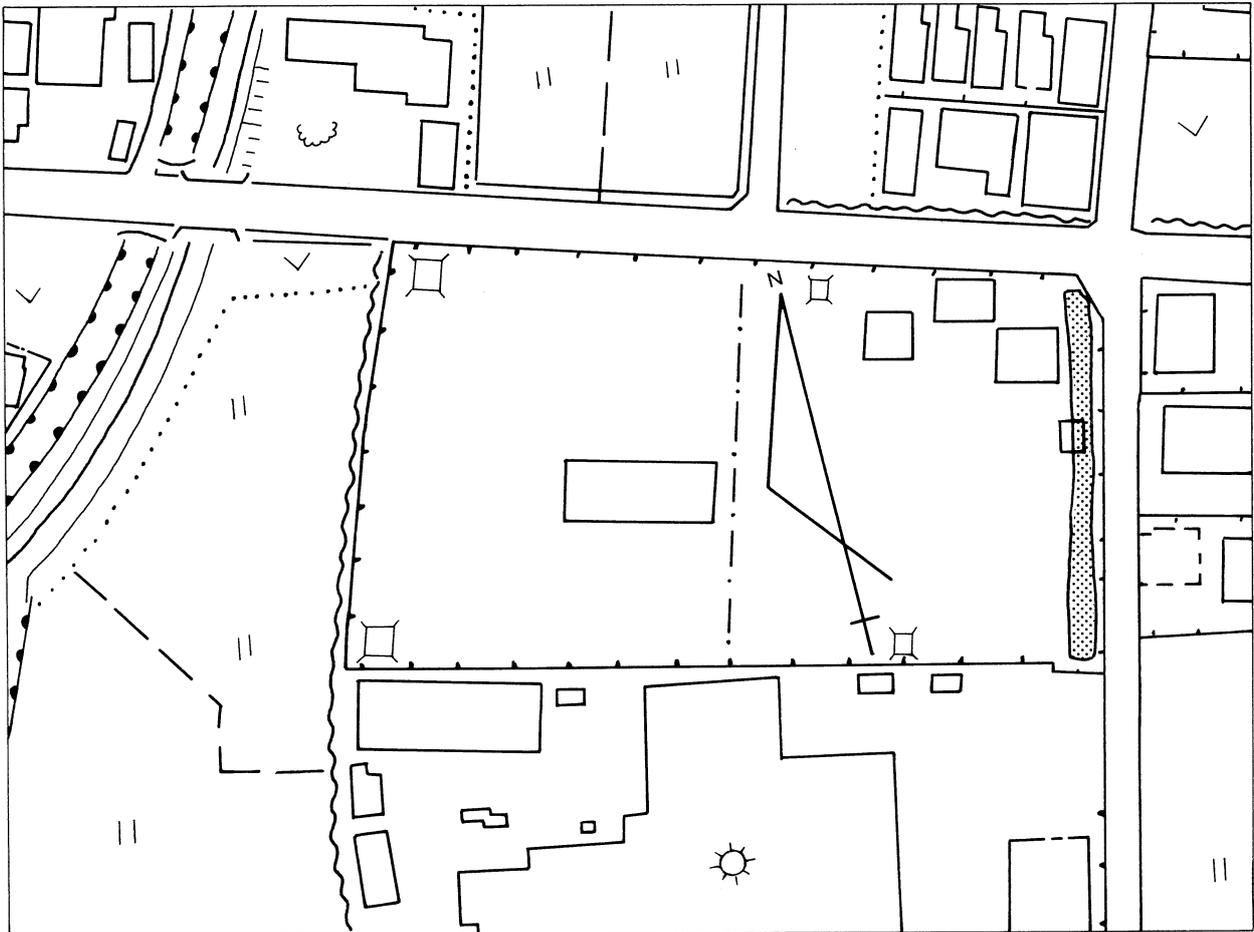
1) 遺跡の概要と土層

既述のとおり、現地は高松平野の中央部南寄りに位置する平坦部にあつて、香川県警察本部機動隊舎建設予定の四国管区警察局用地である（第38図参照）。調査区はその東端部敷地境界沿いにあたる。水路拡張・改良に伴う幅2m余、南北50mの狭長な発掘区は、水田土壌と考えられる層厚約20cmの黒褐色シルト層に載った、切削をうけたとみられる平坦面が第1面であり、この第1面（L=17.40m）から柱穴5、須恵器甕片埋納坑を含む土坑2等が検出された。

出土遺物から9C後半～10C前半の遺構とみられる。

第2面（L=17.20m）では、灰褐色を呈するシルトが層厚20～30cm以深で明黄褐色のやや粗いシルト層へ漸移する。過去の分布調査から、この層が下部で程なく和泉砂岩礫層に達するものと推定される。溝2、土坑1、柱穴8等が確認された。溝の出土遺物は弥生後期に属する。

なお、第2面で検出したSD21は、平成9年9月の香川県文化行政課による試掘調査で既に確認されていた「1トレンチ」の溝状遺構が北東向きに湾曲・流下する延長部分にあたる可能性が高いと考えられた（これについて、平成10年4月から実施された「香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」の調査結果によっても追認された）。なおSD22は、上面精査による検出のみで詳細不明である。



第38図 調査位置図（1/1000）

2) 古代の遺構と遺物

a. 柱穴・掘立柱建物

既述の通り、第1面では柱穴（＝掘立柱建物）5，土坑2等がみられた。所属時期としては9C後半～10C前半と判断される。

このうち柱穴は、SP01から02～05までの5基が北から南へと直列している。各柱穴の心～心距離は1～2が5.3m，2～3が1.3m，3～4が1.3m，4～5が1.2mである。

南北方向の桁行を示す配列であろうとの推定が可能であるものの、遺構検出範囲の以南及び以北については、既往施設（除却済み）による攪乱のため遺構の存否は不明であり、1棟分に限られるのか、複数棟の一部にあたるかの判別には到らなかった。検出した柱穴の間隔からみれば、一見SP01とSP02～05とがそれぞれ独立した2棟という可能性も想定出来なくはないが、根拠となる特段の遺構も検出されていない。

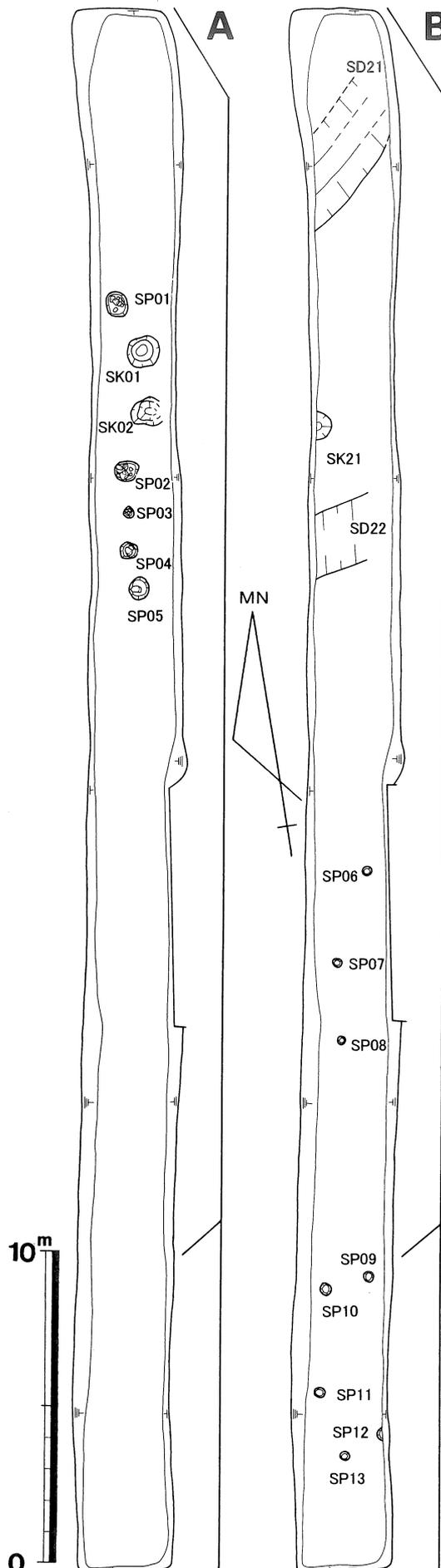
又、調査区の幅が極度に狭く、東西の両側乃至いずれかの側に存在が推定される梁間方向の柱穴についても検出されていない。

従って、調査の範囲内では、南北に主軸を置く1棟以上の平安時代の掘立柱建物が存在したとの指摘ができるのみであった。しかし、後日の西側隣接部分の調査（『注1文献』）により、SP01～04が同書「Ⅲ区SB01」の東面の桁列に、更にSP05が同「Ⅲ区SB02」の主梁の北端若しくは北東隅の柱穴に相当することが確認された。

柱穴の口径は、SB01関係はSP01＝80×65，SP02＝65×75，SP03＝35×30，SP04＝60×60を測る。SB02に属するSP05＝65×65（各cm）である。

平面形はいずれもやや不整な円形であり、径はSP03の30cm余を例外として他はほぼ規模を同じくしている。

全ての柱穴が埋土中に砂岩の垂角礫乃至亜円礫



第39図 遺構配置図

A)古代 B)弥生時代(後期) 0

を含むが、その径の大小や個数の多少には規則性はなく埋没位置についても秩序を持ったものとは考えられない。又、SP03 は別として、穴底部に接する石材はみられず、根石としての埋設ではないと考えられる。根固め用材として柱材と壁面の間に充填されたことを示す出土状況でもない。

従って柱穴は柱材抜去後に、無作為に埋め戻された可能性が高いものと考えられる。

①柱穴

SP01柱穴は、SB01北東隅に当る。埋土の底部で、計 12 個の「大」字を線刻した石材片 1 点が出土して特筆される。

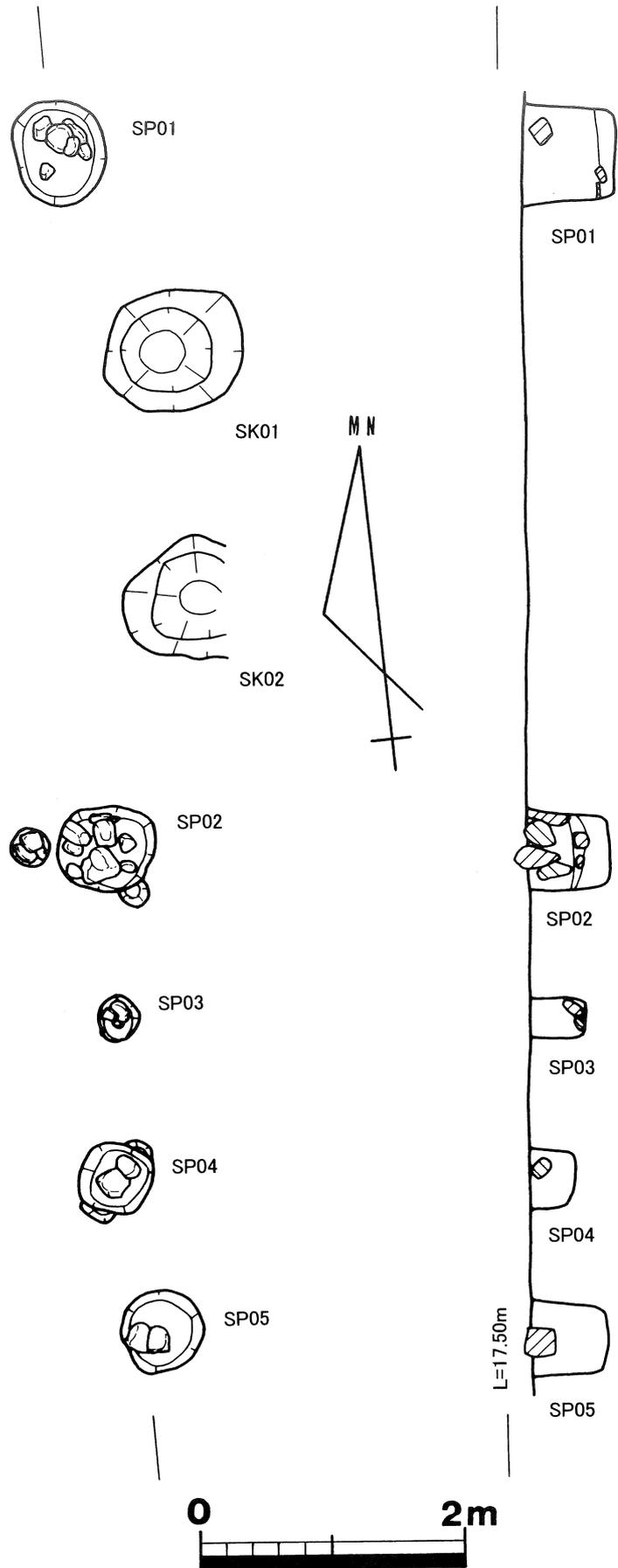
この柱穴埋土中には、本来は根固め石とみられる、径 20 cm 程度の砂岩垂円礫 5 個があつて、上端は検出面に達して底面からは浮いており、礎石としての使用状態とはみえない出土状況を示している。

SP02 は、他よりもやや口径が大であり、埋土中の石材個数が特に多い。埋土は 3 層で埋戻し手順が窺える

SP03 は、著しく小口径であり、他の柱穴とは性格が異なる。通常の桁柱間隔の中間位置に設けた補助的な支柱若しくは仕切りであろうと考えられる。

SP04 は、SB01 の南東隅に当るもので、掘込みが他よりやや浅い。

SP05 は、他と類似の規模、形態を示すものの埋土は黄灰と黒灰色の粘質シルトがブロック状に詰り、SP01～04 とやや趣を異にした埋土の様相である。上記 01～04 と異り、



第 40 図 柱穴列平面・断面図

SB02の掘立柱建物を構成する柱穴である。その建物の北辺の梁間の中央位置に当る柱穴と考えられるものである。

SP01の以北とSP05の以南については、攪乱により遺構は失われている。

②掘立柱建物

SP01～SP05は、今次の調査所見の限りでは建物としての確定的な復原が不可能で、それらの一部の柱穴として確認する範囲に留っていたものである。

本件調査後、平成10年10月～同11年1月に本調査区の西側に接続する部分について、香川県による全面発掘調査が実施され、その成果が『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報・汲仏遺跡』（1999.3）により明らかにされた。

その結果、SP01～SP05が同書に所収の「Ⅲ区SB01」及び「Ⅲ区SB02の」一部に該当する柱穴であることが確定した。

即ち、SP01～SP04は「Ⅲ区SB01」の東辺の桁柱列に当ると考えられ、SP05は「Ⅲ区SB02」の中央桁柱北端（梁間2間とした場合。梁間1間と仮定すれば東辺北東隅）の柱穴に当たっている。

以下、本報告でもSP01～SP04にかかる掘立柱建物をSB01と、SP05にかかる掘立柱建物をSB02とする。

i) SB01

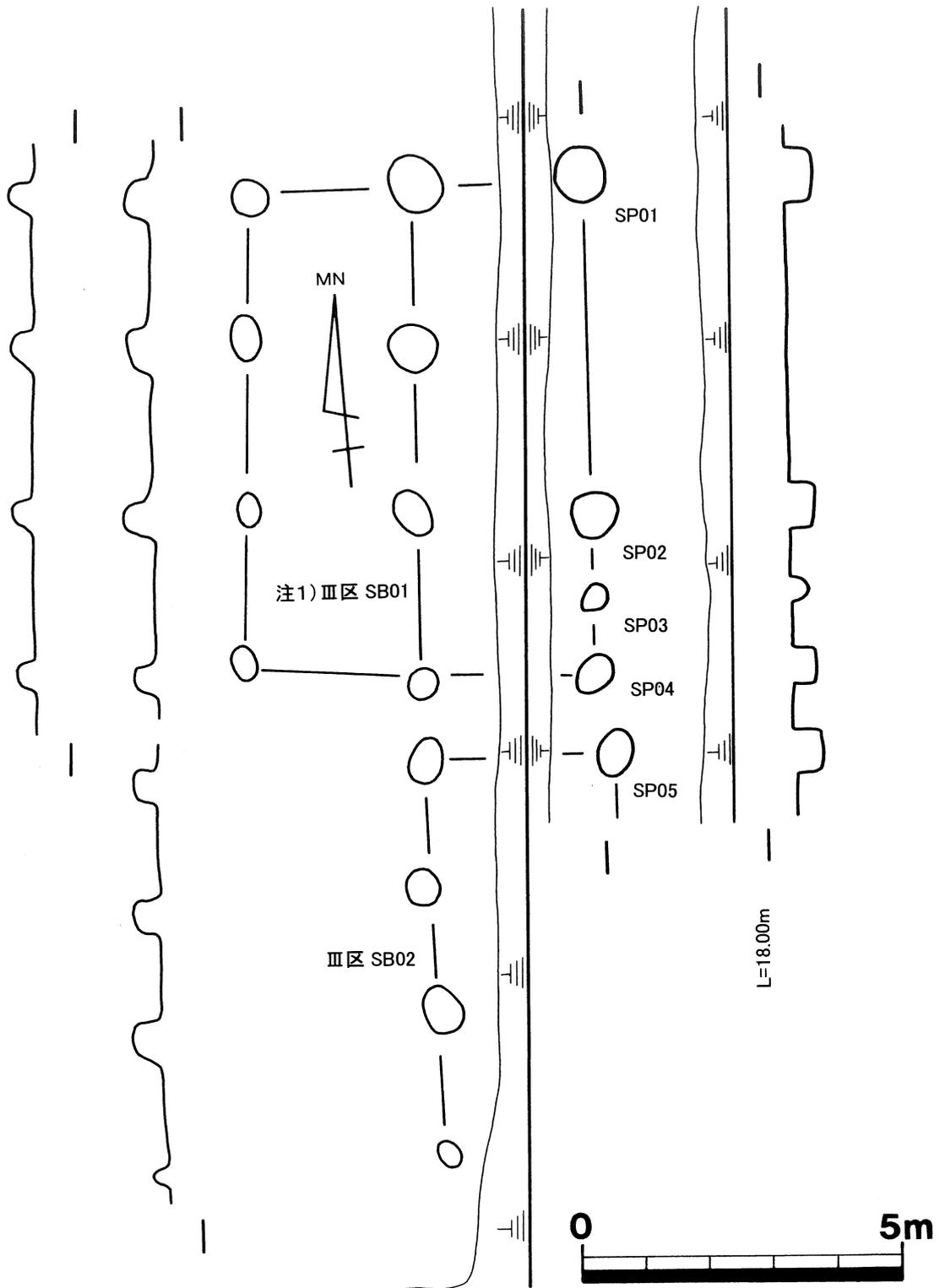
SP01～05は、今次調査の検出状況からは、一見した限りではSP01とSP02～05の2群になるのも思えたのであるが、上記の経緯を通じて、SP01～04はSB01に属するものと判明した。

すぐ南に隣接するSB02とともに、南北方向に2棟が並ぶ掘立柱建物の一つである。

『注1)文献』では「桁行3間、梁間不明～」とされているのであるが、本件調査の検出状況と総合すれば、梁間は2間になると考えられる。この場合の推定床面積は約38.5㎡である。

又、Ⅲ区SB01においては“東側の柱穴列がより大きい口径で根石・詰石を持つものが多い”（『注1)文献』）の比し、西側柱穴列は、口径が下回る点等から「庇になる可能性がある」ことが指摘されている。西側柱穴列が「庇になる…」とするなら、SP01～04の東側に更に桁行1列が並ぶ可能性も無視できないものの、すぐ東に近接して、屋内施設と見るには不自然で、出土土器からも同時期の存在と想定されるSK01及びSK02が存在する。又、後述する様に「大」字線刻石がみられるSP01は、この遺物が示唆する様な地鎮祭祀に関わる位置を占める可能性も高いと考えられる。地鎮祭祀が対象区域の北東隅で行われる例が多い事を考慮すると、SP01は、SB01の「鬼門」に当る北東隅に位置し、且つ東辺桁行北端とするのが合理的ともいえる。（以東は、調査範囲外で確認できない。存在したとしても既往施設による損壊が考えられる）。先述の通り、SP03は補助的なもので本来の桁柱ではないのであろう。SP01と02の中間点にも柱穴が見られるのが通常であるが本例では欠けている。SP01～02間が出入口として使用された事によるものとも考えられるが特段の根拠は見当たらない。柱穴口径からみて、総柱の可能性も考えられよう。又、多量の須恵器片を埋納したSK01やSK02の2土坑がこの区間に近接して所在するのも注目される場所である。

ii) SB02 『注1)文献』のⅢ区SB01中央桁行とⅢ区SB02西辺桁行（梁間？）とは、僅少な方位差があるものの南北方向でほぼ直線上に並ぶ。SP05以南及び以東の遺構は攪乱で滅失して復原不能であるが、文献例とSB01復原案も踏まえてSP05の検出結果を併せるならば、桁行3間であり、1間も絶無といえないが梁間については2間と想定されよう。



第 41 图 掘立柱建物平面·断面图

桁行・梁間が2～2.5mを測るのに対してSB01～SB02の間隔は約1mに過ぎない。又、僅かながら主軸の方位にはずれもみられる。SB01はN3°E, SB02はN1°Eである。屋根の構造等をも勘案すると、SB01とSB02の同時併存はなかったともみられよう。

1～2世代程度の時期差を考えるべきかも知れない。

③出土土器

SP01 土師器, 須恵坏片等数点がみられた。図化できたものは少ない。遺物は, 土器片の量はむしろ少ないが, 「大」字を多数線刻した流紋岩片1点を得た。掘立柱建物北東隅(鬼門)にあたるという出土位置を占めた点からも興味ぶかく, 別項を設けて後述する。

01は, 須恵碗底部である。底径7.6cm。灰白N7/を呈し, 低火度・軟質である。やや摩耗。調整内外面ともナデ。ヘラ切りと思われる弧線が部分的に残る。底面周囲に低平な僅かな隆起があって高台の痕跡とも見られ兼ねないが切り離しの際の無作為の変形によるものであろう。SP02出土の破片がこれに接合し, 底部のみほぼ完形に復している。9～10C移行期であろう。

SP02 他の柱穴に比較して埋土中の礫の個数の多さが目立っている。出土遺物についても, 土師器, 須恵器片等, 小片をも含めて数十点が出土しており, 柱穴としては多量ともいえる。図化できるものは限られるものの, 須恵器壺・坏, 土師器甕・坏・碗, 灰釉, 内面黒色土器等多彩であった。

02は, 須恵器坏である。器高3.8cm, 口径13cm, 底径7cm。灰白を呈し低火度・軟質である。口縁端部に炭素の吸着で黒みがつくのはこの器種によくみられる例である。底面はヘラきりで内外面ともナデ。無高台で底部とほぼ同じ厚みでやや外側に膨らませながら斜め上方に立上り端部は外反する。

03は, 灰釉碗口縁片である。復原口径は12.4cm, 残存高3.6cm, 胎土良好で灰白を呈する。残存部は内外面ともナデ調整。釉は灰黄から暗灰黄に発色, 焼成良好堅緻。9C後半か。

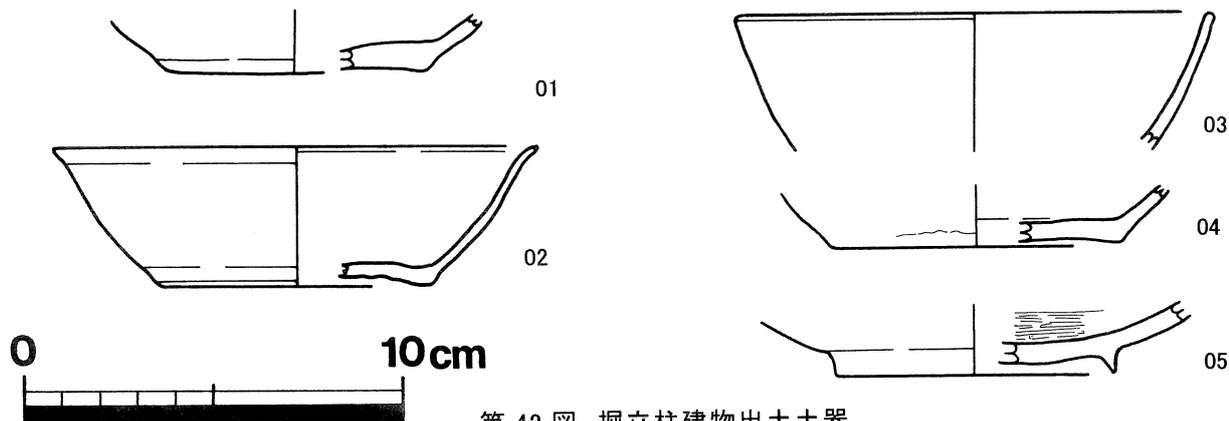
04は, 須恵器碗?底部片である。復原底径7.6cm。灰白を呈し類品中では焼成良好・堅緻。底面はヘラきりで内外面ともナデ, 無高台である。石英, 長石, 角閃石少量含む。

SP03 摩耗の著しい土師器細片数点がみられた。主として坏片であるが調整等は判別困難。

SP04 土師細片が2点みえ, 内黒と思われるが摩耗で判別困難である。

SP05 土師坏・甕細片等10点余がみられた。

05は, 内面黒色碗底部片である。A類。摩耗が著しいが, 現況で断面三角形の高台復原径は7.4cmである。外面調整不明。にぶい黄橙10YR7/2, 内面ヘラ磨きで褐灰10YR4/1を呈する。



第42図 掘立柱建物出土土器

b. 「大」字線刻石

第1面 SP01 柱穴埋土の底部から、A面7個、B面5個、計12個の「大」字を線刻した石材片1点が出土した。流紋岩製で、両面を研磨し側面に擦り切り痕を持って、長さ5.7×幅3.5×厚さ1.5 cmを測る。

SP01は、埋土中に礫7個があるが底面からは浮いている無作為な配置で、礎石又は根固め用とはみられず柱根やその腐蝕痕もみられない。恐らく柱根抜去後に埋戻されたものであろう。

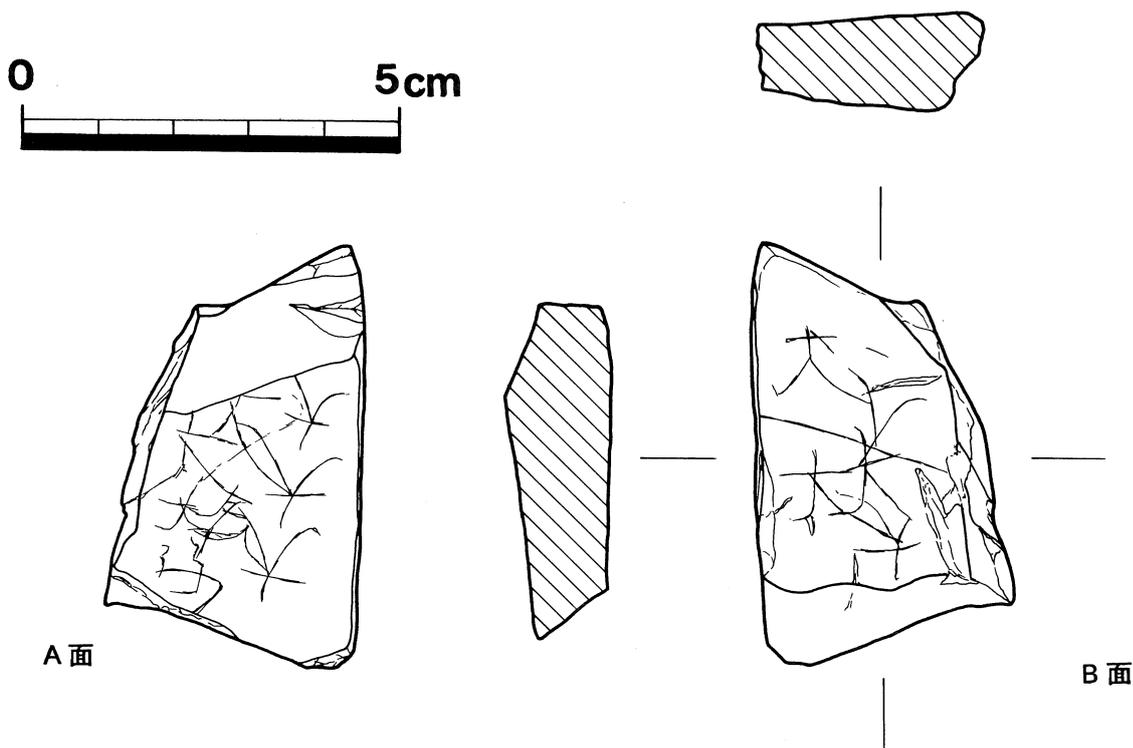
「大」字の線刻石は底部にほぼ接する位置で出土し、埋戻し直前にその最下部に置いた可能性が高いものとみるのが常識的と考えられるが、周囲の埋土に汚れが少ないことからすれば柱穴の掘削直後に置かれた可能性も排除できないであろう。

遺物の形状は不整・不等辺四辺形(第43図)であって、A(研磨が丁寧)面からみた右辺が5.7 cm、左辺4.2 cm、底辺3.5 cm、上辺2.5 cmである。厚さは1.5~0.8 cmを測る。灰白色を(5Y,7/1)呈して左辺付近に劈開面が一部露出する。材質は流紋岩であり、硯乃至砥石としても適した材質と見受けられる。B面は研磨がやや不足し1 cm×1~2 mmの瑕3点が残る。長辺側の側面には、それぞれA、B両面側からの深さ3~4 mmの擦り切り痕跡があり、意図的に切断されたことを示唆している。

確認できる限りでA・B面合計で「大」字12が線刻されている。

極めて鋭な金属具の先端を使って刻字したとみられ、A面には、右辺側で字の天側を下に置いた3字1列、左辺側で字天側を上にした4字が不定な配置で並ぶ。左下部近くに小さく「弓」ともみえる線刻が加わる。

B面には、左辺側沿いに字天側を上にした2字が直列し、中央部で上・下辺を斜めに二分する線刻線を第1画とする「大」字が、字天側を下にした位置で大きく描かれる他に、これと重複して、中央部付近に字の天側を上につき、字の軸を対角線上に置いた1字、その下に字の天側を下に向けた1字が位置する。



第43図 「大」字線刻石実測図

字体は、尖鋭な細線で線刻されてかなり伸びやかな筆致である。字画の寸法は線幅に比して大ぶりである。第2画では「永字八法」に言う「勒」にあたるような横画に始まる運筆を多用して、2画末尾の「掠」と3画末尾の「磔」にあたる運筆は奔放にのびるものが少なくない。

また、B面の例で、第1面に素材の幅をいっぱいを使用したものが含まれる。

A面7字、B面5字、合計12の「大」字及び「弓？」2字が記入されている。なおA面上端に2.5×1.4cmの発掘時の欠失部分があり、そこにも2～3の刻字があったかも知れない。

またA、B面の文字配置は、欠失部分を除き余白と思われる部分が周囲に残っており、現存の形状に加工された上で刻字が行われた事を推測させている。

(「大」字としたが、刻字の性格によっては「大」文とするべきかも知れない)。

* * *

次に「大」字の出土例であるが、現在までの管見の範囲内で後記第8表のものがみられる。

2は、5.0×9.4cmの杉の板目板を用いた木簡であり、わずかに圭頭状を呈する端部近くに切込みを持つ「奈文研 032 型式」の1面に記される。他に「急々如律令」「梵字」「呪符」を墨書した呪符木簡3を伴出している。但し、本例とは時期的に隔っている。

3は、低地帯で奈良時代前半までに埋没した流路からの出土で、周辺の類似した流路からも「十」「郷長？」等数点の墨書土器がみられる。意図的な埋納とはみられないようである。

4は、「大」でなく全て異筆の墨書「本」(地名?)4点等24点。硯転用須恵壺底も伴出。

5は、SE-202 曲物枠内(6段目)埋土出土。ミガキ丁寧な完形品(井戸の祭祀関連か?)。

6は、土師碗2点を合せて和同開珎2と金箔を納めた蓋側の一点。上部に瓦片を密に敷いた2段掘り円形土坑底にあって、東大門と西大門の中間位置で検出。西院院中全体を対象とした伽藍完成時の地鎮め遺構とされる。

7は、天皇供御の野菜を栽培したとされる「奈良御園」遺跡の大溝から出土した則天文字の(天)を示す墨書須恵器坏Bはじめ墨書土器15点の1点。鈕をもつ須恵器坏蓋(平安京I新)外面に「大」字を墨書しており、木津川に関わる祈雨乃至は止祈雨祭祀に伴うものと考えられている。

8は、「大」字ではなく「一条の墨痕が認められる」底部穿孔の土師器に円形曲物、蓮華文軒丸瓦を重ね、路面下で横大路延長方向に長軸をとる楕円形土坑からの出土である。陰陽師の地鎮め行為による埋納であり土公祭系統の行法に則った可能性が指摘されている。横大路整備に伴う遺構で、新益京の街区設定に先行して行われたものである。

位置選定では、飛鳥川と下ッ道の間地点を意識したとしている。

8-1～-13は、同時出土土器・木簡に「大政官」「大口…」等連用例も多い。「大」が土器所有者を示す場合もあり得るようである。意図的な埋納か否かなど出土状況の詳細には触れていないが、土坑1点、井戸下層2点の出土土器等は祭祀に関わる可能性も考えられよう。

8-14は、軸木口の両端に「伊勢国天平八年封戸調庸帳」とあるものの軸部に、「埴」2字・「科」4字等とともに「大」5字が習書されているものである。濠状遺構の出土である。

8-15は、細長い羽子板状板2枚で紙文書を挟み封緘したもの(封緘木簡)であって、裏簡の調整が施された外面に「大」13字を縦書きした墨書があり、習書である。内面は割りのまま未調整で、これと接合する表簡には、本来の「北宮進上」に追筆として天地逆の「戈」9字を習書している。「大」の習書とは同筆とみられている。表裏を一对として機能する封緘木簡がともに習書用として再利用されているものである。

9は、「大」が字句の一部に含まれる例である。I群で、合口・正位のカワラケ6点のうち輪宝墨書の身に「至大通宝」を埋納し、II群も、合口7点のうち輪宝墨書で蓋に「違大根」を墨書するものに「至大通宝」2、「大定通宝」1を埋納する。

10は、直接「大」字を表示するものではないが、記入素材が石材である点で参考例とする。「輪宝・羯磨墨書石」であり、石英安山岩礫の片面に輪宝+孔（ア=胎藏界大日如来を表す）と、他の一面に羯磨+亥（バム=金剛界大日如来を表す）を、加えて羯磨右下に「黄」の文字を墨書している。五穀の一つに当る粃殻が付着した寛永通宝8枚を伴い、墨書・銭貨・五穀による「地鎮め」と解されている。

11は、時期的には後代のものである。不整楕円形土壙から、カワラケ10点と寛永通宝7枚を出土しており、カワラケは全て口縁部を上正位で埋納される。うち2点に中央に孔（ア）のある輪宝を墨書しており「輪宝+孔」は10例に共通する。銭貨のうち4枚は付着物から埋設時に和紙など薄紙で包まれていた可能性があるとする。

12～30は、「東国」の集落遺跡出土で、「古代村落」に共通する墨書土器についての所論に伴う資料である。いずれも1遺跡に多数の墨書土器がみられ、しかも各遺跡ともにその種類が極めて限定されて、変形したものを含め字形まで類似した共通の文字と、さらには則天文字・篆書体などの影響を受けた特殊文字の広範な分布が指摘されている。

「当時の東日本各地の村落において、土器の所有をそうした文字-記号で表示した可能性もあるが、むしろ一定の祭祀や儀礼行為等の際に土器に、なかば記号として意識された文字を記す、いかえれば祭祀形態に付随し、一定の字形なかば記号化した文字が記載されたのではないだろうか。このように字形を中心とした検討結果からは、集落遺跡の墨書土器は古代の、村落内の神仏に対する祭祀・儀礼形態を表わし、必ずしも墨書土器が文字の普及のバロメーターとは直接的になりえない…」事が指摘されている。

「20遺跡で使用されている文字の種類総数は205種でそのうち2遺跡以上で共通する文字は万（15遺跡）大（15遺跡）…の30種」であり、万に並んで、大がかけ離れて多用されているが目立っている。

これらに、石川県小松市浄水寺跡出土の墨書土器（1222点）を加えて、その多くが2～3字の組合せであって、それらの主流となる19字が抽出されており、

- a. 集積（動詞的）…生，富，得，加，来，集，合，立，足。
- b. 良好な状態（名詞）…吉，福，万，大，財，力。
- c. 天地人…天，田，人。

に集中している。

さらに、近年特殊文字の存在が目立つようになり、そのうち篆書体の「大」にあたる𠂔及び𠂔に係わり、𠂔と記されるものを基本形とした則天文字に言及して、これらが

「中国における道教の呪符に基づくという事実で…道教の呪符にみえる符籙の強い影響を受けて考案されたのが則天文字の〈𠂔〉の字形である…その他にも〈大〉の篆書体〈𠂔〉との関連を考えられそうな字形もある」（*＝フロック。道教で、未来のことを予言した文書）

「したがって、我が国における古代の墨書土器にみえる〈𠂔〉およびそれに類する字形は、おそらく、則天文字や道教の呪符の影響と考えておくことが現状では最も妥当であろう。いかえれば、則天文字や呪符の符籙が人々に強烈な印象を与え、我が国において〈𠂔〉や〈𠂔〉のなかに別の漢字を入れ一種の吉祥または呪術的な意味を含めた特殊な字形として使用してい

「太」と同義でもあって、「太歳」として用いられる場合には、構築物等と方位（東乃至東北＝艮／鬼門）の禁忌に関わる字として使用されるものとなっている。又「天地」にも通ずる。

更に、仏教では万有を構成する四要素として、地・水・火・風が「四大」とされている。

さて、「大」字を記す諸資料のうち石材を使用するのは本例のみである。保存性が高く、記入の難度も大きい石材という媒体に線刻するという点にその特徴がみられる（石を記入素材とするものに、10の「輪宝・羯磨墨書石」があるが「大」字そのものではない）。

他方、木簡であれば、8-14,15 例の様に同一文字を多数並べる「習書」例が知られており、「大」字の出現頻度は中でもかなり高い方に属するものの様に見受けられる。しかし、本例を「習書」用とみるのは、木簡よりも調達困難と考えられる石材を使う点や柱穴底面という出土位置等からみても避けるべきであろう。そして、他の木簡・土器への墨書等の例では、通例は習書とみられる以外には一字のみが記入されるのに対し、本例で「大」12字以上が併記されるという点での特異性に注目すべきかとも思われる。

引用諸例は、大多数が墨書土器への記入例で、その「大」字は土器の帰属を表示するほか、何らかの儀礼・祭祀に使用されたものもあると推定されている。とりわけ寺院、建物、道路、井戸等の遺物には、引例のような「大」字の使用が認められ、おおまかには道教呪符等の儀礼・祭祀との関わりが指摘されてもいる。

一方、本遺跡での「大」字線刻石の出土遺構は、通常の住居とみるには柱穴規模も大きく、総柱構造である可能性もあると考えられ、出土地点も、条里地割の方格径溝網を踏襲したものとみられる現用道路の交差点近くに位置している。これは、敷地乃至は建物にとっては東北隅（＝艮）であり「鬼門」にも当たっている。

本例線刻石は、「大」字を使用した遺物であるという点では引用諸例と共通の性格・目的を持つ場合も検討すべきである。同時に、素材や字数、さらには埋戻しが行われたと考えられる柱穴からの出土という条件等から、意図的埋納行為による可能性も高いと考えるべきであり、「大」字を使用するという共通性ととも、高い独自性にも注目すべきであろう。

該柱穴にかかる建造物の着工又は破却に際し、先述にみるような太歳（＝大歳）を表象するであろう「大」字、ないしは輪宝等の表示に伴う銭貨に鑄出された銭文中にみられる「大」字を抽出して、石に線刻して埋納するという地鎮めの儀礼が行われたのであろうか。

仮に、「人」を形象したとする場合、建物に関する禁忌を避け安寧を図る「犠牲（人柱）」に擬したものであるという推定は、直截に過ぎようかと思われる。

早くにわが国に伝わり、天文暦数や吉凶占い等から次第に俗信化して行った陰陽道は、本件遺構が存在した9～10Cには、平安貴族の無気力も反映して次第に呪術的側面を強め、儀式・生活様式等を強く拘束していたとされる。現時点の推論としては「大」字が陰陽道に関連するものだとすれば、西から東へと12年で天を一周する木星の神霊・神格化として、陰陽五行説で最重要視した太歳（＝大歳）を表象した可能性が考えられよう。仏教・密教由来であるならば「大日如来」乃至「四大」を象徴するとも考えられる。

本例は道教・陰陽道、密教等に由来して、建物の建設又は廃棄に際しての地鎮に関わる儀礼に伴い、一種の呪符として埋納されたという可能性を考慮しておきたい。

しかし、出土資料中の「大」字そのものに即しては、現在までの管見でなおそれが意味するものの具体的性格を直接記述した資料は未確認である。「大」字の示すものが何であり、それにいかなる効果が期待されているかについて、なお類例の収集が必要である。

第8表 「大」字等出土例

〈典拠資料＝注4〉

出土遺跡	時期	出土遺構	出土位置	素材	記入位置	記入法	字数他
1 香川・本例	10C前後	柱穴	底部	石材	両面	線刻	12
2 香川・東山崎水田	17～18C	SD-21		木簡 032	片面	墨書	1
3 香川・下川津	7C後半	低地流路		須恵坏蓋	外面	墨書	1+十
* 香川・多肥松林*	平安中～後	自然河川	SR03	須恵坏黒色	底部外面	墨書・硯	本・原等 24
4 奈良・平等坊岩室	11～12C	SE-202	曲物内埋土	瓦器椀	高台内面	線刻	1
5 奈良・法隆寺西院	8C	SK3600	土坑底部	土師椀		墨書	1
6 京都・上奈良	9C平安京 I 新	大溝		須恵坏蓋	外面	墨書	1土馬
7 奈良新益京横大路*	7C末	地鎮土坑	下部	土師鍋		墨書	条線
8 -1 平城京・二条二坊	8C平城宮 III 古	SD5100	UO14 炭層	土師坏/皿	底部外面	墨書	1
8 -2 " "	" "	" "	UO42 炭層	須恵坏A	底部外面	墨書	1
8 -3 " "	" "	" "	UO26 木屑層	須恵坏	口部外面	墨書	1
8 -4 " "	" "	" "	UO34 木屑層	須恵坏 A/B	口部外面	墨書	1
8 -5 " 三条二坊	8C平城宮 IV	SD4591	坪境側溝	須恵小壺	底部外面	へら描	1
8 -6 " "	8C平城宮 IV V	SD4701	坊間側溝	須恵坏 A I ₁	口部外面	墨書	1
8 -7 " "	8C平城 II～IV	SD4701	坊間側溝	須恵皿 A III	底部外面	墨書	1
8 -8 " "	8C	SD4361B	坪境側溝	須恵坏 or 皿	底部外面	墨書	1
8 -9 " "	8C	二坪 SU72	土坑	須恵坏 B V	体部外面	墨書	大+〇
8 -10 " "	8C	一坪	包含層	須恵坏 B II	底部外面	墨書	1
8 -11 " "	8C	七坪	包含層	須恵坏 or 皿	底部外面	墨書	1
8 -12 " "	8C平城宮 III	七坪	SE4365 下層	土師坏 A II	底部外面	墨書	1
8 -13 " "	8C平城宮 V	八坪	SE5220 下層	土師皿 A II	底部外面	墨書	1
8 -14 " 二条二坊	8C平城宮 III 古	SD5100	3層	調庸帳軸	061 軸部	墨書	5 習書
8 -15 " 長屋王家	8C	SD4750?	3層?	封緘木簡裏簡	043 外調整面	墨書	13 習書
9 福島・西方下館 *	16C城館	埋設遺構 I II	合口カワラク内	銭貨	(大定・至大)文	墨書	計4枚
10 岩手・大釜館 *	17C城館	小穴	小穴壁面	円礫両面	(輪宝・羯磨)	墨書梵字	ア・ハム
11 宮城・多賀城高崎 *	18C屋敷	埋設土壇	底部正位	カワラク輪宝	内面	墨書梵字	ア
12 岩手・北上下谷地 B	古代	集落遺跡	大溝	椀・皿・坏		墨書	墨書複数出土
13 山形・酒田 生石 2	"	"	"	"		墨書	"
14 福島・会津郡松上吉田	"	"	大溝	"		墨書	" + 大集
15 群馬・赤堀 川上	"	"	"	"		墨書	"
16 " 小島小角田前	"	"	"	"		墨書	"
17 " 沼田戸神諏訪	"	"	"	"		墨書	"
18 " 境町下淵名	"	"	"	"		墨書	" 篆書六
19 神奈川・厚木 鳶尾	"	"	"	"		墨書	"
20 千葉・八千代井戸向	"	"	"	"		墨書	" + 大田
21 " " 権現後	"	"	"	"		墨書	"
22 " " 北海道	"	"	"	"		墨書	" + 大井大田
23 " 東金 久我台	"	"	"	"		墨書	"
24 " " 作畑	"	"	"	"		墨書	+ 大門
25 " 佐倉 大崎台	"	"	"	"		墨書	"
26 " " 江原台	"	"	"	"		墨書	" + 大小
27 " " 臼井南	"	"	"	"		墨書	" (矣)
28 埼玉・将監塚古井戸	"	"	"	"		墨書	" + 大家大西
29 秋田・大曲藤木怒	"	"	"	"		墨書	" + 篆書
30 東京・板橋四葉地区	"	"	"	"		墨書	" 篆書六
31 千葉・八千代村上込の内	" 9C後半	" 竪穴住 155	D地区 V期	土師坏	外面	墨・刻書	墨 2刻 1/1
32 福島・東村谷地前C	"	集落遺跡				墨書	1
33 福島・東村赤根久保	"	"				墨書	1

(遺跡名に*を付したものは大字以外の参考例)

この線刻石出土のSB01/SP01に近接して検出した、後述の土坑 SK01も同時に注目しなければならない。意図的に四辺形の須恵器大型甕片が埋納されており、これについても陰陽道等儀礼・祭祀に関わるものとして、本「大」字線刻石と併せて考察すべき遺構と考えられる。

c. 土坑

①須恵器大型甕片埋納土坑

須恵器大型甕片を埋納した土坑SK01は、径1 m、深さ36 cmを測る。甕片は土圧等で非人為的に破損し埋没した状態とは見えず、破片相互の位置関係や器壁内外面の重なり方からも、何らかの目的の下に、意図的に破碎した破片を集め一括して埋置したと推定される状況であった。その出土（埋納）状況は、土坑中央の中位に内面（＝凹面）を上向きに置かれた45 cm×35 cmの長方形の甕破片を、あたかも収納容器としたかのように受け皿状に置き、同一個体である甕胴部の破片数十片（接合・復原すると約1/4個体分となる。長方形破片に直接接合はしないが同一個体である）をまとめて「盛り付け」たものであった。

SK01への甕片の埋納は、大きい四辺形破片及びこれと同一個体であるその胴部約1/4の破片とが現地に搬入され、土坑中位に前者を敷き同時にその近接の場所で後者を破碎してその破片をまとめ、伴出の土師器坏等とともに「盛り付け」る状態で行われたものと推測される（胴部の約1/4個体分を、他の場所で小片に破碎した後に搬入したとすれば途中で破片の一部が散逸する可能性が大きいと考えられる。本例は破片の過不足もなく器形の1/4大にまでほぼ完全に接合・復原され散逸がみられない）。未検出の口頸部、底部、胴部等少なくない量の残余破片の所在が問題であるが、調査地の西側に隣接する未調査部分は今回確認済の柱穴群を構成部分とする建物遺構が続くことが確実とみられる。同一個体の遺物破片の残余はその遺構乃至その周辺で検出されるのが通常であり、本例でも甕破片残余が隣接未調査部分に遺存する可能性を想定すべきであり、存否の判明が期待される。

尤も、上記須恵器甕は特に大形の器種であり個体数も稀少とみられ、その取扱も儀礼・祭祀に関わる等特殊なものがあつたとも考えられる。本例の場合を含め、特別な用途に充てられていた土器等が、埋納などを目的として、原形もしくは分割（乃至破碎）された状態で、異った場所に移送されるとの可能性も否定できないであろう。本例の甕破片残余が隣接地又は周辺部に存在しない事が確認されれば、ある程度の遠隔地からの搬入が考えられる事となり別の角度からの意義づけが必要となる。これらの点からも、残余の接合資料の存否確認が期待される。

次に、須恵器片埋納土坑の位置設定に関しその選択をめぐって何等かの意図が認められるか否かについてである。本遺跡の立地は、既述のとおり高松平野の中央部やや南寄りの平地部に条里地割を踏襲した方格の径溝網が顕著に残る地域で、海拔約18 mを測る推定旧香川郡条里2条15里11坪に当る。埋納土坑SK01は、坪内の北東隅寄りにあり、東西および南北方向道路の交叉点に近接し、坪東側の路側から西へ2 m、坪北側の路側からは南へ12 mの地点に位置する。この交叉点は、条・里界の交わるものではないが、現況では東西、南北方向ともに地域の主要交通路の交点として機能している。

坪内において、大形甕片埋納土坑の他施設との位置関係は、SP01～SP04の柱穴列で桁行東辺壁面が構成されるとみられる掘立柱建物（後日、西側隣接地で香川県埋蔵文化財調査センターが実施した調査で検出されたⅢ区SB01に該当）北東隅柱穴から約1 m南寄りであり、建物東側壁面にほぼ接する状態にある。他方SP02は、前述した「大」字線刻石出土のSP01と規模・形態がほぼ同一であり、相互間の接合資料を含む出土遺物も時期的に一致する。加えて、SP02ではSK01の大形甕片と接合する破片が出土しており、これら接合資料からも、SP01、SP02の埋土とSK01埋納遺物とは同一時期に属することが明らかである。

があり、位置は溝肩から北へ2.7m離れて掘られている。i)軒丸瓦、ii)円形曲物、iii)土師器鍋が重なって出土し、i)は瓦当のみで、ii)は底板を欠き、iii)は底部を穿孔する。何れも欠損部分を持つが、埋納にあたり本来の機能を逸する意図によるものとされる。土師器鍋が最下段に正位におかれ、曲物を重ねて瓦当を蓋とする。内容物は不明であるが、底部に埋納前に敷いた植物の葉とみられる痕跡が付着している。年代は白鳳末頃である。(『5』、7文献』)

*平城京右京八条一坊十三坪では、坪西辺中央に東西径16cm×南北径20cm×深さ6cmの土坑に、i)土師小皿4点を埋納し、その内外に和銅開珎51点と、ii)金箔、iii)ガラス小玉、iv)鉄片を出土した。ii)、iii)は七宝(金・銀・真珠・珊瑚・琥珀・水晶・瑠璃)の金・瑠璃に充てた地鎮「鎮め物」とみなされた。8世紀前半である。(『5文献』)

*法隆寺西院では、東大門と西大門の間中点に、円形の径120cm×深さ90cmと径90cm×深さ50cmの上下二段の土坑内に、i)土師器碗2点を合せ、ii)和銅開珎2点と、iii)金箔を収めて坑底に水平に置く。蓋とした土師器碗に「大」の墨書がある。埋戻した土坑上面に瓦片を密に敷く。埋納物は、五宝乃至七宝に充てられたもので『陀羅尼集経』に基づく院中全域を対象にした伽藍完成(天平19/747以前)時の地鎮め供養であろうとされる。(『5文献』)

*平城京右京八条一坊十四坪では、東西34cm×南北21cm×深さ18cmで隅丸方形の土坑内に、i)蓋をした須恵器坏を置き、ii)墨梃、iii)和銅開珎5点を納めた。中世史料胞衣処置例に一致し胞衣埋納遺構とされている。なお、ii)、iii)を収めていない土器埋納遺構でも土器内土壌の脂肪酸分析により、ヒト胎盤の脂肪酸によく類似したとの例が知られている。胞衣埋納遺構は建物の出入口付近や北西乃至南東方向でその柱通りに揃った位置で検出される例が多いとされる。(『5文献』)。(引用諸例には、時期的には必ずしも本遺跡例と一致しないものを含む)。

* * *

ところで、地鎮の祭儀には「地壇」「結界」「土公供」「鎮宅・安鎮」等があると言われ、これらのうち陰陽道の土公祭の影響を受けて平安末期に大成した東密の「土公供」では、以下の行為が行われているという。

「新しい小鍋(瓮一釜あるいは鍋)に五穀を調合した粥を入れ、行法は北向きで行い、祭壇の前に広さ二尺五寸～三尺で深さ二尺五寸ばかりの穴を掘り、修法の後、穴に水・香・花・粥・酒などを注いで、最後に供物・幣串・紙で作った銀銭などを埋めて、その上を土で固める。余った粥も供物とともに鍋などに入れたまま埋められた」(『5文献』)ようである。

土公祭・「土公供」ほか上記諸例からみて、SK01とそれへの須恵甕片等埋納は道教・陰陽道等に由来する一連の地鎮儀礼として執行された可能性を無視できないものと考える。

②その他の土坑

SK01南2m(心～心間)でSK02が検出されている。SK01とほぼ同巧、同規模(径90cm、深さ35cm)である。土坑壁面の中位に、SK01の断面図にもみられる様な、再掘削により形成された稜線が巡る2段掘りの形状を呈する。埋土の土色に下層と上層で若干の差がみえ、やや時期差をもって掘削された事を示す点も共通する。SK01では大形甕片を別として完形土師器坏1点の出土に止まるが、SK02では完形に復原される土師坏2点ほか須恵器片等数十片が出土し、その遺物相と点数にやや差異がみられる。

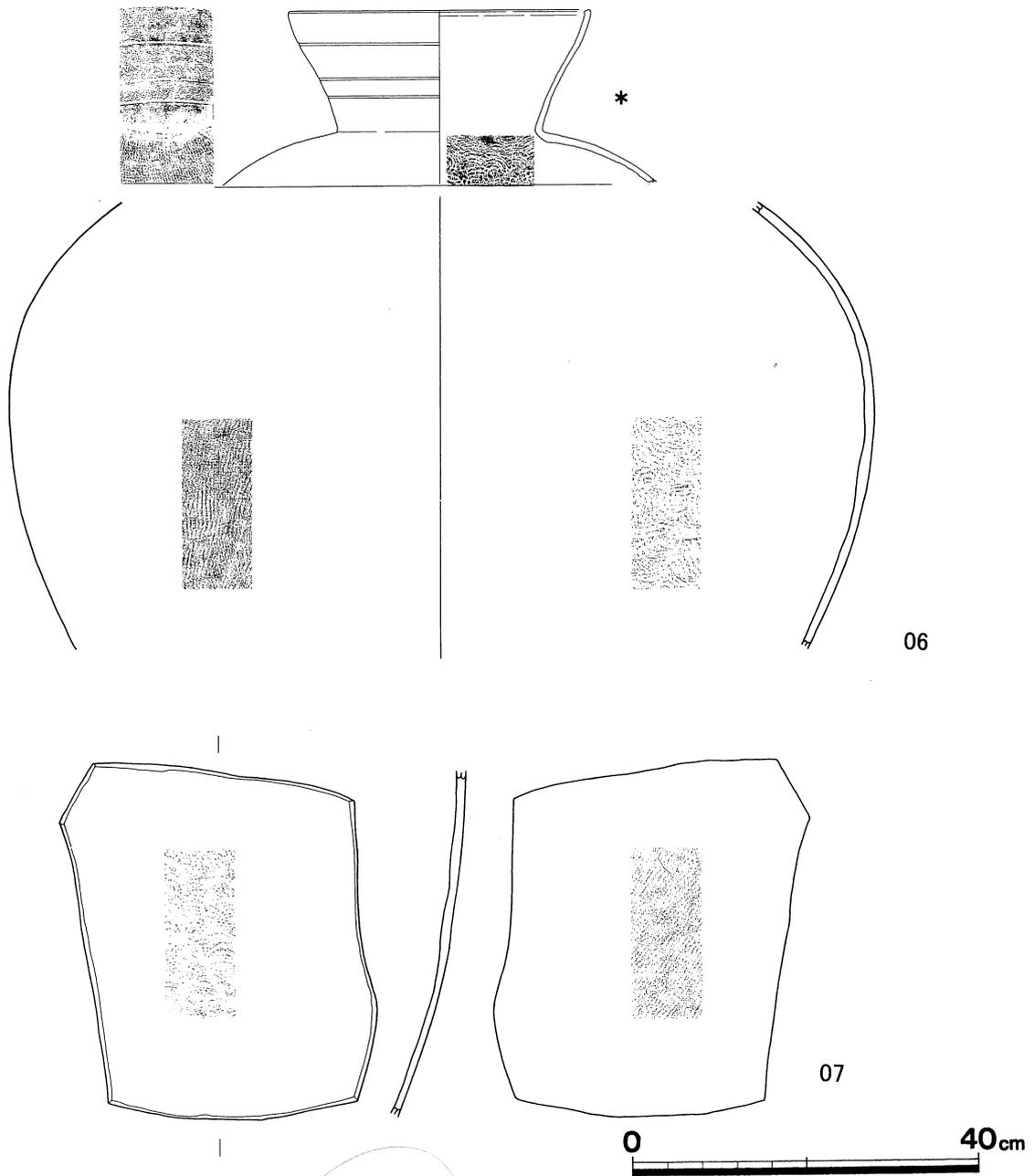
SK01、SK02は、立地や形状を共通にして、遺物相の差を考慮しても完形に復原できる坏等を複数点を含む等が類似する。ともに上記諸例に類似の地鎮儀礼の関連遺構の可能性があろう。2層を成す埋土は、建設時と破却時の2次に亘った祭祀行為を示唆するものかも知れない。

③出土土器

i) SK-01 出土須恵器大型甕について

SK01 06 は、須恵器甕である。胴部復原径 100 cm の極めて大形の個体に強い特色を示して、焼成良好、堅緻である。器表はヨコナデに平行タタキ、内面は同心円文タタキがともに全面に施される。器高は、松縄下所遺跡の類例などから推定すれば 130 cm 前後となるとみらる

07 は、06 と同一個体胴部の一部を意図的に四辺形に「加工」したものと考えられる。なお、接合した三角形破片は SP02 からの出土であり、SK01 への 07 の埋納は SP02 の埋戻しと同時であるものと想定される。この種大形甕は、高松市実施の調査では、* の松縄下所遺跡出土の口縁～肩部にかけての 1 点が唯一の類似例である。陶窯跡西村一号窯跡からの出土須恵器にも本例に近い容量を持つとみられる平安後期の大型甕が含まれている。



第 45 図 土坑等出土土器 1)

『延喜式』（主計）に、「調」の「陶器」として「池由加」と記される器種で容量が「5石（900ℓ）」とされるものがある。「池由加」は池ユカで広い溜め池状に液体を入れる大形のカメを指すという。調納入量は、正丁一人の積算基準で「小甕」の24口（容量3升=5.4ℓ）に比し「池由加」では三丁につき各一口（諸国輪調。畿内では八丁で一口）であり、生産個数が極めて限られた器種だと知れる。06は胴部のみで口頸部・底部を欠き正確な復原・時期比定は困難だが伴出遺物、文献（『注2』）等から以下の点が考えられ、容量では上記「池由加」に匹敵するものであろう。

『延喜式』「卷二十四主計上〈諸国調〉讃岐国…」にみる貢納窯業製品は「調…、陶甕十二口、水甕十二口、甕八口、壺十二合、大瓶六合、有、柄大瓶十二口、有、柄中瓶八十五口、有、柄小瓶卅口、鉢六十口、塀卅合、麻笥盤五十口、大盤十二口、大高盤十二口、椀下盤卅口、椀三百卅口、齋坏一百口、大管坏三百廿口、小管坏二千口、…」等である。「池由加」の記載は見えず、これに相当する様な器種の有無等に関する記述も見えないようである。

『延喜式』の須恵器貢納国は、和泉、摂津、近江、美濃、播磨、讃岐、筑前7国とされる点からみれば、大形甕06が陶窯跡群中いずれかの所産である可能性が考えられよう。胎土分析等による産地の同定などが残された課題となる。

本資料は口縁・底部を欠き年代確定の特徴に乏しいが、消耗が激しく大量生産・大量消費の日用品として使用されたものとも考えられず、用途が限られ生産量は少なく使用開始から破碎までには或いは儀礼・祭祀行為を含み、場合によってやや長期的な「使用／伝世」が行われた場合を想定すべきかも知れない。伴出遺物からは下限は10C末頃までと考えられよう。

いずれにしても非日常的な行為に関する遺構・遺物であることは疑いないと思われる。先の「大」字線刻石の存在に加え、旧山田・香河郡境から1町余の坪境直近という立地等をも併せ考えると行政的又は宗教的施設乃至はそれらの関連遺構が存在する可能性があろう。

但し、今回調査では出土遺物に瓦が含まれていない点からみて、寺院の可能性は低いというべきかも知れない。

ii) その他の土器

SK01 08は、土師器坏である。06破片が集積された一定範囲内の上部空隙でやや拡散しつつ検出され完形に復原した。橙・2.5YR6/8を呈し径約1mmの長石を含む。口径4.5cm、底径7cm、器高4cm。底部ヘラ切り、器壁は緩やかな傾斜で立上り僅かに内弯しながら収めている。

SK02 09は、土師器坏である。10と共にほぼ完形に復原されている。淡橙・5YR8/4を呈し、口径12.3cm、底径6cm、器高3.5cmである。やや摩耗があり底部ヘラ切り、内外面ともナデ。08に比してひとまわり小型であり、調整もやや粗放に見える。

10は、土師器坏である。ほぼ完形。灰白・7.5YR8/2を呈する。外面は摩耗により橙色の地色が露出する部分も目立つ。口径12.5cm、底径6.3cm、器高3.8cmである。底部ヘラ切り、内外面ともナデ。やや小型の作りは09同様である。器壁の立上りは08の勾配に近い。

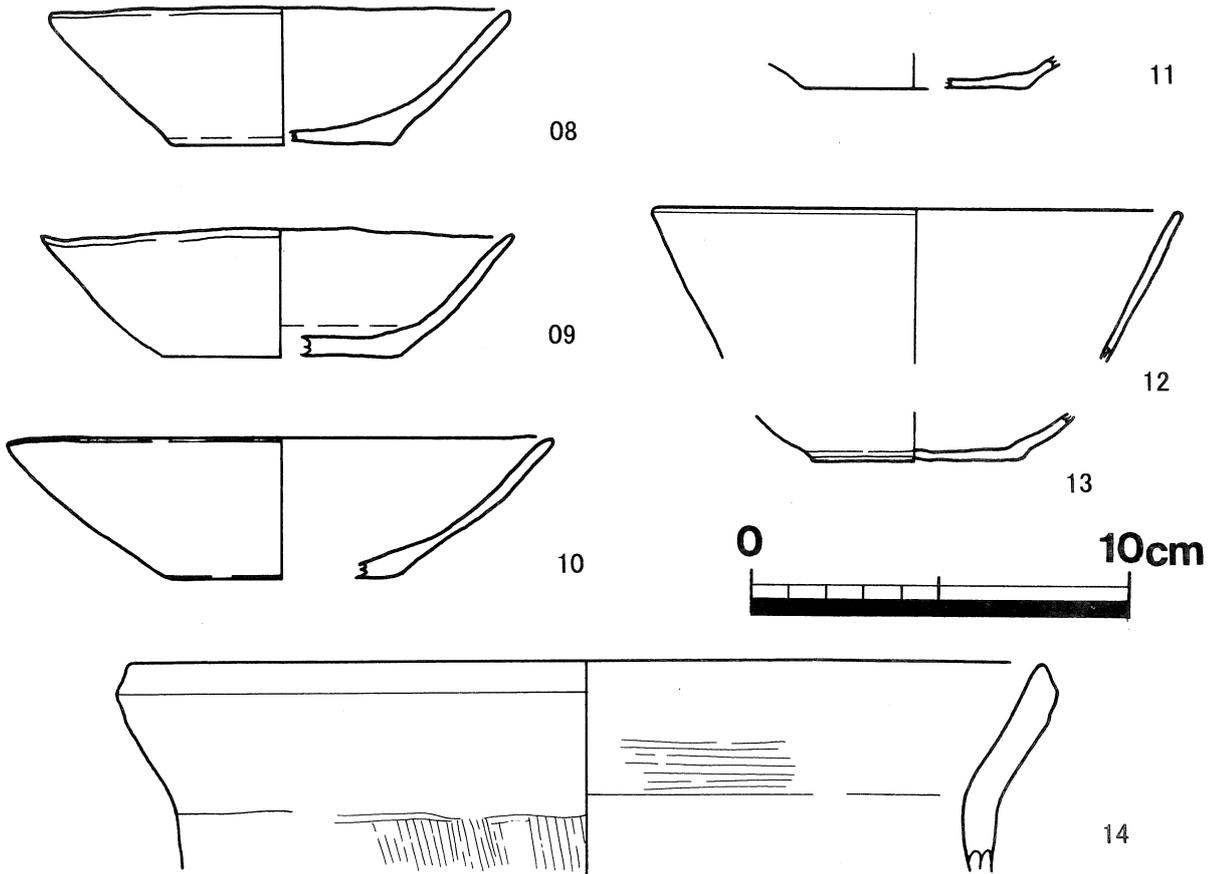
11は、須恵器坏底部片である。灰白10Y8/1を呈し、復原底径5.8cm。底部ヘラ切り。胎土は精良で、やや低火度だが焼成は堅緻。厚さは底部2.5mm、器壁2mmで薄手である。

12は、須恵器坏口縁片である。灰白2.5Y8/1を呈し復原口径13.8cm。内外面ともナデ。胎土は調整によって胎内に押込まれた径3mm前後の砂粒（器表に露出せず器面に凹凸を生じる）が目立つ。焼成は堅緻。口縁端と外縁部は炭素吸着でやや燻んでいる

13は、土師質椀？底部片である。復原底径5.6cm。摩耗があり、内外面ともナデ、底部ヘラ

切り。薄手に造られ、焼成良、胎土も精選されている。

14 は、土師器甕口縁片である。復原口径 29.2 cm。体部は口縁下部あたりでほぼ垂直に立上り口縁は体部から「く」字状に屈曲する。胎土は径 1 mm 程度の砂粒を相当量含む。体部外面は幅約 2 mm のタテ刷毛目を施す。内面は口縁部を含めヨコハケを施し、その上にヨコナデ。口縁の外面はヨコナデ。器表面には薄目に煤の付着がみられる。



第 46 図 土坑等出土土器 2)

3) 弥生時代の遺構と遺物

第 2 面 (L=17.20m) では、弥生後期の溝 2，土坑 1，柱穴 8 が確認された。層厚が 20～30 cm で灰褐色シルトからやや粗い明黄褐色シルトに漸移する層で形成されており，過去の分布調査からこの層は下部で程なく和泉砂岩礫層に達するとみられる。

なお，第 2 面で検出した SD-21 は，1997 年 9 月に県文化行政課による試掘で確認された 1 A トレンチの溝状遺構が北東寄りに湾曲・流下する延長部分にあたる可能性があると考えられたが，後日(財)香川県埋蔵文化財調査センターによる平成 10 年 10 月 1 日～平成 11 年 1 月 31 日実施の発掘調査により出土した「III 区 SD 下 01」の下流部分に当る（『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－平成 10 年度－汲仏遺跡』所収）ことが確定された。

出土遺物は弥生後期前半頃のものと考えられる。

a. 溝

SD-21 は、調査区北端の第二面で検出した南西から北東方向に走る溝である。幅 2 m 以上、深さ 40 cm を測るが、北半部は戦前期の工場施設基礎と思われる煉瓦の構造物とその掘方により攪乱されている。弥生後期の廃棄土器を多量に出土した。平成 9 年 9 月県文化行政課による試掘の際確認された 1 A トレンチの溝状遺構が北東寄りに湾曲・流下する延長部分である可能性が高かったが、本件調査後の平成 10 年 10 月から行われた香川県埋蔵文化財調査センターによる発掘結果によって、その III 区 SD 下 01 の下流部に接続するものであることが確定された。

また SD-22 は上面精査による検出のみで未掘である。層位からみて時期は SD-21 と同時併存したものと考えられる。規模 (= 幅) が SD-21 に比べやや狭小であり機能・性格は異なるものとみられる。詳細は不明である。

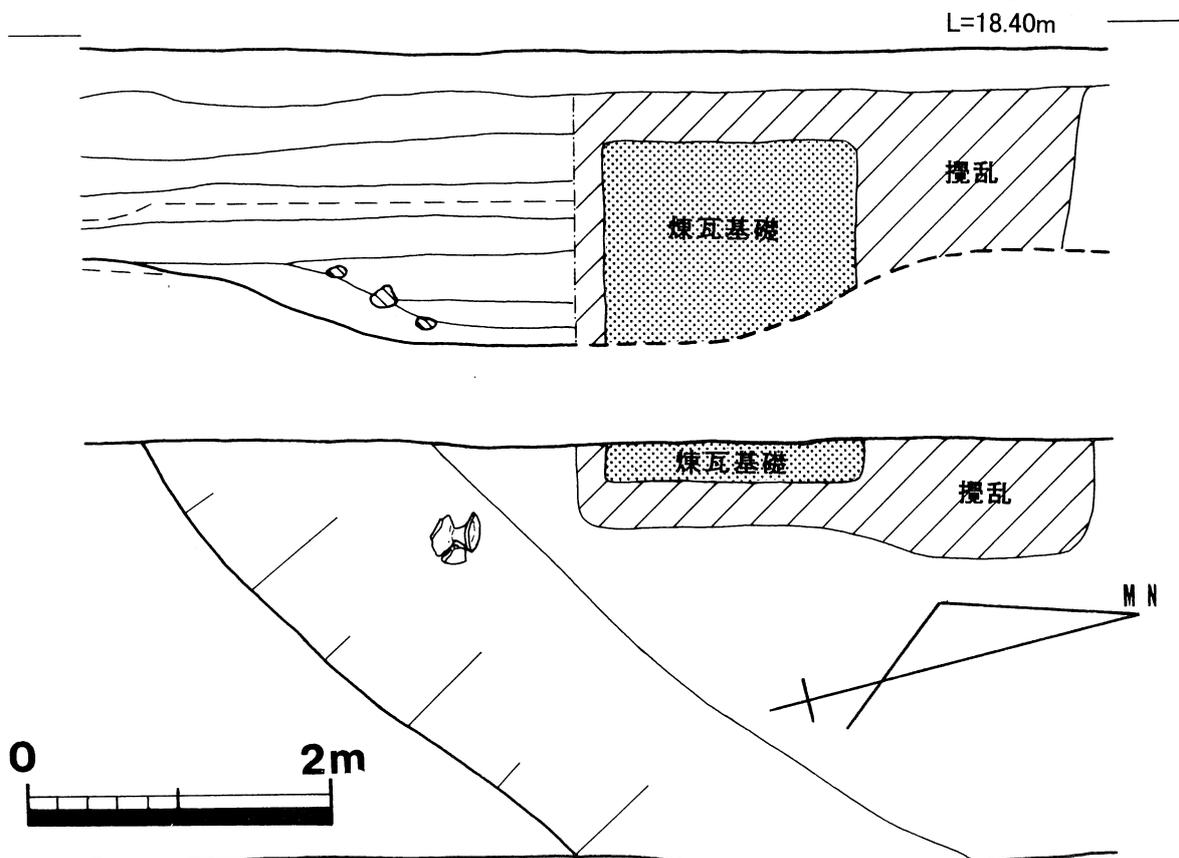
b. 柱穴及び土坑

柱穴は、2 グループのまとまりがみられる (第 39 図 B) ので、円形の竪穴住居社の 2 棟分の柱痕との見方もできようが、床面や柱穴以外の遺構の存在が考えられる層位は攪乱により確認不能であった。柱穴埋土には遺物は検出できなかった。

SK21 は、西半部が調査区外で未掘であるが既調査部分から推定すると、平面形ではほぼ正円であろう。径 85 cm、深さ 35 cm のスリバチ状土坑である。遺物は摩耗土器細片 2、3 であり時期が判断できないが、埋土の色調等や掘込み面の層位から SD21 と同時期と考える。機能は不明である。

c. 出土土器

第 2 面からの出土遺物は、SD21 出土土器であり別記観察表に収録するものの他、弥生後期の甕破片を主体としてコンテナ約 2 ケース分である。木製品の出土はみられなかった。



第 47 図 SD21 実測図

15は、高坏である。完形に復原された。
口径28.5cm, 脚部径17.2cm, 器高18.2cmである。坏部は内外面とも分割ヘラ磨き, 脚部は外面ヘラ磨きで裾周りはナデ, 内面はヘラ削り。円盤充填。脚部の付根から2.5cm下に, 径6mmの飾孔2カ所(一对)を対向する位置に穿っている。

16は、高坏である。完形に復原され, 口径28.7cm, 脚部径17.8cm, 器高18.2cmである。坏部は内外面ともに分割ヘラ磨き, 脚部外面ヘラ磨きで裾周りナデ, 内面ヘラ削りである。円盤充填。脚接地部から2.5cm上の位置に, 径5mmの飾孔2カ所(一对)を対向して穿つ。

17は高坏坏部である。坏部のみ完形に復原される。口径28.0cm, 坏部残存高は6.4cm。内外面とも分割ヘラ磨きで円盤充填である。

18は、鉢である。器形はあまり類例を見ないもので, 32.4cmを測る口径に対し底径は6cmでその差が目立つ。通常この様な口径/底径比であれば, 甚だ安定感を欠くものと思われるが, 円盤を貼り付けた様な底部から水平に近い傾斜で腰部を広げ, やや下ぶくれの胴部を形成して急峻に立上がり, 狭い口縁部ではほぼ水平に外反した曲線的な器形が微妙なバランスをみせる。32.4cmという口径に比して器壁は全体的に薄手に作られている。器高は12.9cmである。

19は、片口鉢である。摩耗, 黒斑がみられる。口縁は体部からの変換点で内外両面に凹線を形成しつつ直立し2.8cm幅で横帯状に一周する。痕跡程度の片口部を持つ口縁端はほぼ水平面をなす。口径49cm, 底径12.5cm, 器高19.8cmである。

20は、甕底部片である。底径7.3cm。外面ヘラ磨き, 内面ヘラ削り。底面の黒斑が目立つ。

21は、甕底部片である。底径5.8cm。外面摩耗, 内面指押え。黒斑と胎土の砂粒が目立つ。

22は、甕底部片である。底径5.8cm。底・体部外面ヘラ磨きで黒斑が目立つ。内面はナデ。底部中央に径0.8cmの焼成後穿孔がある。甑か？

23は、壺底部片である。底径8.6cm。摩耗。外面ヘラ磨きか？内面色調は焼成時還元を示す。

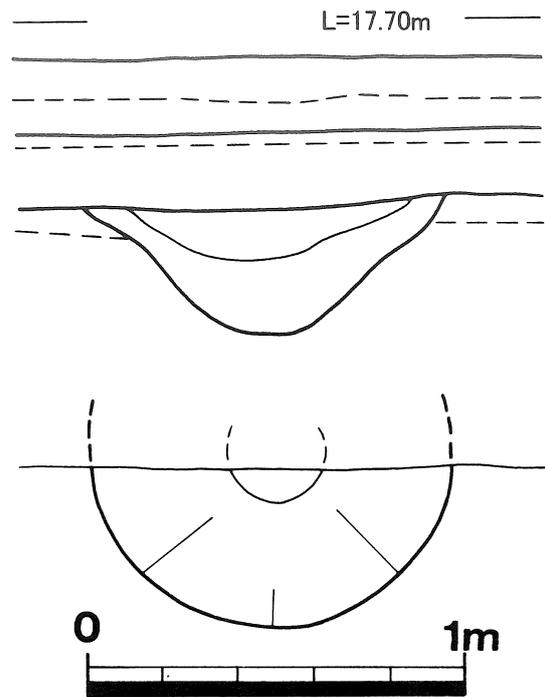
24は、壺底部片である。底径5.4cm。外面ハケ後ヘラ磨き, 内面ヘラ削り。器壁は薄手だが焼成が堅緻で, 堅牢な造りをみせている。

25は、甕口縁片である。口径15cm。口縁内外面, 頸部内面ヨコナデ, 体部は外面ハケ目で, 内面は指頭圧痕をみる。

26は、甕口縁片である。口径12cm。口縁内外面ヨコナデ。体部は外面はタタキ後にハケ目で内面は上部は指押え, 肩部以下は削る。

27は、壺頸~肩部片である。復原胴部径は21.8cm。内面はナデ, 頸部は外面ハケのほか摩耗著しく調整不明である。

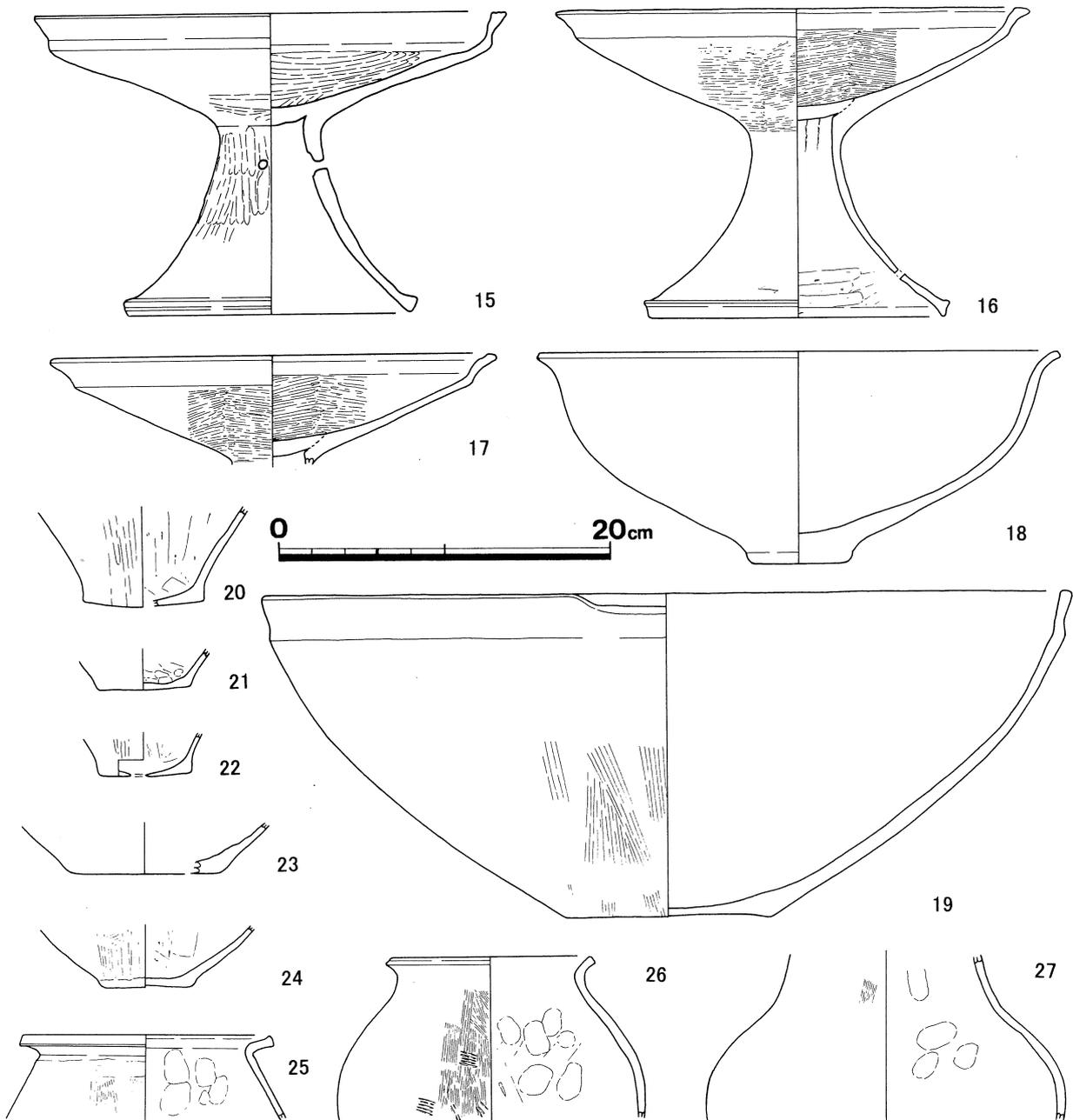
以上の土器群は, 溝埋土出土で厳密な一括性を欠くが所謂「下川津B類土器」が高松平野を中心に盛行して行く時期のものである。「比較的精選された胎土中に微細な黒色(角閃石)粒



第48図 SK21 実測図

を多量に含」むが「粗い砂粒は含」まず「概ね茶系統のややくすんだ色調」で、形態調整上は「甕の薄造りの底部形態と体下半部外面のヘラ磨き、高坏の円盤充填と脚内面ヘラ削りおよび横方向分割ヘラ磨き等」で「ハケ調整・ナデ調整共に入念に加え、焼成も堅緻で『精製』された土器」(『注4』3))に該当するとみられるものが多数を占めている。

第9表中のNo15~42に挙げたうち胎土欄に「角閃石」の記載があるものは、上記に引用した「下川津B類土器」の特徴を備えており、図化可能なものを中心として器形・調整などの特徴が比較的捉えやすい資料28点を取りあげた中の22点(79%)がそれである。「79%」は全資料を精査すれば下がる可能性があるが、同時期の県内遺跡出土例からみて顕著に高い出現頻度を示す点は動かせないと考えられる。「B類土器」成立直近に9割以上の角閃石含有土器をみた上天神遺跡も、本遺跡北西約1.5kmにあり、いわば至近距離に所在したという環境である。



第49図 SD21出土土器

第9表 汲仏遺跡出土土器観察表

No	遺構	器種	法量 (cm)			形態・手法等の特徴	色調	胎土
			口径	底径	器高			
01	SP01	須恵器 椀底部片		7	残 1.6	ヘラ切、内外ナデ低火度軟質だが焼成良、SP02 出土片と接合	表裏とも灰白 N1/	石英、長石 少量
02	SP02	// 坏	12.7	7	3.7	ヘラ切、内外ナデ。周縁端部炭素吸着。焼成良。	表裏とも灰白 5Y17/1	長石 φ1 mm
03	//	灰釉 椀口縁片	12.4		残 3.6	内外面施釉、ナデ。焼成良堅緻。	胎土灰白 10Y17/1、釉 2.5Y1/2	密、精良
04	//	須恵器 椀底部片		7		ヘラ切、内外ナデ。内外面とも火線あり。焼成良好、堅緻。	表裏とも灰白 N1/	石英、長石 少量
05	SP05	内面黒色 椀底部片		7.4	残 1.9	摩耗、A類。内面ヘラ磨き、焼成良。断面V形高台。	表に赤黄橙 10Y17/1 内面灰 10Y14/1	石英、長石 φ1 mm
06	SK01	須恵器 大甕	100 調		残 52.5	内同心円タタキにナデ、外平行・格子タタキに粗いハケ。焼成良好堅緻。	表灰 N1/ 裏灰白 N1/	密、精良
07	//	// 大甕体部			残 40	06と同個体の胴下部、ナデ強めの同じ調整。四辺形盤状に割りとり。	//	//
08	//	土師器 坏	14.3	7	3.8	やや摩耗。ヘラ切、内外ナデ。焼成良。	表橙 2.5Y16/1 裏に赤黄橙 10Y17/3	長石 φ1 mm
09	SK02	// 坏	12.4	6	3.4	摩耗。ヘラ切、内外ナデ。焼成良。	表浅黄橙 1.5Y18/3 裏赤橙 5Y18/4	石英、長石 φ 2 mm
10	//	// 坏	12.0	6.3	3.6	摩耗。ヘラ切、内外ナデ。焼成良。	表に赤橙 1.5Y16/3 裏灰白 1.5Y16/2	石英、長石 φ2-3mm
11	SK02-4	須恵器 坏底部片		5.8	残 0.8	回転ヘラ切内外ナデ、低火度だが焼成良。底部厚 2.5 mm、器壁厚 2.0 mm	表裏とも灰白 10Y18/1	精良
12	// -5	// 坏口縁片	13.8		残 4.1	口縁炭素吸着、砂粒、内外ナデ	表裏とも灰白 2.5Y18/1	密、石英長石 φ3 mm
14	// -2	土師質椀底部片		5.6	残 1.2	外面底回転ヘラ切、体部ナデ。内面体・底部ナデ。やや摩耗。焼成良。	表灰白 2.5Y18/1 裏灰白 10Y18/2	微砂粒含む。
13	// -1	土師器 甕口縁片	29.2		残 5.6	く形口縁内面ハケナデ・外面ナデ、煤、体部内ナデ・外タテハケ焼成良	表灰黄橙 10Y14/2 裏に赤黄橙 10Y17/3	石英、長石、角閃石 φ1 mm
15	SD21	弥生土器 高坏	28.5	17.2	18.2	坏内外分割ヘラ磨き。口縁ナデ・凹線、脚内削り・裾部ナデ、円盤充填	表に赤黄橙 10Y18/3 裏に赤黄 2.5Y16/3	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
16	//	// 高坏	28.7	17.8	18.2	// // // // // 円盤充填	表に赤橙 1.5Y18/3 裏に赤黄 2.5Y16/3	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
17	//	// 高坏坏部	28.0		残 6.4	内面分割ヘラ磨き・外面削り後ヘラ磨き、口縁内外ヨコナデ、円盤充填	表に赤黄 1.5Y16/4 裏に赤黄 2.5Y16/3	石英、長石、角閃石 φ 2 mm
18	//	// 鉢	32.4	6	12.9	摩耗、調整不明、円盤貼付状平底。焼成良。外面に顕著な黒斑	表灰白 2.5Y18/3 裏灰白 2.5Y18/1	石英、長石、角閃石 φ 2 mm
19	//	// 片口鉢	49	12.5	19.8	摩耗。外面ハケ目、黒斑。口縁ヨコナデ・凹線、内面調整不明。	内赤黄橙 5Y17/3 外浅黄橙 10Y18/3	石英、長石 φ 1 mm
20	//	// 壺底部片		7.3	残 6.0	底・体部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。焼成良好・堅緻、底面周辺黒斑。	内外面とも灰黄 1.5Y18/2	長石、角閃石 φ 1 mm
21	//	// 壺底部片		5.8	残 2.4	摩耗。内面指押え、外面調整不明・黒斑顕著。砂粒が目立つ。	表に赤黄 1.5Y16/3 内赤黄 1.5Y18/4	石英、長石、φ 2 mm+角閃石
22	//	// 壺底部片		5.8	残 2.6	底体部外面ヘラ磨き・黒斑、良好・堅緻な焼成後穿孔、内面ナデ。甕?	表に赤黄橙 10Y17/3 裏に赤黄 1.5Y18/3	微砂・長石、角閃石
23	//	// 壺底部片		8.6	残 3.2	摩耗で調整不明確だが外面ヘラ磨き? 焼成良、内面還元色。	表灰白 2.5Y18/1 内面灰 10Y18/1	長石、角閃石 φ 1 mm
24	//	// 壺底部片		5.4	残 3.74	外面ハケ後ヘラ磨き、内面ヘラ削り。焼成良好堅緻。	表明黄 1.5Y17/3 内灰白 2.5Y18/2	石英、長石 φ 1 mm
25	//	// 甕口縁片	15		残 5.2	口縁内外・頸内面ヨコナデ、体部外面ハケメ・内面指頭圧痕跡。焼成良	表に赤黄 1.5Y16/3 裏に赤黄橙 10Y17/3	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
26	//	// 甕口縁片	12		残 9.8	口縁内外ヨコナデ。体部内面指押え・肩下削り、外叩き+ハケ。焼成良好	表に赤黄橙 10Y17/3 内赤黄橙 10Y17/3	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
27	//	// 壺頸肩片	21.8		残 10.1	摩耗。内面ナデ・還元色。外面頸部ハケメ・体部不明。焼成良	表に赤黄 1.5Y18/4 内面灰 10Y16/1	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
28	//	// 高坏口縁片	27		残 6	摩耗。口縁内面ナデ、上端は水平・平坦面。焼成良。	内外面とも橙 5Y18/6	石英、長石、角閃石 φ 2 mm
29	//	// 高坏口縁片	27		残 5	内面外周・口縁内外面ナデ、坏部外面分割ヘラ磨き、口縁外面凹線。	内赤黄橙 10Y17/3 外明黄 10Y17/3	石英、長石、角閃石
30	//	// 高坏脚片		18.5	残 7	摩耗。内面削り、外面裾部ナデ。下端より 3 cm 位置に径 5 mm の飾孔。	表に赤黄 1.5Y18/4 内赤黄 1.5Y18/4	石英、長石、角閃石
31	//	// 高坏脚片		16	残 8.8	内面削り、外面ヘラ磨き・裾部ナデ。下端より 2.5 cm 位置に径 5 mm の飾孔。	表に赤黄 1.5Y18/3 内赤黄 1.5Y18/4	石英、長石、角閃石
32	//	// 高坏脚片		16.5	残 5	内面削り、外面裾部ナデ・黒斑、端面凹線。同上飾孔。29と同個体か。	表に赤黄 1.5Y18/4 内赤黄 1.5Y18/3	石英、長石、角閃石
33	//	// 高坏脚片		18.5	残 6	内面削り、外面裾部ナデ・端面凹線。	表に赤黄 1.5Y18/4 内明黄 5Y15/4	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
34	//	// 壺底部片		10	残 4.7	摩耗はげしく調整不明。	表赤橙 5Y18/4 内赤黄橙 10Y17/3	石英、長石 φ 2-3 mm
35	//	// 壺底部片		5.4	残 4.5	外面ヘラ磨き、内面ナデ。焼成良好堅緻。調整後砂粒目立つ。	表灰白 10Y18/2 内灰白 1.5Y18/2	石英、長石 φ 2-3 mm
36	//	// 甕口縁片	17.3		残 3.5	内外面ナデ、口縁端面凹線、端面を上 2 mm・下 1 mm 掴みだす。煤付着。	内外面とも赤黄 1.5Y18/3	石英、長石、角閃石
37	//	// 甕口縁片	15.5		残 3.5	口縁部ナデ・屈曲部鋭い稜、内面削り。端面上部のみ 1.5 mm 掴みだす。	内外面とも赤黄 1.5Y18/3	石英、長石、角閃石
38	//	// 甕口縁片	15.5		残 5.5	摩耗。口縁部ナデ。外面ハケ、内面指押えナデ。端面上部 1.5 mm 掴み。	明赤黄 5Y15/6	石英、長石、角閃石 φ 1 mm
39	//	// 甕口縁片	13.5		残 3.5	口縁内外ナデ・端面凹線、上端 2 mm 掴み。外面ハケ、内面指押えナデ。	内外面とも赤黄 1.5Y18/4	石英、長石、角閃石
40	//	// 甕口縁片	13.5		残 5.5	摩耗はげしく調整不明、胎土の砂粒が目立つ。	元来の焼成面は消失	石英、長石 φ 2 mm
41	//	// 甕口縁片	15		残 4	摩耗。口縁周辺ナデ。口縁幅が 1 cm 未満に狭まる。	表に赤黄 1.5Y18/4 内赤黄 1.5Y17/3	石英、長石、角閃石
42	//	// 甕口縁片	17		残 3.7	口縁内外ナデ、外面ハケ。前出類品より器壁厚い。焼成良。	表に赤黄 1.5Y18/4 内赤黄橙 10Y17/3	石英、長石
43	SP04	弥生土器壺底部片		6	残 5.5	摩耗はげしく調整不明、胎土の砂粒が目立つ。流れこみ資料。	表灰白 1.5Y18/2 内灰白 10Y17/1	石英、長石 φ 2-3 mm
44	SD21	刃器片	刃長 7	厚さ 2		サヌカイト。一辺加工、一辺自然面、他の2辺は折損か?		
45	SK01	土師器 坏底部片		6	残 1.4	摩耗。調整詳細不明、底部ヘラ切り、焼成良好堅緻。	外浅黄橙 10Y18/3 内浅黄 2.5Y18/3	密
46	SK02-3	// 坏口縁片	15		残 3.4	摩耗、調整不明。薄手で器壁厚さ 3 mm 以内。焼成良。	肩面面黄 5Y18/4 内外面赤黄 5Y18/4	精良
47	// 下層	須恵器 坏底部片		6	残 1.9	ヘラ切り、内外面ナデ。低火度だが焼成良。	内外面とも灰白 1.5Y18/1	精良
48	包含層	// 壺底部片		10	残 2	無高台、内外ナデ、焼成良好堅緻。(10C?)	外灰 5Y1/1 内灰白 N1/	長石 φ 1 mm 少量含む
49	//	// 鉢底部片		11	残 6.5	平底、こね鉢? 内外面ともナデか。焼成低火度軟質。	外灰白 1.5Y18/1 内灰白 1.5Y18/2	石英 φ 1 mm 少量含む
50	//	// 坏蓋口縁片	11		残 2.5	内外面ナデ。焼成良好堅緻。流入資料か。(7C?)	内外面とも灰白 N1/	微砂あるが精良

第3節 おわりに

汲仏遺跡は、高松市街中心部からは南寄りに位置した平坦地にあり香東川により形成された扇状地の中ほどにあたる。海拔高は18m余で、条里地割を踏襲した径溝網が顕著に残る地域である。当該地は、昭和62年2月2日決定で現在も進行中の太田第2土地区画整理事業施行区域内にあり、大規模な再開発・市街化による変貌が著しい。これら開発行為に起因する歴史景観の急速な喪失がみられると同時に、これらに伴う事前の埋蔵文化財発掘調査も急増した結果、従来極めて手がかりの乏しかった周辺遺跡の状況も、かなりの程度まで明らかにされつつある一帯ともなっている。

条里地割は高松平野の景観を特徴づける大きな要素の一つとして挙げる事ができるが、本遺跡北方約600mに新設された国道バイパス高松東道路も平野の中ほどをこの地割に沿いつつ東西方向に併走する位置で供用された。この平野での道路建設は現存する条里地割の埒外では事実上不可能である事を物語ったのである。いかなる構築物も任意の設計図一枚で実現可能と錯覚しかねない昨今の状況であるが、条里制施工以後現在までの高松平野の歴史と景観は、この地割と無関係には形成され得なかったであろう事が容易に想像できる。

高松平野は、主として、中央部を北流する香東川の営力により、標高90m余の讃岐山脈北麓を扇頂として、扇端が標高10～5m辺りに達する扇状地帯と、その北縁に形成された三角洲帯からなる。「数値地図情報」によるコンピュータマッピングにより「扇状地帯が卓越する顕著な東西方向リニアメント（線状構造）を示す」というその地形の特徴が明らかにされている。

ところで旧山田郡条里は、平野東端の白山麓と西端の六ツ目山を結び、幅約10mの余剰帯を持つ推定南海道を先行敷設し、この官道を基準線としてこれに直交し11度東偏して施工したとみられている。上記のリニアメントと土地利用・条里地割や文化財分布等との関わり・役割が注目されるが、推定南海道は、平野部を、障害物がなくて平面的・垂直的に最短距離である2点間で結び、ルート南側では河岸段丘・丘陵・山地を避け、北側では平坦ではあるが河川・水が障害となる低地を避け得る経路として、ほぼ等高線に平行し起伏の少ない西北西～東南東ルートを選んだようだとされる。更に、条里・水田の（方格）区画についても、標高が北東側へと低くなって行く扇状地の地形から、正方位をとるより推定南海道に平行した畦畔・経溝網を設けるのがより適切とされた、とみられている（『注3』）。

調査地点は高松市街中心部と南郊を結ぶ主な現用道路の一つに接し、推定旧香川郡条里2条15里11坪とみられる区画の北東隅に位置する。平野東縁の旧三木郡境から西へ、現海岸線から南へ、いずれも約6km。旧阿野郡境へは西へ約7km、旧山田・香川郡境は東へ750mを測る。平野南端の扇頂部からみると扇端方向へ約9km進んだ地点である。周辺一帯は、稀に塚が点在するのみの平坦な地貌で、9度東偏した旧香川郡条里の方格地割が明瞭な地域である。

調査地と、その東南東約1kmにあつて地形分類で大規模人工改変地とされる林地区の旧陸軍飛行場跡間は、方格地割に斜交して2点を直結する直線道路が地形図に表示され、やや違和感を与えている。太平洋戦争時、調査地の工場で作成・整備した飛行機を人力で運搬する専用路として作った道路で、工場が平坦地ゆえに選地された事情が示唆されている。

調査は、方格地割の坪東端で、現用道路沿いに南北に長い幅約2mの帯状範囲で実施した。検出した掘立柱建物遺構の方位は、香川郡条里の方格地割と軌を一にするものである事が確認された。現行地割にも古代の方格地割が基本的に踏襲されているのはいうまでもない。

遺構は『注1)文献』結果を援用すると、条里方格地割坪内の北寄り約1/3の範囲を占める既調査部分で、掘立柱建物3群5棟からなる集落が復原される。なお、竪穴住居址が存在した形跡はみられない。これらの建物は同時併存の可能性もあろうが、或いは9～10世紀にかけて若干前後しつつ1～2世代の時期差で存続したともみられる。

このうち今回調査のSP01～SP04を東側桁行に持つ「Ⅲ区 SB01」は、総柱建物の可能性が考えられる。因みに坂出市下川津遺跡では、竪穴住居は8C代にはなくなって住居棟3～4に倉1程度のグループが形成される。東方6kmに位置する前田東・中村遺跡では、10C後半代に同一位置での3棟を1群とした掘立柱建物の建て替え・変遷がみられる。

今回の狭長な調査区での発掘結果により確認した情報はごく断片的であるが、得られた知見の中には貴重な資料も含まれる。稀少な文字資料として、「大」字線刻石が特筆できるであろう。

管見では、石材を媒体とした文字資料の例(9の例を除く)を確認する事ができなかった。所見としては、墨書土器、木簡類の例による推論にとどまった。同時に香川県ないし高松市域の例はごく僅かを挙げるにとどまって、参照資料の殆どが畿内・東国のものとなった。道教・陰陽道などに由来する地鎮儀礼に伴う遺物・遺構の可能性を指摘しながらも、直截・確定的な結論を得るには到っていない。今後によくを期するほかない。

『注1)』文献は、隣接地の調査結果について9C後半の京都産緑釉陶器皿、10C前半近江産緑釉陶器碗の出土を報じており、今回調査でもSP02に灰釉碗片が見られた。これらから、畿内地域との交流がある事が知られる。他方では「大」字線刻石の存在にも示される様に文字使用が見られる遺跡であるところから、識字層の存在は殆ど疑いないであろう。

本遺跡南南東1kmには、本遺跡とほぼ同時期の墨書土器24点出土の「多肥松林」遺跡SR03が所在し「平安中～後期頃には本遺跡周辺に識字層の存在が示唆され」(『注4)※』)ている。同遺跡は多肥上町に、本汲遺跡は多肥下町に所在する。1956(昭和31)年9月の高松市合併以前は香川郡多肥村として同一行政区に属した。調査地点は推定『南海道』から北へ約2kmを隔てた位置にある。『南海道』へは、多肥松林遺跡がより近い立地であるが、『和名類聚抄』では共に同一行政区である香河(介加波)郡・多配(多倍)郷に属していたのである。

この時期の県域における文字資料はまださほど多くない様であるが、墨書土器は第1表例のほか高松市「前田東・中村」、丸亀市「郡家原」遺跡等でもみられ、硯等も同時に出土する。緑釉陶器等を伴う点も共通しており、斎串なども伴って祭祀・儀礼等との関わりも窺われる。下川津では「広範囲の…生産物を収納した公的施設」、前田東・中村でも「木製模造品…墨書土器などが出土しており、付近に公的施設」があったと想定されている。多肥松林遺跡出土の「本」の墨書4点は全てが異筆であり、少くとも4人以上の「識字層」が1「地方」遺跡構内に存在した事実が示された。平安期讃岐の識字層の厚さと文字使用の普及が、推測を越える域にあった事を示唆するものかも知れない。『続群書類従』「藤原保則伝」は、…讃岐国は倫紙と能書者と多し。…と述べ、9C前半から10C前半にかけての讃岐は『令集解』編修に携った香川郡の秦公(惟宗)直本はじめ数多くの明法博士を輩出した事でも知られるのである。

調査地第2面は、弥生後期の遺構が見られて後、古墳～奈良時代の空白に次いで9～10C代に「公的」性格も示唆する建物群を残した。その後中～近世には耕作域となって集落としての痕跡は残さず、近・現代に到ったものである。

調査の成果は部分的・断片的であるが、開発と表裏で集積される“地下からのメッセージ”として、高松平野の生きた歴史景観を集大成する今後の課題には欠かせない一駒であろう。

参考・引用文献等

- 注 1) (財) 香川県埋蔵文化財調査センター『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報汲仏遺跡』1999
- 注 2) 中村浩『考古学ライブラリー5 須恵器』1988／中村浩「畿内と周辺地域の須恵器」『世界陶磁全集2 日本古代』1979／『香川県史1 原始・古代』1988 ほか
- 注 3) 高橋学「高松平野の地形環境分析Ⅳ」『弘福寺領讃岐国山田郡田凶関係遺跡発掘調査概報Ⅰ・第2次弘福寺領田凶調査事業に伴う調査概要』1996
- 注 4) 「第7表」典拠資料
- 2 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター『東山崎・水田遺跡』1992
- 3 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡－第二分冊－』1990
- * (財) 香川県埋蔵文化財調査センター『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報多肥松林遺跡』1995
- 4 大島和則氏教示(天理市教育委員会青木勘時氏調査による)。
- 5 今尾文昭「新益京の鎮祭と横大路の地鎮め遺構」『考古学と信仰』森浩一編 1994
- 6 赤松一秀「土器に書かれた則天文字」『伊達先生古稀記念古文化論叢』1997
- 7 『5』に同じ／今尾文昭・高橋誠一「古代横大路の地下遺構と地表遺構」『6』1997
- 8-1~14 奈良県教委『平城京二条二坊・三条二坊発掘調査報告一長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一本文編』1995
- 8-15 佐藤信『日本史学研究叢書・日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館 1997
- 9~11 井上雅孝「輪宝墨書土器と錢貨」『出土錢貨第7号』出土錢貨研究会 1997
- 12~30 平川南「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』1991
- 31 平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』1989
- 32, 33 鬼頭清明「郷・村・集落」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』1989

写真図版

図版1



1 上西原遺跡1B区第3遺構面大畦畔(南東から)



2 上西原遺跡2区第3遺構面不定形小区画水田(東から)



1 上西原遺跡1B区第3遺構面大畦畔プラント・オパール採取状況(南から)



2 上西原遺跡2区第3遺構面不定形小区画水田プラント・オパール採取状況(北東から)



1 上西原遺跡1B区第2遺構面SD01・02(西から)



2 上西原遺跡2区第2遺構面SD03(西から)



1 上西原遺跡1B区第1遺構面水田層(西から)



2 上西原遺跡3区旧河道(東から)



1 上西原遺跡1A区第3遺構面SX01(東から)



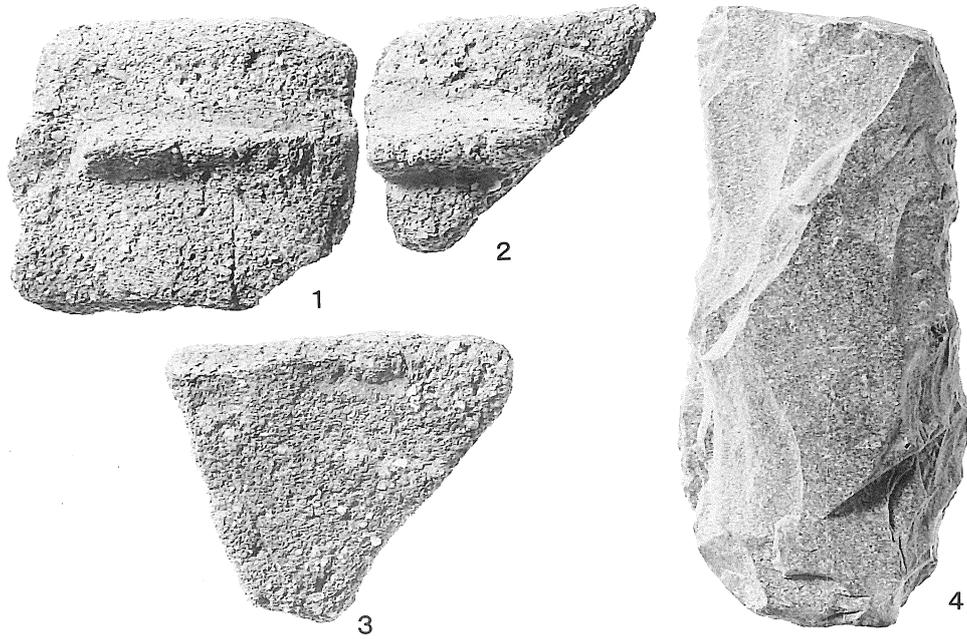
2 上西原遺跡1B区南壁土層



1 上西原遺跡2区南壁土層

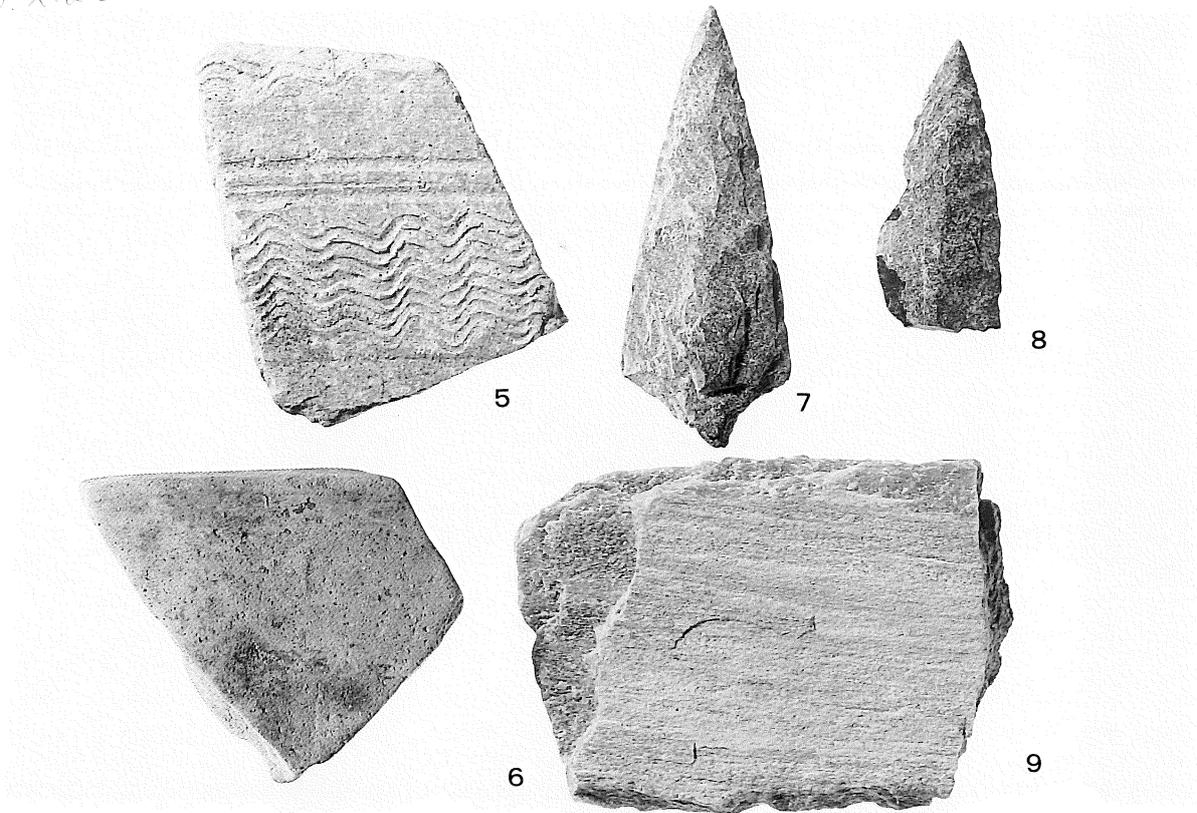


2 上西原遺跡3区南壁土層

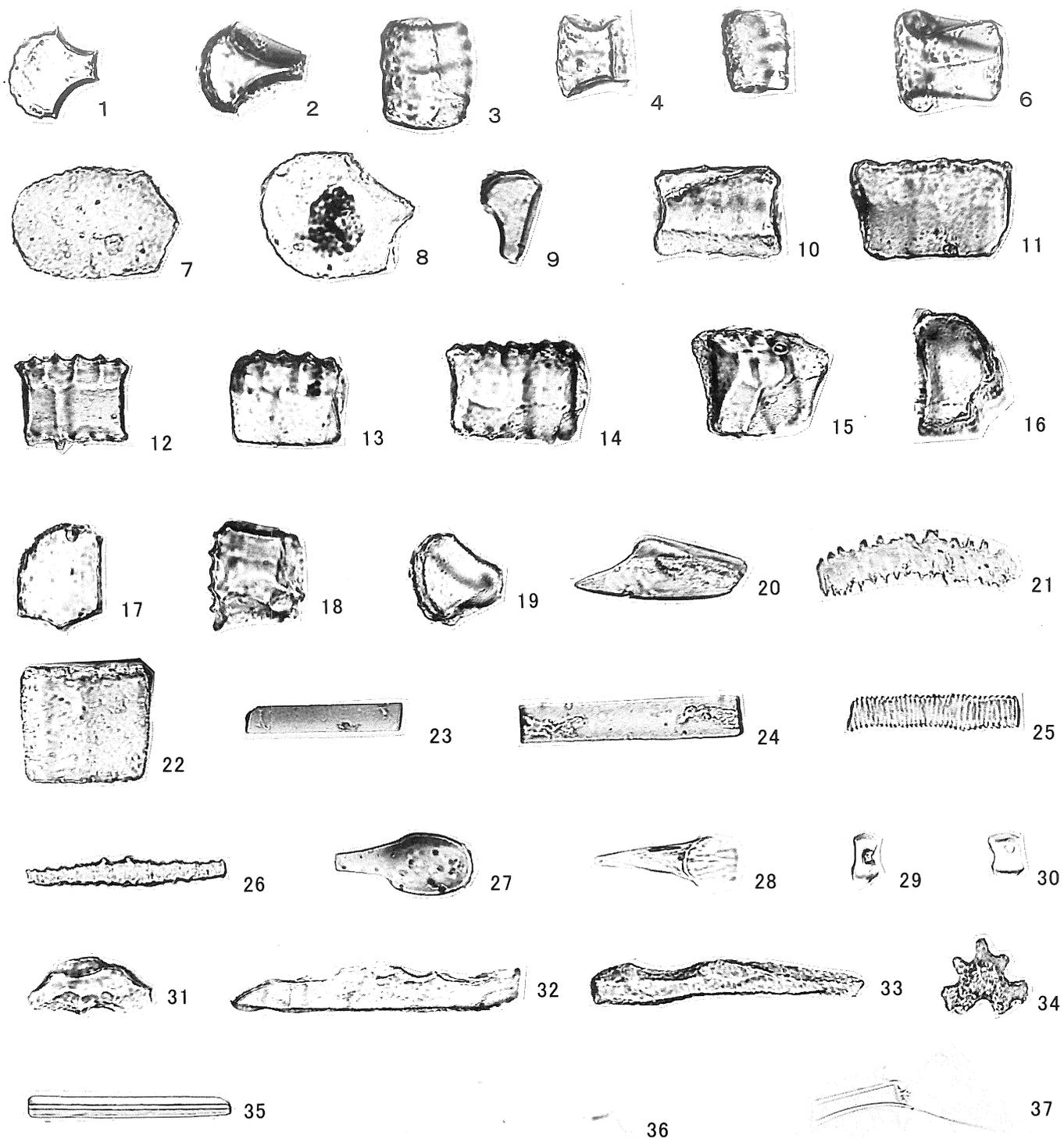


1 上西原遺跡1B区第3遺構面大畦畔付近出土凸帯文土器・打製石鍬

写真付



2 上西原遺跡1B区第1遺構面水田土壤層出土土器・石器



- | | | | | | |
|-------|----------|-------|----------|-------|---------|
| 1~6 | イネ | 7・8 | ヨシ属 | 9 | ウシクサ族 |
| 10・11 | キビ族型 | 12~15 | ネザサ節型 | 16 | オカメザサ属型 |
| 17 | クマザサ属型 | 18 | タケ亜科A型 | 19 | タケ亜科B型 |
| 20 | 刺状細胞 | 21 | 鋸歯状細胞 | 22 | 板状細胞A型 |
| 23・24 | 棒状細胞丸状A型 | 25 | 棒状細胞丸状B型 | 26 | 棒状細胞鋸歯状 |
| 27 | 毛状細胞A型 | 28 | 毛状細胞B型 | 29・30 | 鼓状細胞 |
| 31 | 樹木起源亀甲状 | 32・33 | 樹木起源刺状 | 34 | 樹木起源その他 |
| 35 | 動物珪酸体 | 36・37 | 火山ガラス | | (×100) |

上西原遺跡 プラント・オパール、その他(第5章参照)



1 汲仏遺跡柱穴列検出状況



2 同上 SK01検出状況



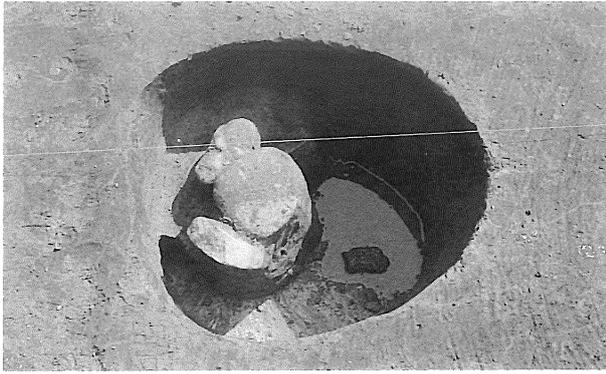
45-6 (裏)

1 汲仏遺跡SK01須恵器大型甕片

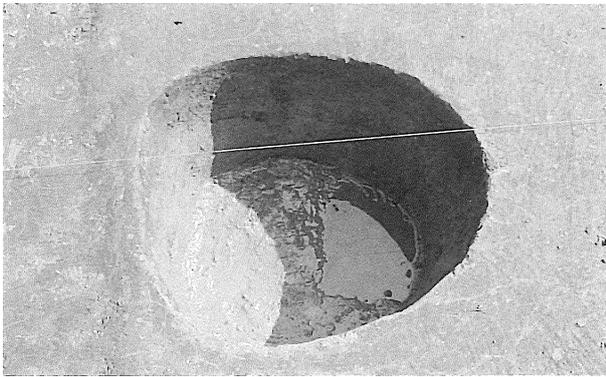


45-6 (表)

2 同 上 SK01須恵器大型甕(復原部分)



1 汲仏遺跡SP01掘削状況



2 同上 SP01完掘状況



3 同上 SP02/SP03掘削状況



4 同上 SP04/SP05掘削状況



5 同上 SK02出土師器坏



6 同上 SK01出土土師器坏



7 同上 SP02出土須恵器

X

46-8

46-15



1 汲仏遺跡SD21掘削状況



2 同上 SD21遺物出土状況



3 同上 SD21出土片口鉢 49-19



4 同上 SD21出土鉢 49-18



49-15

5 同上 SD21出土高杯



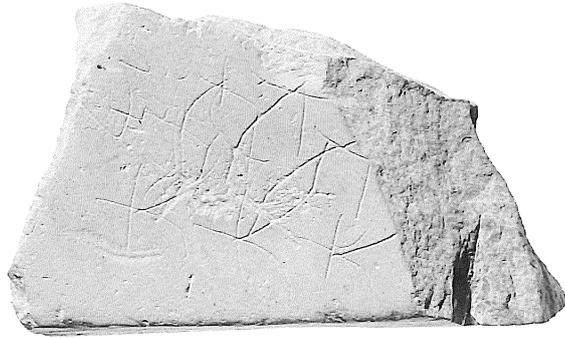
49-16

6 同上 SD21出土高杯



49-17

7 同上 SD21出土高杯坏部



13-1

1 汲仏遺跡SP01出土「大」字線刻石A面



13-2

2 同 上 「大」字線刻石B面

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみにしはらいせき こんぼとけいせき							
書名	上西原遺跡 附 汲仏遺跡							
副書名	太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第47集							
編集者名	川畑 聰・末光 甲正							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成12年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査積 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
かみにしはらいせき 上西原遺跡	たかまつしき た 高松市木太 町322番地 ほか	37201		34° 18' 35"	134° 4' 15"	H7.12.15 ～ H8.3.31	980 m ²	道路建 設
こんぼとけいせき 汲仏遺跡	たかまつし た ひ 高松市多肥 しもまち 下町	37201		34° 17' 56"	134° 3' 23"	H10.3.3 ～ H10.3.6	125 m ²	水路改 良工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上西原遺跡	生産	弥生時代 室町時代	大畦畔 不定形小区画水田 水田層		凸帯文土器 石鍬，石鏟		弥生時代前期 の水田址	
汲仏遺跡	集落	弥生時代 平安時代	溝，土坑 柱穴，土坑		高坏，壺，鉢 「大」字線刻石 須恵器甕，坏 土師器坏		大型甕片埋納 土坑	

上西原遺跡

附 汲仏遺跡

太田第2土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行日 平成12年3月31日
印刷 総合印刷ワークステーション(有)

